東北大学

平成25年度

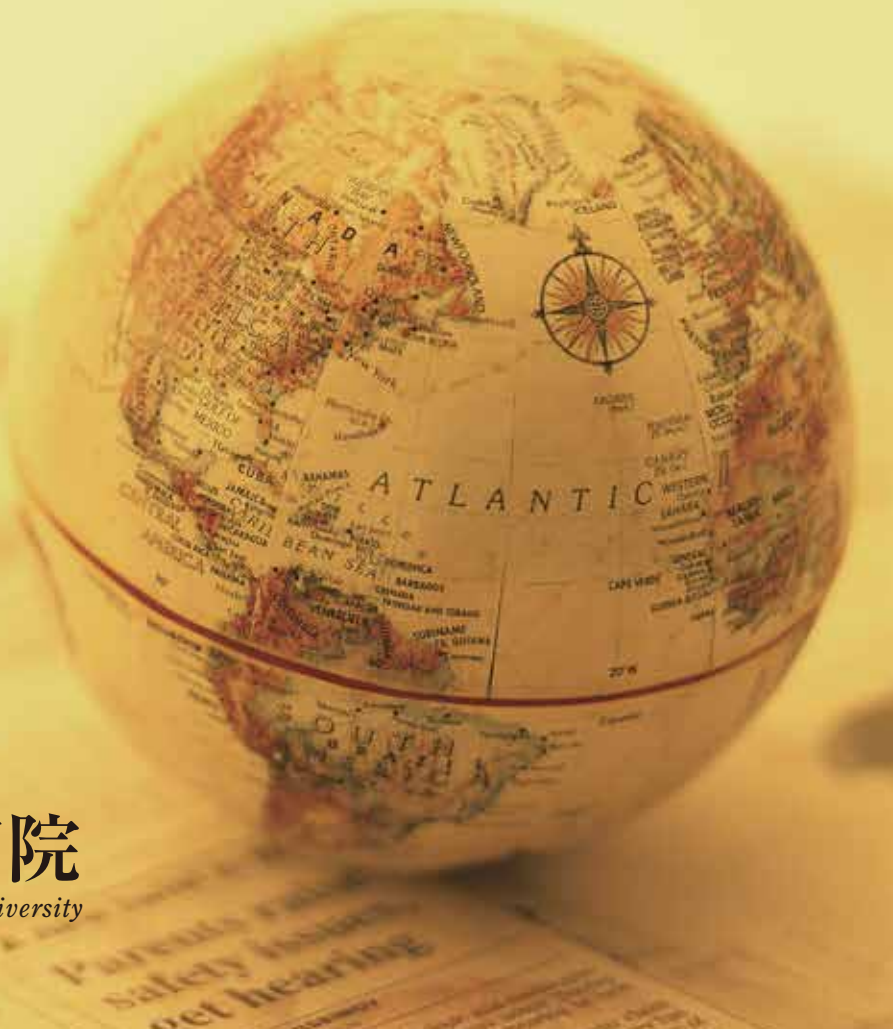
教養教育院セミナー報告

教養教育特別セミナー

東北大学のチャレンジ
～グローバル時代の教養教育

総長特命教授合同講義

教養はなぜ必要か
―就活に役立つ?



平成26年7月

東北大学教養教育院
Institute of Liberal Arts and Sciences, Tohoku University

巻 頭 言

教養教育院に所属する総長特命教授が中心となって企画立案し開催した2013年度の「特別セミナー」と「合同講義」の報告書を、ここにお届けする。

第3回目となる今年度の「特別セミナー」は、昨年4月8日（月）に開催された。共通テーマは「東北大学のチャレンジ～グローバル時代の教養教育」である。3名の先生方による話題提供の後、出席した学生も参加してのパネルディスカッションが行われた。本年度は、里見総長に開会の挨拶をお願いしたが、参加者の数は前年より増えたものの、やはり会場である萩ホールの席数に比べると少なく、次年度への課題となった。一方、第5回目となる今年度の「総長特命教授合同講義」は、昨年10月22日（火）に開催された。共通テーマは「教養はなぜ必要か―就活に役立つ？」であり、高等教育開発推進センターキャリア支援室の猪股歳之助教と総長特命教授2名の講義の後、出席した学生も加えての討論が行われた。この講義には、正規の受講生のみならず案内等で知った一般学生も参加し、総数100名を超えて盛況であった。なお、特別セミナーは、学務審議会ならびに高等教育開発推進センターの先生方の協力を得て開催されており、これら二つの組織との共催となっている。

二つのイベントは、セミナーと講義というように、厳密にはカテゴリが異なる授業形態であるが、構成は同じようなものとなっている。まず、教員側がテーマについて考えていることを話題提供（講義）し、学生に問題を投げかける。そしてパネルディスカッション（討論）では、学生側が主役となり、投げかけられた問題に対して反応し応答する。それを受け、再び教員側も反応し、応答する。この過程を経ることで、テーマに対する理解が「深化」し「進化」する。この議論の過程は、本冊子によりそのまま味わうことができる。ぜひ、教員と学生の真摯な姿勢での議論を追体験していただきたい。

また、本冊子には、参加した学生が会場内で記した質問や意見と、教員側によるそれらへの回答も合わせて収録した。学生による質問や意見は多岐にわたり、また、本質を突く鋭いものも多数あった。これらにもぜひ目を通していただければ幸いである。

なお、2010年度から始まった総長特命教授合同講義、および、2011年度から始まった特別セミナーの内容も、すでに冊子として公表している。これらも合わせて手に取っていただければ幸いである。

2014年2月15日

東北大学教養教育院長　　花輪 公雄

目　次

巻頭言（教養教育院長　花輪 公雄）…… i

第Ⅰ部　教養教育特別セミナー「東北大学のチャレンジ～グローバル時代の教養教育」

1.1. 教養教育特別セミナーの記録 …… 2

●司会（高等教育開発推進センター副センター長　関内　隆）…… 2

●開会挨拶（東北大学総長　里見　進）…… 2

●セミナー

・話題提供 1「東北大学の全学教育とは何か」（花輪 公雄）…… 3

・話題提供 2「復興へ、英知を結集して！」（原　信義）……10

・話題提供 3「歴史から見た教養教育―グローバル時代の今」（森田 康夫）……19

●パネルディスカッション（福西　浩、野家 啓一、話題提供者、参加者）……25

●閉会挨拶（高等教育開発推進センター長　木島 明博）……39

1.2. 特別セミナーに対する学生の評価 ……40

第Ⅱ部　総長特命教授合同講義「教養はなぜ必要か―就活に役立つ？」

2.1. 総長特命教授合同講義事前配布資料 ……49

2.2. 総長特命教授合同講義の記録

●司会（前　忠彦）……54

●はじめに（教養教育院長　花輪 公雄）……54

●講義

・「日本的雇用慣行と大学教育：進路選択の基礎知識」（猪股 歳之）……57

・「リベラルアーツで育むグローバル人材」（福西　浩）……66

・「教養と就活の関係と無関係」（野家 啓一）……73

●討論（花輪 公雄、海老澤 丕道、森田 康夫、工藤 昭彦、福地　肇、講義者、参加者）……80

●おわりに（高等教育開発推進センター長　木島 明博）……89

2.3. 合同講義　受講生の質問・意見と教員からのコメント ……90

2.4. 合同講義に対する学生の評価 ……92

あとがき……95

資　料

合同講義　受講生の質問・意見と教員からのコメント一覧 ……96

第Ⅰ部　教養教育特別セミナー

東北大学のチャレンジ～

グローバル時代の教養教育

平成 25 年 4 月 8 日

学務審議会・教養教育院・高等教育開発推進センター主催

TOHOKU UNIVERSITY

東北大学
教養教育特別セミナー

東北大学のチャレンジ～
グローバル時代の教養教育

日時

平成25年
4月8日(月)
13:30～15:30 受付開始 12:30

会場

東北大学百周年記念会館
川内萩ホール

問い合わせ 東北大学教務課全学教育企画係
TEL：022-795-7578
Email：kyom-k@bureau.tohoku.ac.jp

話題提供

花輪　公雄［教育・学生支援・教育国際交流担当理事、教養教育院長］
原　信義［震災復興推進担当理事、工学研究科教授］
森田　康夫［教養教育院総長特命教授］

パネリスト

花輪　公雄［海洋物理学］
森田　康夫［数学］
工藤　昭彦［農業経済学］
福西　浩［宇宙空間物理学］
野家　啓一［哲学］
原　信義［材料工学］
海老澤丕道［物理学］
前　忠彦［植物栄養学］
福地　肇［英語学］

司会

関内　隆［西洋史学］

東北大学教養教育特別セミナー

東北大学のチャレンジ～
グローバル時代の教養教育

東北大学は3.11からの復興の先頭に立ち、さまざまな人たちと協力して歩んでいます。世界をリードする研究を行い、世界に通用する力を備えた若者を世の中に送り出したいと考えています。新入生諸君には、チャレンジする気持ちをもって成長して欲しいと思っています。

セミナーでは、大学が教養教育をどう考えているかを説明し、パネルディスカッションでは諸君とともに大学教育について考えます。

この特別セミナーは、東日本大震災の直後から始まりましたが、過去に参加した学生諸君からは、討論が刺激になった、今までの考え方が変わったなどの声がでています。大学生活で自分の学ぶべきことを知り、自分の道を拓いていくために考えてみる機会にしませんか?

東北大学
教養教育特別セミナー

東北大学のチャレンジ～

グローバル時代の教養教育

◆次　第

1．開会挨拶　　東　北　大　学　総　長　　里見　進

2．セミナー

話題提供１「東北大学の全学教育とは何か」

教育・学生支援・教育国際交流担当理事、教養教育院長　　花輪　公雄

話題提供２「復興へ、英知を結集して！」

震災復興推進担当理事、工学研究科教授　　原　信義

話題提供３「歴史から見た教養教育―グローバル時代の今」

教養教育院総長特命教授　　森田　康夫

――― 休　憩 ―――

パネルディスカッション

花輪　公雄（海洋物理学）、原　信義（材料工学）、森田　康夫（数学）、
海老澤丕道（物理学）、工藤　昭彦（農業経済学）、前　忠彦（植物栄養学）、
福西　浩（宇宙空間物理学）、福地　肇（英語学）、野家　啓一（哲学）、
会場の皆さん

3．閉会挨拶　　高等教育開発推進センター長　　木島　明博（海洋生物学）

〈　司　会　〉　　高等教育開発推進センター副センター長　　関内　隆（西洋史学）

※今後の教育に役立てるため、終了後、アンケートへのご協力をお願いします。記入後、出口付近のボックスに入れてからご退場ください。

■問い合わせ
東北大学　教務課　全学教育企画係
TEL：022-795-7578
Email：kyom-k@bureau.tohoku.ac.jp

■ご意見等
東北大学　教養教育院
TEL：022-795-4723
Email：info@las.tohoku.ac.jp
http://www.las.tohoku.ac.jp

1.1 教養教育特別セミナーの記録

司会（関内）：新入生の皆さん、入学おめでとうございます。予定の時間となりましたので、東北大学教養教育特別セミナー「東北大学のチャレンジ～グローバル時代の教養教育」を開催いたします。開会に当たり、東北大学総長の里見進先生よりご挨拶を頂きます。里見総長よろしくお願いいたします。

開会挨拶

東北大学総長　里見　進

里見：東北大学の総長の里見です。皆さんとは、入学式の時にお会いしました。改めて入学おめでとうございます。今日は本当に風が強くて、皆さんのこれからの波乱万丈な人生を象徴しているんじゃないかと思います。もうちょっと集まってほしかったけれども、残念ながらすこし少ないですね。でも皆さんは、その中で選ばれた方々だと思います。どうぞ頑張ってください。

入試の制度がそうですから、皆さんは各々、例えば理学部や工学部などを目指して入学してきて、すぐに専門性を極めたいという強い思いを持っていると思います。それはそれで大変結構なことで、皆さんには前途洋々たる未来が開けていますから、ぜひ専門性を極めることを一生懸命やってほしいと思います。

ただ、本当にそれだけでいいのかという疑問は色々な教育の仕方で投げかけられています。教育の仕方とか学問の深さというのは、よく穴を掘るということに例えられることが多いのですが、専門性の部分だけで穴を掘り始めると非常に効率がよいので、最初はどんどん深く掘れます。ただ、ある一定のところまで来ると、なかなか掘りにくくなってしまって、どうも止まるらしい。そういうことを防ぐために、専門性のある周辺をある程度広く掘ってゆくと、最初は効率が悪くてなかなか掘り進めないんですが、徐々に、掘っていくうちに、専門性だけを掘っていくよりもさらに深い穴が掘れる。学問的にも進歩するということが言われています。じゃあ教養と言いますか、周辺だけを掘っていけばいいんじゃないかと思うかもしれませんが、やっぱり専門性もある程度掘らないと、なかなかその周辺も掘りにくくなる。つまり、専門性である程度深まった時に、よく理解できる周辺というのも広くなる。その意味では、専門性とその周辺も含めて、大きな穴を掘っていくということが、非常に大事になってくると言われています。

じゃあこの周辺の部分とは一体何かというと、これはなかなか難しい。皆さんリベラル・アーツという言葉を聞いたことがあると思いますが、それは古代ギリシャ・ローマの時代からあった教養科目のようです。基本的に固まってきたのは、我々の大学の始まりで、900年ほど前の中世の時代に遡ります。そこで専門科目と言われていたのは、社会の仕組みを理解するための法学というもの、神様の領域を理解する神学というもの、それから命の領域を理解するための医学というもの、この3つが専門科目と言われていて、それを修める前に学生一般が基本的な常識として修める学問というのが文系の3学科と理系の4科と言っている。前者が文法学や、論理学や修辞学。それから後者が算術や幾何学、天文学と音楽です。こういうものを修めておけば、それから後の専門的な学問になっても、多分あまり迷うことなく修められ

るんじゃないかと。そういう非常に定型的な形があったんですが、だんだん世の中が進歩して、学問も進歩してきました。科学技術がどんどん発達して便利になっていった。学問の分野もたくさん増えていった。それから価値観も多様化していると。最近は国際的なグローバルの時代になってきた。そういう意味で、本当にその周辺の学問としてどういうものを修めていけばいいかということが、なかなか分かりづらくなってきて、今でも実際は大学の中で模索をしている状況です。

今日は、そのグローバル化した時代における教養のあり方はどうあるべきかについて、これまでの先生方が考えられたことのいくつかをお話しされると思います。ただこれが全てではなくて、大学自体もまだ教養教育というのは本当にどうあるべきか、ということを迷っております。ですから、皆さんにも一緒になって考えてもらいたい。と言いますと、「何だよ、ちゃんと教えてくれないじゃないか」というふうに言うかもしれませんが、大学というのは本来そういうところです。答えのないものを皆さんと一緒に、教員も一緒になって考えていくというのが、大学の本来のあるべき姿です。その意味で、ぜひ皆さんは今日この会に参加して、大学の生活を始める第一歩として、共に考えていくということをまずひとつ学んでください。

それから、このようなことを実際の世の中で役に立てるためには、単なる座学で終わらせても仕方がない。今日学んだことを、実際の社会といいますか、自分の生活の中で活かせるかどうかを試していく必要性が出てくる。課外活動等を含めて、人と人との交わりというものを、このような機会でたくさん作る努力をしてください。

大変説教じみた話になりましたけれども、皆さんが大学の生活の第一歩を始めるに当たって、私から言いたいこと、言っておきたいと思ったこと、こういう話をさせて頂きました。

この会に参加して、皆さんがいいものを持ち帰ることを期待しております。どうぞ頑張ってください。

司会（関内）：里見総長、ありがとうございました。それでは、本日の日程について私の方から最初にご紹介いたします。司会を担当いたしますのは、私、高等教育開発推進センターの関内でございます。どうぞよろしくお願いいたします。画面にありますように、これから３人の先生方から話題提供をして頂きます。若干の休憩をはさんで、パネルディスカッションをいたします。毎年行われているこの特別セミナーの売りは、パネルディスカッションでありまして、ご参加頂いたフロアの新入生の皆さんから、たくさんの質問をいつも頂いて、大学の執行部を務めている理事の先生方や名誉教授の先生方など、本学で活躍されている先生方から大変示唆に富むお答え、貴重なお考えを披露してもらっています。パネルディスカッションに向けて、ぜひ、どんなことを質問したいか、こういうことを先生方に聞いてみたいというのがありましたなら、各自メモを取って後程、皆さんから出して頂ければと考えております。

それでは３本の話題提供に入ります。初めに話題提供１としまして、「東北大学の全学教育とは何か」と題し、教育・学生支援・教育国際交流担当理事で、教養教育院院長でもあります花輪公雄先生にお願いいたします。花輪先生、よろしくお願いいたします。

セミナー　話題提供１
「東北大学の全学教育とは何か」

花輪 公雄

花輪：皆さんこんにちは。ただ今紹介して頂きました、教育を担当しております理事の花輪でございます。最初の話題提供ということで、「東北大

学の全学教育とは何か」という題でお話しさせて頂きます［スライド 1］。初めに結論です。このスライドにありますように、私はこう考えます［スライド 2］。まず全学教育ですけれども、これは「全学部の学生を等しく対象とする教養教育のことである」と、そういう定義をしたいと思います。では、教養教育とは何でしょうか。私は次のように表現したいと考えています。「専門教育による知識と技能をもって社会に貢献する、その時に必要な力。言うならば、社会貢献力。こういうものを養うための教育が教養教育である」と。社会貢献力、私の作った造語です。では、社会貢献力とは何かということですけれども、「自分や他人を理解する力、他の民族や国家・宗教、これを理解する力。社会を分析する力、科学と技術を理解する力、人や芸術を愛する力、課題を設定する力、他と協調・協働して解決に結び付ける力など、こういう諸々の力が総合・統合化されたものである」というふうに私は考えます。別の言葉で言いますと、「現代社会において必要とされる素養」と。各人が持つべき素養。そういうふうに言えるのではないでしょうか。でもちょっと抽象的ですね。具体的には、私は 4 つのカテゴリーと言いますか、4 つの範ちゅうで考えたいと思います。1 つ目、社会学や経済学、日本と世界の歴史を理解する学問である歴史学、あるいは地理学。まとめて言いますと「人文・社会科学リテラシー」。これを身に付けるための授業科目等が、教養教育のための授業科目であると言えるかもしれません。リテラシーという言葉ですが、皆さんご存じの方もおられるかもしれませんが、一番下に定義を書いておきました。「その分野の基本的な知識を有し、理解し操ることができる基本的な能力のこと」。よく『読み・書き・そろばん』という表現もされますけれども、その分野の基本的な知識を持っており、それを理解して操ることができるような、そういう力のことをリテラシーと言います。2 つ目のカテゴリーですけれども、2 つ目は、数学や自然科学、技術・工学などの「自然科学リテラシー」を身に付けるための授業科目。3 番目、語学、情報技術、表現の仕方などの技能、あるいはスキル。これを磨くための授業科目。4 番目は、倫理学、哲学、宗教学、文学、美術・音楽などの芸術、あるいは保健・体育などの結果として豊かで健康な心身を作るための授業科目。こういう 4 つの授業科目が考えられます。以上が私の結論であります。

次に、皆さん今回入学された、大学ってどんなところということを少しお話しします［スライド 3］。これも、私はこう考えるということをお話しします。大学とは「知を継承し、知を創出するところ」です。かなりの人がこう考えていると思います。すなわち、大学とは人類が営々と築き上げてきた知の体系を学び、さらに新しい知を加えていくところです。ここで知を学ぶこと、これは教育ですね。新しい知を生み出すこと、これが研究です。ですから大学は、教育と研究を両輪にして歩んでいるということができます。さて、知の体系を学ぶためにはどうすればいいのでしょうか。大学、学部であれば 4 年、学部によっては 6 年のところもありますけれども通常 4 年。この 4 年という短い間で人類が獲得した膨大な知識を学びきれるものではないことは自明であります。大学で学ぶべきこと、それは「学び方を学ぶこと」です。そして教員は、どこにどのような知があり、その知がどのようにして獲得されてきたのかを、学問へと皆さんを誘うことです。皆さんの専門分野、私はこれがやりたいということで本学に入学されていると思いますけれども、その皆さんの専門分野ですら、大学で行う授業科目だけでは得られない膨大な知があります。すなわち、皆さんが主体

的に学ぶ必要があるわけです。大学での学習は、皆さんのこれまでの小学校、中学校、高校での学習とは全く違ったものです。東北大学ではこのような受け身の学習から積極的に自分から働きかけて学ぶと、そういう学習姿勢の転換を「学びの転換」という言葉で表現しています。私たち教員は、皆さんの「学びの転換」にお手伝いしますけれども、皆さんは自らの意思で「学びの転換」を行ってください。

さてもう皆さんには、私が手に持っているものですけれども、「東北大学全学教育ガイド」が渡っていることと思います［スライド4］。これは今年度新しく作成したものでありまして、全学教育の構成、そしてその意義、現在本学が重点的に取り組んでいるいくつかのことを簡潔に紹介したものです。皆さんがこれから全学教育科目、これとこれとこれを取ろうと、そういうふうに選択する必要があるんですけれども、その時の参考にして頂ければというふうに思います。このパンフレットの中に全学教育の位置付けとしまして、文章を書かせて頂きました。この中に、次のようなメッセージを入れております［スライド5］。「皆さんは将来、大学で得た知識や知恵、そして様々な力を生かして社会へ貢献することが期待されています。これを実現するためには、“社会へ貢献する力”を養う必要があります。抽象的ですが…」ということで２枚目のスライドでお話しした内容を記させて頂きました。その下のところに記述されているのは東北大学の基礎教育としての全学教育ということで、全学教育の中身を３つの授業科目の類型に従って分けています［スライド6］。私は2枚目のスライドで4つに分けましたけれども、さらに別の観点から３つの科目類ということで区分して提示しております。１番目が「基幹科目類」。人間論、社会論、自然論という言葉で代表されますけれども、豊かな教養と人間性に裏打ちされた知的な探求を行う基盤となる知識と技術を養う。これを基に、２番目の「展開科目類」に移ります。学問への意欲を高め、専門教育・大学院教育へと展開する学問的・人間的基盤を養う授業科目。例えば、人文科学、社会科学、自然科学、総合科学等の基礎的な授業科目がこれに当たります。３つ目の科目類は「共通科目類」。現代人として生きるために必要不可欠な能力および基本的な素養と技能を養い、能力や技能の自己開発のための起点を形成するという目的であります。転換・少人数科目、後でもお話ししますけれども基礎ゼミなどがこれに当たります。語学教育、情報科目、保健体育等々もこの中に入ります。

さて、東北大学ではこの全学教育を、より充実するための制度といたしまして、いくつかの工夫を行っています［スライド7］。その中でピア・サポート制度、これをご紹介いたします。ピアというのは、右下の方に書いてありますように、仲間という意味なんですね。サポートは支援ですね。ですから、ピア・サポート制度というのは学生による学生への支援制度と言うことができます。このことによって、支援される学生も、支援する学生も共に伸びる、育つことができると。３つの制度を持っています。ひとつは「ティーチング・アシスタント制度」。TA とよく略します。授業を進めるに当たって、教員の手伝いをする制度です。学生による教育補助業務と呼べるものです。２つ目と３つ目は今年度から、この４月１日から正式に導入した制度でありまして、ひとつは「スチューデント・ラーニング・アドバイザー（SLA）制度」。これは数学・物理・化学に関する学習相談が主な活動項目です。実際に行っている活動の場所は川内北キャンパスの郵便局側にマルチメディア棟がありますけれども、そこの１階のエントランス

ホールで、月曜日から金曜日の毎日 2 コマ目から 5 コマ目、およそ 10 時頃から 5 時頃まで SLA と呼ばれる学部学生･大学院生が待機しております。そこで授業を聞いて分からなかったこと、様々な相談をすることができる、そういう制度であります。次に、「グローバル・キャンパス・サポーター（GCS）制度」。これも新しく設けた制度です。後でも言いますけれども、皆さんには早い時期に海外に行って欲しいということを考えているんですけれども、留学ですね、すでに留学経験のある学生がこの GCS、グローバル・キャンパス・サポーターになって頂きましてその経験を生かして留学に関する様々なアドバイスを行い、留学への動機付けを行うことを目的としております。

さてこの全学教育、時代も変わりますし［スライド 8］、それから、私たちの教育技術と言いますか､そういうものもどんどん変わっていきます。毎年毎年、シンカ、進む方の進化、並びに深くいく方の深化に向けて、我々は議論をしております。日本や世界の経済･社会状況は目まぐるしく、かつダイナミックに変わっています。社会の求める「人材」も次第に変わってきます。そこで、本学の全学教育も常に進化、そして深化させる必要がありますということで、例えば今年度から新たに始まる制度や授業科目を紹介しますと、直前のスライドでお話ししました SLA 制度、あるいは GCS 制度を導入すること。2 つ目は授業科目の充実も行っています。ひとつ目は「展開ゼミ」というものを導入します。2 つ目は英語の授業科目を強化します。2 コマ追加します。3 つ目は中国語の授業科目の強化も行います。このうち、特に説明しておきたいのは（1）の「展開ゼミ」の導入です。これは、皆さん第 1 セメスターすぐに「基礎ゼミ」を取ることになります。160 クラス準備しております。皆さんは約 2,500 名の入学生ですので、1 クラス 20 名以下の少人数教育です。担当する先生方は、全ての部局から出てきて頂いております。単なる講義、座って話を聞く、そういう授業科目ではありません。皆さん自身が行動する課題解決型と呼ばれる授業科目です。この活動の中から、9 月末ですけれども基礎ゼミ発表会も開催しております。皆さんがこれを受ける中、皆さんの先輩方からもっともっと、これをやりたいと、もっと深めたい、第 1 セメスターだけではなくて、第 2 セメスターもやりたい、自分はこの基礎ゼミ取ったんだけれども、別の「基礎ゼミ」を取りたい、そういう要望がありました。そこで、それに応えるため「展開ゼミ」、第 2 セメスターで同じようなゼミを開くことを決めました。今年度は約 30 コマ程度、開講される予定です。

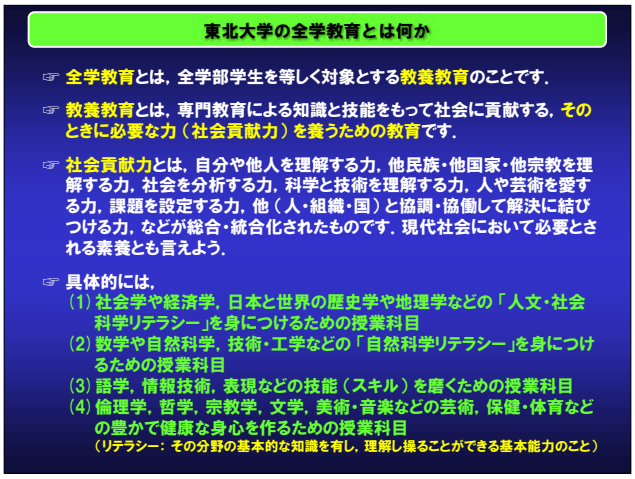
さて、今、毎朝新聞見ますと、人材育成という言葉が本当にひっきりなしに出てきます［スライド 9］。なぜ今大学での人材育成なのでしょうか。というところを書いたのがこのスライドです。日本・世界の経済状況、あるいは日本の環境といったものが、人こそ日本の非常に大事な資源であると、そういう認識に至りまして、社会へ出る出口のところの教育を担っている大学に、非常に大きな期待があるわけです。では一体、どういう人材像でしょうか。右の方に書いてあります。2 つの言葉が現在キーワードとして使われています。「グローバル人材」、国際的に活躍できる人材。それから「イノベーション人材」、イノベーション、革新あるいは刷新という言葉ですけれども、新しい価値を創造・創出できる人材、革新・刷新できる人材、これがイノベーション人材です。このような、2 つのキーワードで表現されるような人を大学が育てるということが非常に重要な時代に、現在なっております。特に、グローバル人材に向けて私たち東北大学では現在、2 つの大きなプロ

ジェクトを進行中です［スライド 10］。ひとつは“グローバル 30”プロジェクト。これは、実は今年度で終わりますけれども、過去 4 年間走らせてきました。多くの留学生を本学に受け入れるプロジェクトです。現在 1,500 名の、多くの国から留学生が来ていますけれども、さらにこれを倍増しようという目標に向かって現在進んでおります。この中では英語のみで教育や研究指導を行う学士コース、3 つの学部で持っていますし、大学院では 13 の、英語のみで教育を受けることができるコースを持っています。もうひとつは、昨年度の後半から動き出した“グローバル人材育成推進事業”と呼ばれる事業があります。今年度も含めて、あと 4 年間走ります。目的は、多くの学生を海外大学に派遣するプロジェクトです。特にスタディ・アブロード・プログラム、短期間の、短期間と言いますのは 2 週間から 2 ヶ月ぐらいをターゲットにしているんですが、スタディ・アブロード・プログラム、短期留学プログラムを開発するということが喫緊の課題です。1 年生から 2 年生の間に、数週間の短期留学をしてもらいたいと考えております。当面、500 名程度を考えております。

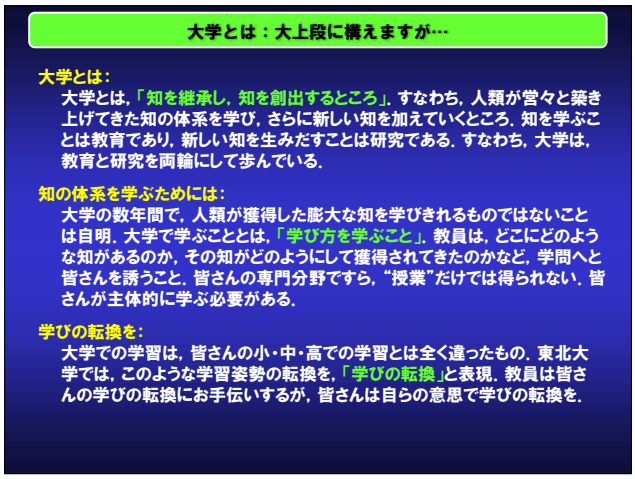
私の講演の最後です［スライド 11］。皆さんの中には、せっかく、ある専門を勉強したいというふうに、早く入ってきたので早く専門教育を受けたいと、そういう人もいますけれども、そこで得られる知識そのものというのは、その賞味期限。ご存じですね。食品だったらおいしく食べられる、食品をおいしく食べられる期間のことの賞味期限と言うんですが、その知識の賞味期限というのはとっても短いんですね。すぐ知は付け加えられます。大事なことは、知識を学び続ける意思・気持ち・精神と、学ぶための技能・方法・やり方ですね、これを身に付けること。これを身に付けるのに必要なものが教養であります。より幅広い教養がより高度で、強固な専門知識の獲得に導きます。総長の里見先生は穴を掘ることに例えましたが、私は山を築く方に例えてしまったんですけれども、より幅広い教養が、より高度な専門知識を得ることができますし、皆さんそれをさらに高くすることができます。どうぞ皆さん、本学で思う存分学んでください。そして、大きくなってください。東北大学は皆さんに大いに期待しています。ご清聴ありがとうございました。

司会（関内）：花輪先生ありがとうございました。総長と教育担当理事が、打ち合わせなしにもかかわらず、まさにあうんの呼吸で、同じ方向性を見据えた主張でもって締めくくって頂きました。ありがとうございます。

［スライド 1］

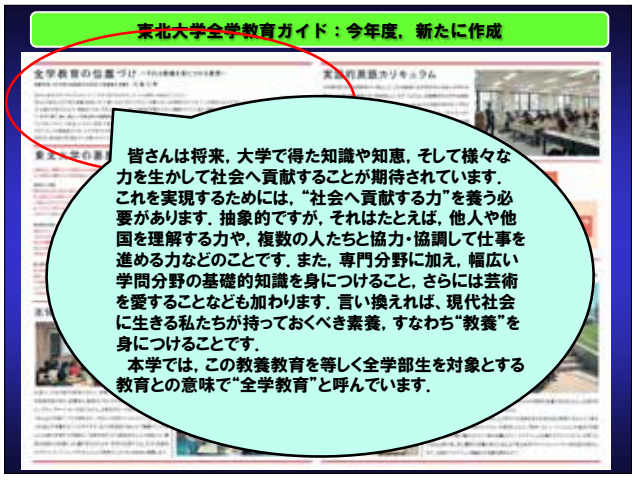


［スライド 2］



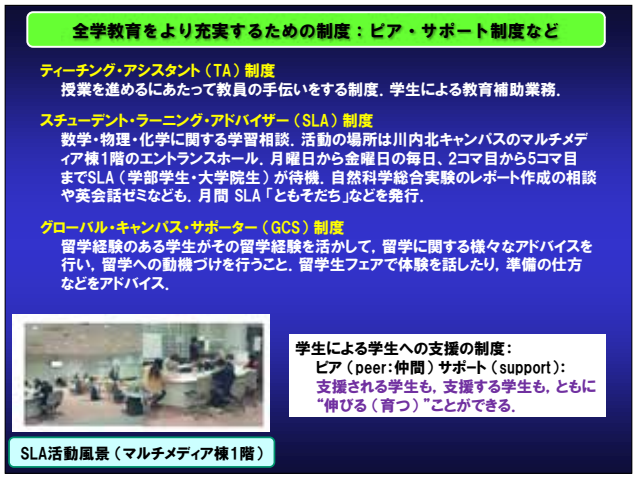
［スライド 3］

［スライド 4］

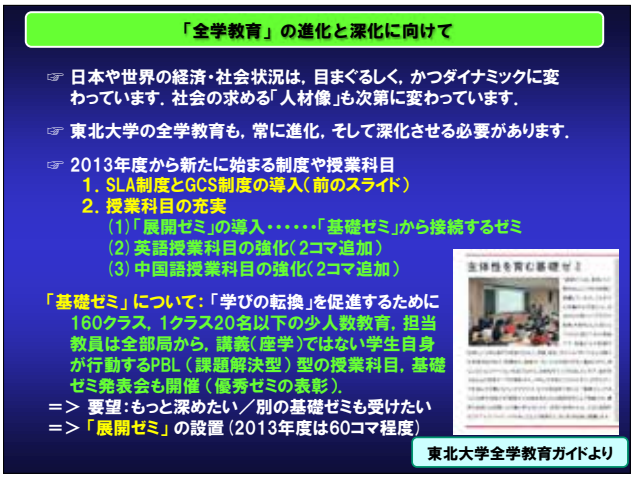


［スライド 5］

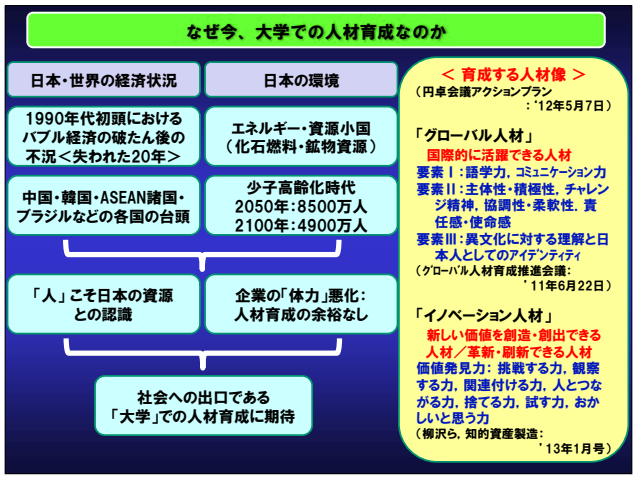
［スライド 6］



［スライド 7］

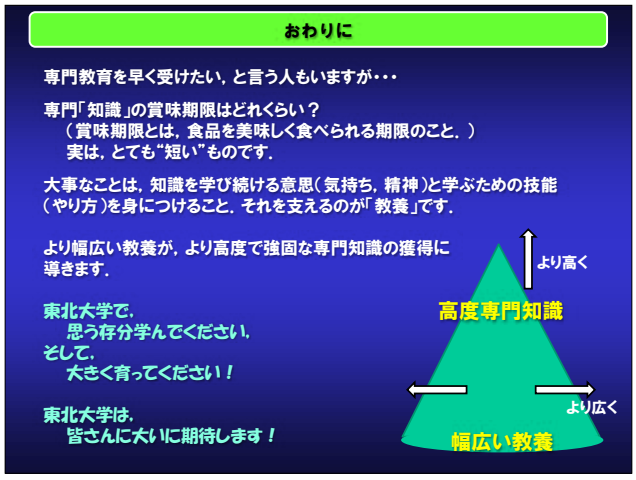


［スライド 8］



［スライド 9］

［スライド 10］



［スライド 11］

司会（関内）：では続きまして震災復興推進担当の理事で、工学研究科教授の原信義先生に話題提供の２番目、「復興へ、英知を結集して！」と題してお話を頂きます。原先生、よろしくお願いいたします。

セミナー　話題提供２「復興へ、英知を結集して！」

原　信義

原：皆さんこんにちは。ご紹介頂きました原と申します。［スライド1］花輪先生と同じ理事ですが、私は震災復興推進を担当しております。私はもともと工学研究科材料科学総合学科の教員で、材料科学が専門です。今日は残念ながら材料の話ではなく、私が今仕事としております震災復興に関わるお話から、特に皆さんがこれから東北大学で勉強していく上で参考になるようなことがお話しできればいいなと思っております。簡単に言うと、花輪先生の話の続きです。私がお話しするのは、自然科学もものすごく大事だけれども、同時に人文社会科学に関する知識も重要だということ。つまり、理系の人は文系のこともよく勉強した方がいいし、反対に文系の人は理系のことをよく知った方がいい、ということを、今日はお話ししたいと思います。さて、4月4日の入学式で、総長の里見先生から、「後世の人たちに奇跡の復興だ、と呼ばれるような創造的な未来を作るために、この東日本大震災の同じ時代を生きた者同士で､我々教職員と一緒に皆さんも頑張ってほしい」というお話があったと思います。そのためには大学の持っている英知を結集する必要があるということです。皆さんにもぜひ、この知に加わって頂きたいと思います。

［スライド2］私から言うまでもなく皆さんよくご存じだと思いますが、2年前の3月11日に発生した東日本大震災は、我が国の観測史上最も大きな、マグニチュード9という地震と、それによって波高10メートル以上､最大遡上高が40メートルという非常に大きな津波が襲って、大変大きな被害が生じたわけです。

［スライド3］今回の震災のひとつの特徴が複合的、あるいは多重的巨大災害であるということです。もうずいぶん昔、昭和初期の頃、「昭和の三大台風のひとつ」と呼ばれる室戸台風の後に有名な物理学者の寺田寅彦という方が書いた随筆の中だったと思いますけれども、「日本は、繰り返し繰り返し大きな自然災害を受けて、非常に特殊な民族である」という一文があります。そして彼は、「自然災害の影響は文明が進めば進むほど大きくなる」ということを、今から70年、80年ぐらい前に言っているのです。まさに、今回の災害を言い表しているのではないでしょうか。原子力発電所という、文明の利器として我々が快適な生活をするために生み出した文明の進んだ姿。これがこの震災で、逆に大きな被害を生む原因になりました。それが今回の震災の特徴です。

［スライド4］そして、震災の直後によく使われたのが「想定外」､「未曾有」､「千年に一度」というような言葉だったと思います。「未曾有」というのは未だかつてないことを意味しています。しかしながら、巨大地震・津波は過去にも度々起こっていました。それから、「千年に一度」という言葉のもとになった、869年の貞観津波。日本では平安時代のことですけれども、この津波以降も仙台平野に巨大津波が襲ってきたことがありました。伊達政宗の時代の1611年、慶長津波と呼ばれるものです。約400年前にも巨大津波が起こっていたということは、一部では知られていたわけですね。では、我々にとっての「想定」とは、一体何だったのでしょう。それはここに3つあります。1つ目は、宮城県沖地震はだいたい25

年～ 40 年の周期で起こるということ。2 つ目は、その地震の規模は最大でもマグニチュードで 7.5 であるということ。3 つ目は、仙台平野の津波被害は少ないということでした。

［スライド 5］これは、過去に発生した宮城県沖地震をまとめた表です。地震に関して科学的に取り扱えるようになった 1800 年以降だけ見てみますと、だいたい 36 年周期で発生し、地震の大きさもマグニチュード 7 から 7.4 ぐらいです。これに比べると、東日本大震災の地震ははるかに大きい。ただ周期としては、1978 年の宮城県沖地震から数えて 33 年ぐらいでしょうか。ですから、周期的には「想定」とぴったり合っています。けれども、大きさはけた違いに違ったといえます。

［スライド 6］それから津波について。これは、チリ地震などによる津波を除き、日本近海で起こった地震によって発生した津波を江戸時代からまとめたテーブルです。先ほどの表（スライド 5）に示しましたように、1800 年以降宮城県沖地震というのは 9 回ぐらいありますが、宮城県沖地震で津波の被害があったのは、1835 年と 1861 年の 2 回ぐらいです。ここでは津波の規模 m を、－ 1 から 4 の 6 段階で表しています。この 2 回の津波規模も 2 と 1 ですので中規模、波の高さにして最大 6 メートルぐらいになります。こういうところが、先ほど私がお話しした「想定」につながったわけです。

［スライド 7］ところが、実は 2011 年の 10 年前の 2001 年には、「貞観津波」級の巨大津波が再来するかもしれないということを予測した研究論文が発表されています。この論文の著者の箕浦先生、今村先生は、それぞれ東北大学の理学部と工学部の先生です。ですから、この論文は理学と工学の先生が協力して、共同研究をした成果です。論文タイトルを日本語に訳しますと、「869 年貞観津波堆積物および東北の太平洋沿岸における巨大津波の再来周期」となります。

［スライド 8］箕浦先生は、実はこの論文が書かれる 15 年ぐらい前から、仙台平野で地質調査を行っていました。海岸線からずっと内陸に向かって、海から押し寄せた砂が堆積している層がないかどうか、土壌のボーリング調査をしていました。これが砂の層です。貞観津波の堆積層がこうあります。その下に、2 層ぐらい別の堆積層があるということが分かりました。だいたい 3km、4km ぐらい内陸まで津波が来ています。どの辺りまで津波が届いたかわかると、どのぐらいの大きさの波が来たかがシミュレーションできます。津波工学で有名な今村先生が当時計算され、仙台湾に 8 メートルぐらいの高さの津波が来たのではないかと予想されました。こういうシミュレーションが、実は 10 年前にされていたわけです。

［スライド 9］論文の結論の部分に、「巨大津波の再来周期は 800 年から 1100 年である。貞観津波が起こってからもう 1100 年以上の時間が経っている今、再来周期を考えれば、仙台平野を巨大津波が襲う可能性は高い。我々の数値シミュレーションによれば、貞観クラスの津波が襲えば、沿岸地域の平野は 2.5 から 3km 内陸まで浸水するだろう。」こういう見事な予測がされているわけです。

［スライド 10］「まなびの杜」という本学の広報誌があります。箕浦先生は、先ほどの論文と同じ年に発行された「まなびの杜」にも、同じような警鐘を鳴らす文章を書かれております。

［スライド 11］さてこの貞観津波、今から千年以上も前に起こった地震・津波ですが、なぜこんなによく知られているのでしょうか。実は、この貞観津波があったとみんなが信ずる背景には、自然科学的にも、人文社会学的にもそれが証明できるからです。まず 1 つ目、平安時代の歴史書「日

本三大実録」に書かれています。読むのは時間の関係で省略しますけれども、歴史書に津波の記述があるということ。それから２つ目、宮城県の北の端から茨城県に至るまで、非常に広い海岸線沿いの各地に伝承が残っていること。

［スライド 12］そして３つ目が、先ほど申し上げました、最初に箕浦先生が発見した津波堆積物です。2001 年の箕浦先生の論文等を見て、「宮城県沖地震が 30 年以内に 90％以上の確率で来る」と予測されている時代ですので、文部科学省が当時、「宮城県沖地震における重点的な調査観測」という研究プロジェクトを５年間にわたって行いました。その中で、産業技術総合研究所（スライド中は「技術」が抜けています）、通称産総研と呼ばれる研究所が仙台平野だけではなくて、石巻まで含めた広い範囲で、もう一度箕浦先生がされたような地質調査を行いました。これがその時のデータの一つです。このように砂を中心とした堆積物があるわけですね。この堆積層が、なぜ貞観津波だと分かったか。砂の堆積層の上に白い部分があるのが見えますでしょうか。これが実は、火山灰の層。915 年に十和田火山が大噴火し、その時に火山灰が堆積してできたとみられます。この噴火がこの過去２千年の間で、日本の火山で一番大きな爆発と言われていて、東北地方全体に火山灰が降ったという記録がたくさん残っています。915 年の火山灰の層の直下にある砂の堆積層は、869 年の貞観津波に違いないと、津波堆積層の年代が特定されました。これは非常に幸運なことでした。通常、地質調査で年代を判定するのは、放射性炭素を使った分析ですが、数百年単位で誤差が出ます。貞観津波は、年代が見事に特定できるデータだったのです。

［スライド 13］これは、仙台市内から山元町に広がる仙台平野の複数の場所で、地質学的痕跡をまとめた図です。縦軸の左側は深さ方向、右側は年代です。ここに、貞観津波の跡があります。場所によっては、その後の慶長津波の痕跡と思われるものが、ところどころですが見られます。その下にもっと古い時代の津波の跡があります。調査した産総研のグループのまとめでは、450 年から 800 年周期で巨大津波が発生しているという結論でした。

［スライド 14］その調査で、貞観津波の跡が見られた場所を赤丸で地図上に記録してあります。一番右の地図は、3.11 の大津波の時の浸水域です。この２つの地図を重ねてみますと、ぴったり合うのです。ですから、東日本大震災の津波が貞観津波とほとんど同じ規模であったということがよく分かります。実は 2010 年までには、このような研究がまとまっていました。

［スライド 15］これは、箕浦先生、今村先生と同じように津波のシミュレーションをやって、どこまで浸水したかということを地図上に表したものです。こちらは石巻平野ですが、先ほどの仙台平野と同じように東日本大震災の浸水域と重ね合わせると、やはりぴったり合います。こういうことが、実は地震の半年前の 2010 年８月に発表されていたわけです。

［スライド 16］この論文のタイトルは、「平安の人々が見た巨大津波を再現する」。前書きに、「このような研究成果が、巨大津波に対する『備え』に生かされることを期待しています」という一文が書かれています。

［スライド 17］まとめには、ひとつは先ほどのスライドにもありましたが、「450 年～ 800 年程度の間隔でくり返し大きな津波が来ている」、「これから起きる可能性も否定できません」、さらに、「そういうことは一般には知られていません」と書かれています。確かに、私自身も後からこうい

う記述を読んで、初めて知ったわけで、その辺に「想定外」という言葉の意味があるのです。しかし、ある人にとっては、巨大津波の再来は全く想定外ではなかったのです。

［スライド 18］貞観津波の後にも、大きな津波が来たことがあります。1611 年の慶長津波。年代が新しいこともあり、津波の後すぐに、農家のお百姓さんが農地を元に戻すために泥とか砂を全部よけてしまったようです。ですから、あまり痕跡が残っておらず、地質調査では明確な結果が出ていません。

［スライド 19］しかし、歴史的な文書などを見ると、たくさんそういう記録が残っていると、本学の蛯名先生が言われています。

［スライド 20］私が言いたかったのは、巨大な津波・地震の規模や周期を予測する上で、やはり文理連携が必要である、ということです。津波工学は 50 年ぐらい、地震学も 100 年ぐらいの歴史しかありません。一方、地質学は、1 万年ぐらい昔までさかのぼって調べることができます。自然科学の力と同時に、古文書に書かれているような内容を精査していく歴史学。文系の研究と理系の研究が連携・融合して、津波の周期や規模を予測することが可能になります。東北大学は、災害復興のための取り組みを今進めています。その中のひとつの重要な取り組みとして、災害科学の国際研究の展開ということで、昨年の 4 月に災害科学国際研究所を設置しました。この研究所は、さらに医学の分野も入っていますが、まさに文理融合した組織になっています。

［スライド 21］これは、災害科学国際研究所の今村先生たちが作られた、3.11 の津波シミュレーションです。仙台は、仙台平野のちょうど奥にあります。地震発生から 30 分ぐらいすると、津波の第 1 波が三陸海岸に押し寄せて、その後福島原発のある辺に津波が到達します。仙台湾は水深が浅いので、津波の速度は遅くなっていきますが、地震発生から 1 時間余りで、約 8 メートルの波高の津波が押し寄せます。このように、津波工学が進歩して、いろいろな予測ができるようになりました。近い将来に発生すると言われている南海トラフの津波に対しても、同様のシミュレーションが行われていて、津波で最大 23 万人ぐらい亡くなる可能性がある、という予測がされています。東日本大震災での経験でよく分かることは、知識を誰が総合して、リスク管理につなげていくかが肝心であるということ。この一番肝心なところが、多分今回機能していなかったのでしょう。先ほどお話ししたように、10 年前に東北大学の先生方は、巨大地震・津波に対する警鐘を鳴らしていました。そして、東日本大震災の半年前、産総研のグループも同じことを言っていました。それにもかかわらず、それがどこにも生かされていなかった、というのが問題です。

［スライド 22］防災の考え方の一つとして、リスクマトリックスがあります。発生の可能性とその影響度をマトリックスに書き、発生の可能性が非常に高く、影響のものすごく大きなものに関しては、最優先で対策を実施するというものです。ここの部分に科学的な指標を入れられれば、後はやることが決まるはずなのです。しかし、この辺りの対策が足りない。防災対策というのは、我々科学者というよりは、やはり政府が主導してやらなければならないことでしょう。ですから、自然科学、人文社会科学、どちらも重要ですが、さらに重要なことが他にもまだある。政治も分からなくてはならないし、政治的に働きかけることも必要です。そういうリーダーを育成しなくてはならないということがよく分かったわけです。

［スライド 23］東北大学では、8 つの大きな復

興プロジェクトを進めています。私は、その進捗を管理するような立場にいるのですが、どのプロジェクトをやるにしても、今私がお話ししていたような「総合知」と言いますか、専門の知識を単に束ねるだけではなくて、お互いを連携・融合させてダイナミックに動くような知に変えていかないといけないのだろうなと思います。東北大学は総合大学で、たくさん知があります。花輪先生が先ほどおっしゃっていたように、大学は知の継承と創造をするところで、我々はものすごくたくさんの知を持っています。それらの知をうまく使わないといけない。私は、大学にあるたくさんの知を何とかうまく使おうと、今一生懸命頑張っていますが、やはり新入生の皆さんも一緒になってやってほしいなと思います。皆さんは、専門力を鍛えるということがまず基本ですが、やはり＋αの力をぜひ付けてほしい。これが、新入生の皆さんへ私が期待することです。αと言うのは、未知数です。ぜひ、未知数を常に考えて頂きたいなと思います。

［スライド 24］最後のスライドは、復興推進プロジェクトのひとつ、「放射性物質汚染対策プロジェクト」の成果です。食品を丸ごと放射能検査ができる、非常に高感度のガンマ線検出器を作りました。従来は、ゲルマニウムの検出器を使うので、食品を切り刻んで、魚だとミンチ状にしないと分析できないし、測定する時間もかかっていました。しかし、この検出器によって魚は丸ごと、あるいは野菜を丸ごと、全量検査することも可能になったのです。これは科学の力で進歩です。しかし、ここでもうひとつ問題があるわけです。検査した食品が果たして売れるかどうか。それが今非常に、特に福島県の人たちの大きな悩みです。風評被害の克服は、やはり自然科学の知恵だけではできないことでしょう。人文社会科学の知恵も集めて、何とかしなくてはなりません。どうしたらよいか、私もまだ答えが出ません。ぜひ皆さんにも、こういうことを考えて頂きたいなと思います。復興に向けていろいろな知を集めて、それを上手に使っていかなくてはならないという中に、皆さんも私たちと一緒にその復興の道を歩んでいくことになりますので、ぜひ一人一人がそういう思いで、自分にとって何が＋αなのかということを常に考えて頂けるといいなと思います。これで、私のお話を終わらせて頂きます。どうもありがとうございました。

司会（関内）：原先生、ありがとうございました。先ほども触れましたように、パネルディスカッションで各先生方への質問を受け付けますので、ぜひ皆さん、原先生それから前の花輪先生のお話の中で、この辺りはぜひ聞いてみたい、ここはどうだろうというような質問などをメモしておいて頂ければと思います。

2013年4月8日
東北大学教養教育特別セミナー

復興へ、英知を結集して！

東北大学理事（震災復興推進担当）
工学研究科教授（知能デバイス材料学専攻）
原　信義

1

［スライド 1］

東日本大震災の概要

◆発震時：2011年3月11日　14:46
◆地震規模：M9.0(日本周辺における観測史上最大)
◆最大震度：7（栗原市）
◆津波：波高10m以上、最大遡上高40.1m、
　　浸水域561km^2
◆死者・行方不明者：18,550人（2013.3.11現在）
◆避難者：40万人以上（ピーク時）
◆建物全壊・半壊：39万8,462戸
◆被害額：約17兆円（内閣府推計）

2

［スライド 2］

複合巨大災害
（地震＋津波＋原子力発電所の事故）

■ 東京電力福島第一原子力発電所の事故
　地震動による外部電源喪失
　遡上高14-15メートルの津波により非常用電源喪失
　→全電源喪失
　1～3号機の炉心溶融，原子炉建屋の水素爆発
　大量の放射性物質の漏洩

3

［スライド 3］

「想定外」，「未曾有」，「千年に一度」？

◆ 巨大地震・津波は過去にも度々起こっていた
◆ 貞観津波（869年）以降も仙台平野が巨大津波におそわれたことがあった（慶長津波(1611年)）
　ということも一部では知られていた。

では何が想定されていたのか？

■ 宮城県沖地震は25～40年周期で起こる
■ 地震の規模はM7～7.5程度である
■ 仙台平野は津波被害が少ない

4

［スライド 4］

過去の宮城県沖地震

発生年月日	間隔（平均36.4年）	規模	備考
869年7月13日		M8.4以上	他の震源域と連動(貞観地震)
1793年2月17日		M8.2前後	他の震源域と連動（寛政地震）
1835年7月20日	前の地震から42.4年	M7.0前後	
1861年10月21日	前の地震から26.3年	M7.3	
1897年2月20日	前の地震から35.3年	M7.4	
1933年6月19日	前の地震から36.3年	M7.1	複数のアスペリティが別々にすべるタイプ。浅い地震
1936年11月3日	前の地震から6.4年	M7.4	複数のアスペリティが別々にすべるタイプ
1937年7月7日	前の地震から0.7年	M7.1	複数のアスペリティが別々にすべるタイプ。深い地震
1978年6月12日	前の地震から41.6年	M7.4	
2005年8月16日	前の地震から27.2年	M7.2	複数のアスペリティが別々にすべるタイプ
2011年3月11日	前の地震から5.6年	M9.0	他の震源域と連動（東北地方太平洋沖地震）

宮城県沖地震の長期評価 － 地震調査研究推進本部

5

［スライド 5］

江戸時代以降，三陸海岸に被害をもたらした近地津波

西暦	地震規模 M	津波規模 m	備考
1611年12月2日	8.1	3	慶長津波
1677年4月13日	8	2	三陸北部沖
1717年5月13日	7.5	(1)	階上（気仙沼）小津波
1763年1月29日	8	(1)	八戸・函館小津波
1763年3月11日	7-3/4	(0)	八戸流船，久慈大波
1793年2月17日	8-1/4	2	三陸南部沖
1835年6月25日	7.4	2	宮城県沖
1843年4月25日	8.4	2	根室沖，八戸網屋流出
1856年8月23日	8	2	三陸北部沖
1861年10月21日	7.4	1	宮城県沖
1896年3月22日	7.9	2	根室沖
1896年6月15日	6.9	4	明治三陸　大船渡で38.2m，死者約22000人
1897年8月5日	7.7	1	三陸南部浸水被 害 56戸
1933年3月3日	8.1	3	昭和三陸　大船渡で＞28m，死者・行方不明約2000人
1952年3月4日	8.2	2	1952年十勝沖
1968年5月16日	7.9	2	1968年十勝沖

津波規模 m	津波高さ H(m)
-1	0.5
0	1
1	2
2	4～6
3	10～20
4	30

澤井祐紀ら：地質ニュース，**624** (2006)，36-41.

6

［スライド 6］

10年前に貞観津波の再来を予測
東北大・箕浦らの研究

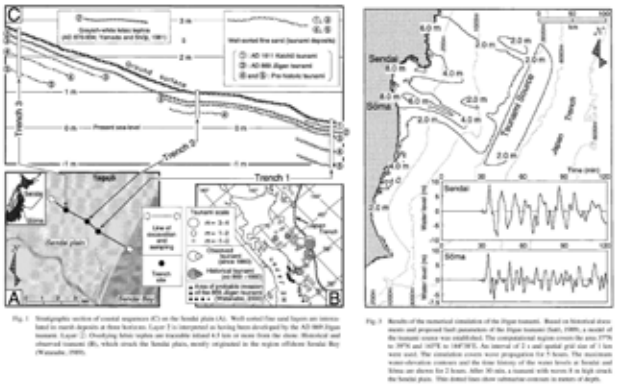
Journal of Natural Disaster Science, Volume 23, Number 2, 2001, pp83-88

The 869 Jōgan tsunami deposit and recurrence interval of large-scale tsunami on the Pacific coast of northeast Japan

869年貞観津波堆積物および東北の太平洋沿岸における巨大津波の再来周期

K. MINOURA
Institute of Geology and Paleontology, Graduate School of Science, Tohoku University, Sendai 980-0845, Japan
F. IMAMURA
Disaster Control Research Center, Graduate School of Engineering, Tohoku University, Sendai 980-8579, Japan
D. SUGAWARA
Institute of Geology and Paleontology, Graduate School of Science, Tohoku University, Sendai 980-0845, Japan
Y. KONO
Department of Civil Engineering, Tohoku-Gakuin University, Tagajō 985-8537, Japan
T. IWASHITA
Institute of Geology and Paleontology, Graduate School of Science, Tohoku University, Sendai 980-0845, Japan

［スライド７］



K. Minoura et al., *J. Natural Disaster Sci.*, **23** (2001), 83-88.

8

［スライド８］

【結論の最後部分】

ca. B.C. 670-910 (1 σ range). The recurrence interval for a large-scale tsunami is 800 to 1100 years. More than 1100 years have passed since the Jōgan tsunami and, given the reoccurrence interval, the possibility of a large tsunami striking the Sendai plain is high. Our numerical findings indicate that a tsunami similar to the Jōgan one would inundate the present coastal plain for about 2.5 to 3 km inland.

K. Minoura et al., *J. Natural Disaster Sci.*, **23** (2001), 83-88.

巨大津波の再来周期は800年から1100年である。貞観津波から1100年以上の時間が経っている今，再来周期を考えれば，仙台平野を巨大津波が襲う可能性は高い。我々の数値シミュレーションによれば，貞観クラスの津波が襲えば，沿岸地域の平野は2.5から3.0km内陸まで浸水するだろう。

9

［スライド９］

東北大学広報誌「まなびの杜」No.16 (2001)

津波災害は繰り返す
箕浦幸治

津波災害の再来

津波発生の理工学的解析を今村文彦災害制御研究センター教授と共同で試み、貞観津波の数値的復元に成功しました。これにより、仙台平野の海岸で最大で9mに達する到達波が、7・8分間隔で繰り返し襲来したと推定されました。（中略）

仙台平野の表層堆積物中に厚さ数cmの砂層が3層確認され、1番上位は貞観の津波堆積物です。（中略）放射性炭素を用いて年代を測定したところ、過去3000年間に3度、津波が溯上したと試算されました。（中略）津波堆積物の周期性と堆積物年代測定結果から、津波による海水の溯上が800年から1100年に1度発生していると推定されました。貞観津波の襲来から既に1100年余の時が経ており、津波による堆積作用の周期性を考慮するならば、仙台湾沖で巨大な津波が発生する可能性が懸念されます。

（中略）こうした破壊的な災害には、数世代を経ても、あるいは遭遇しないかもしれません。

しかし、海岸域の開発が急速に進みつつある現在、津波災害への憂いを常に自覚しなくてはなりません。歴史上の事件と同様、津波の災害も繰り返すのです。

10

［スライド 10］

貞観地震・津波(869年7月13日)の証拠

1.「日本三大実録」(平安時代の歴史書)に記述

陸奥国地大震動、流光如昼隠映、頃之、人民叫呼、伏不能起、或屋仆圧死、或地裂埋殪、馬牛駭奔、或相昇踏、城郭倉庫、門櫓墻壁、頽落顛覆、不知其数、海口哮吼、聲似雷霆、驚濤涌湖、泝洄漲長、忽至城下、去海数千百里、浩々不弁其涯涘、原野道路、惣為海溟、乗船不達、登山難及、溺死者千許、資産苗稼、殆無子遺焉、

【要約】陸奥国で大地震があり，建物の倒壊によって圧死したり，地割れにのみ込まれる者がいた。城，倉庫，櫓門，塀などが多数崩れ落ちた。また，雷のような音が聞こえて潮が湧き上がり，城下まで押し寄せ，野原も道も大海原のようになり，船に乗ることも山に逃げることもできず，溺死者が千人余りに及んだ。後には資産も田畑も何も残らなかった。

2. 伝承が各地に残る

宮城県：気仙沼市，多賀城市，仙台市，名取市，岩沼市，
福島県：新地市，相馬市，いわき市
茨城県：北茨木市，高萩市，東海村，ひたちなか市，大洗町，大洋村(現，鉾田市)

澤井祐紀：地質ニュース，**624** (2006)，36-41.

11

［スライド 11］

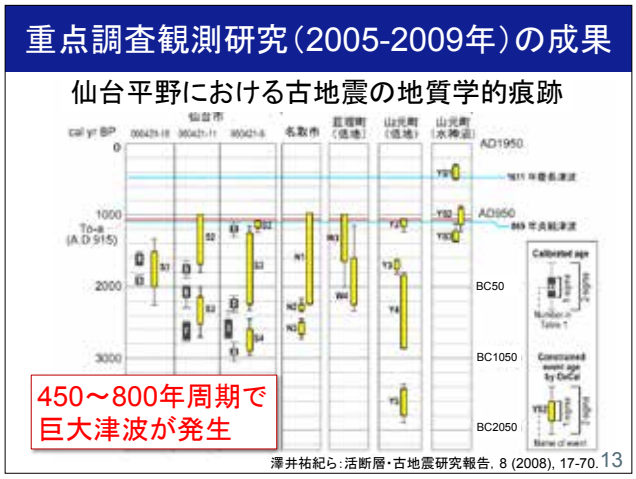
3. 地質調査によって津波堆積物を発見

- 箕浦(東北大学)らによって開始(1986)：貞観津波堆積層とさらに古い津波堆積層を2層発見　→　2001年の論文
- 文部科学省「宮城県沖地震における重点的な調査観測」(2005-2009年)(東北大学理学研究科，東京大学地震研究所，産業総合研究所)

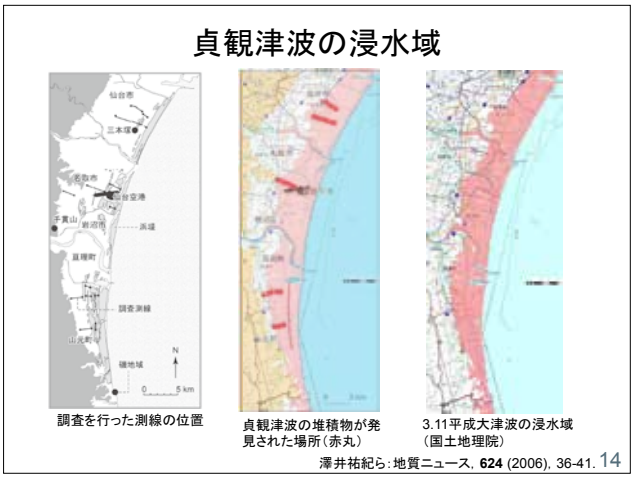
澤井祐紀：地質ニュース，**624** (2006)，36-41.

12

［スライド 12］

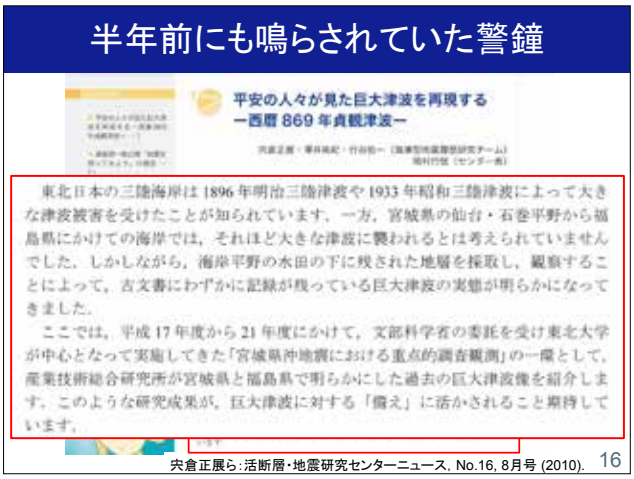


［スライド 13］

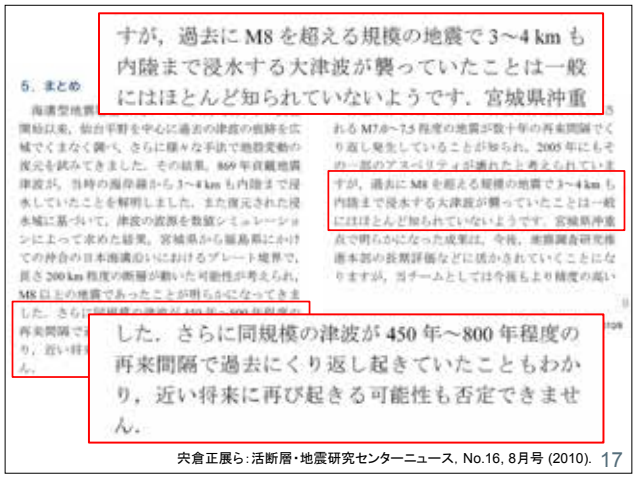


［スライド 14］

［スライド 15］

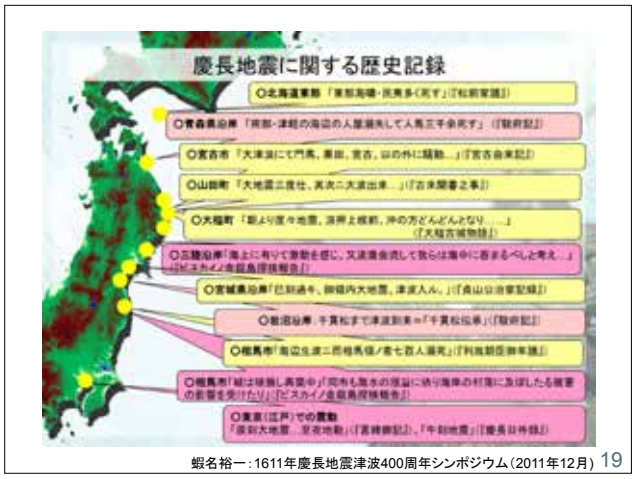


［スライド 16］

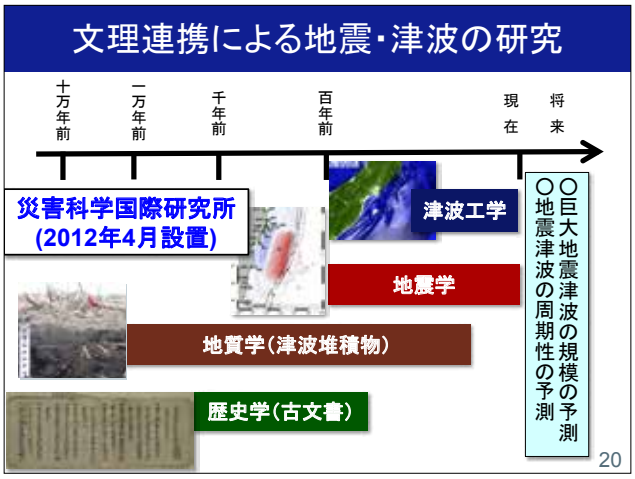


［スライド 17］

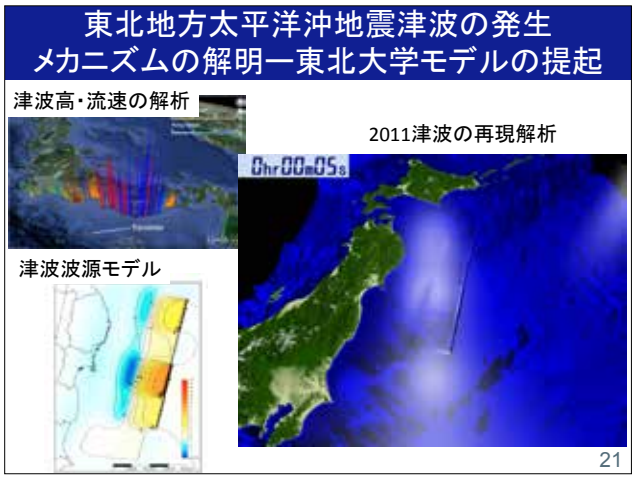
［スライド 18］



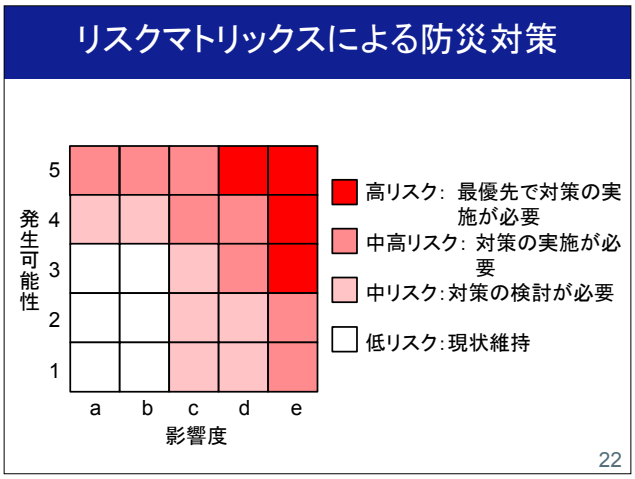
［スライド 19］



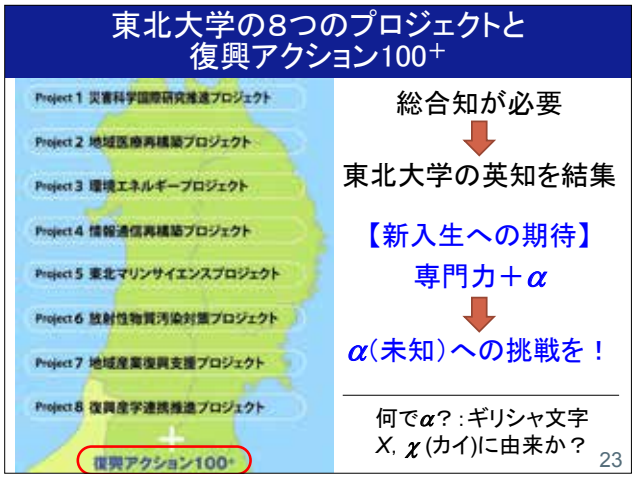
［スライド 20］



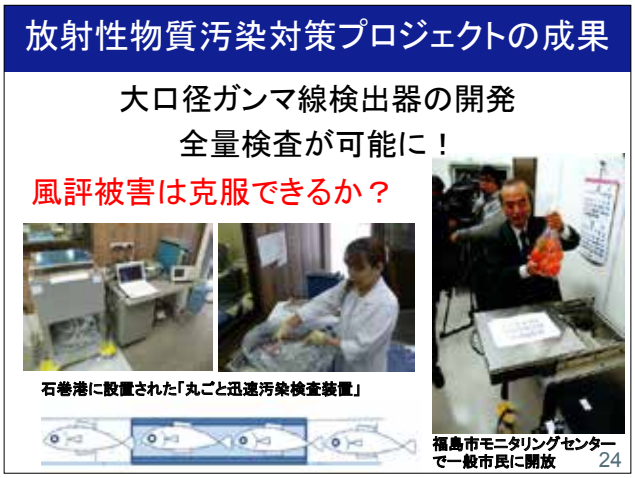
［スライド 21］



［スライド 22］



［スライド 23］



［スライド 24］

司会（関内）：では続きまして話題提供３「歴史から見た教養教育－グローバル時代の今」というタイトルで、教養教育院の総長特命教授、森田康夫先生にお願いいたします。

セミナー　話題提供３「歴史から見た教養教育―グローバル時代の今」

森田 康夫

森田：森田ですが、私は「歴史から見た教養教育―グローバル時代の今」というタイトルで話させて頂きます［スライド1］。

最初に話したいことは、大学と高等学校では勉強の仕方やすべきことが異なるということであります。特に、大学は自分で主体的に学ぶところであるということを注意しておいて、本論に入りたいと思います。

まず「教養」の意味を説明したいと思います。里見総長が先ほどおっしゃったことと重複しますが、教養教育というものを何であるかということを辞書で調べると、ここに書いてあるようなことが出てきます［スライド2］。注意してほしいことは、「教養」という概念は、西洋では古代ギリシャ・ローマ以来の伝統を持つということであります。教養の英訳はLiberal Artsというふうに言いますが、直訳すると、「自由人のわざ」ということになります。ギリシャ・ローマは奴隷制の社会でしたから、奴隷がいてその上に市民と言われる自由人がいました。したがって、Liberal Artsとは何かというと、「市民」と言われる自由人、その人たちが持つべき力となります。それが本来の「教養」の意味であります。

これが大学教育と結びついたのは先ほどの話でもありましたように、13世紀頃のヨーロッパでできた大学においてであります［スライド3］。そこではどういうものであったかというと、神学・法学・医学などについて大学では教えていましたが、教養教育はこれらの専門教育を勉強するための基礎教育であって、先ほど里見総長の話にあったように、自由７科と哲学から成り立っていました。これらを勉強した上で、専門の神学・法学・医学等を勉強する。それが古くからあった大学の基本的な学習方法でした。

大学における教育は、その後変わってきます。特に産業革命後は人材育成が重要視されるようになってきて、工学だとか経済学などの実用的な学問が大学に加わるようになりました。これは初期の大学であったところのボローニャ大学において、先生がここで壇の上でしゃべり、それを周りのみんなが聞いている図であります。

日本の戦後の大学教育は、アメリカの教育を基にして作られました［スライド4］。アメリカでの大学教育は、みんながよく知っているハーバード、プリンストン、スタンフォードなどの有名な大学がありますが、こういったものはLiberal Arts Collegesと呼ばれていて、それと別にカリフォルニア州立大学などの大規模な州立大学があります。日本の戦後教育というのは、このうちのLiberal Arts Collegesをモデルにして作られています。Liberal Arts Collegesでは、少人数で基礎的な教養を磨くとともに、物の考え方を養うことに重点を置いています。専門については大学を卒業した後で、大学院で勉強すると、そういったことになっています。

この頃の日本社会はどうなっていたかというと、戦後の日本はバブル崩壊までは学歴・年功社会であって、どの大学の入学試験に合格したかが人生を決めました。また、企業は社内研修が非常に充実しており、大学の文系とか教養教育にあまり多くを期待しなくて良かった。つまり、「自分たちで必要な教育はできますから、大学にはそん

なにお世話にならなくても結構です」と、そういうことを言っておりました。

こういったことが戦後から1980年頃まで続いたわけですが、日本を囲む環境が好都合なものであったため、日本の経済は順調に成長して、1980年代には日本は世界第２の経済大国となりました。ところがそれが、バブル崩壊を契機として様子が変わってきます［スライド5］。まずバブル崩壊によって経済が悪くなり、企業が体力を落としました。この後日本経済は、先ほどの花輪先生の話に出てきたように、長く停滞が続きましたが、この様な状態を生き残るため、企業は経費を削減するために「リストラ」を行い、中高年の職員を減らし、熟練技術者も社外に追い出されました。また、製造業は安い労働力を求めて、国外に進出して行きました。ところがこの間も、周りの国アジアの諸国は着実な発展をしました。このような環境の中で、リストラされた技術者が韓国、台湾、中国なんかに行って技術指導をし、日本の技術がアジアの国に流出し、これらの国に追い上げられることになりました。その結果、日本企業は充実した社内研修を行う余裕をなくし、即戦力の人材を求めるようになってきました。みんなは先輩などから、大学で何をすべきかについて話を聞くかと思いますが、高度成長期から1980年代までの日本の状況と、現在の状況はかなり違っているということに注意して、先輩などの話を聞かなければいけません。

さて、左上にあるのは名目GDPの表ですが、アメリカがこれで、日本はこういうふうになっていて、今は中国が日本を追い抜いて世界第２の経済大国になっております。技術面を見るため、薄型テレビの現在のシェアを見てみると、これもやはり日本は少し前には強かったのですが、現在は韓国の企業なんかに追い抜かれています。

これを教育の面での変化とあわせてみます［スライド6］。戦前は、大学はエリートのためのものでした。ごくわずかな人、10%ぐらいの人しか大学に行っていませんでした。それが戦後になり、大衆のための大学となり、進学率が上がってきます。現在は、誰でもが入学できる大学になっています。ここに出ているのは１年に生まれた人の数のグラフですが、そのうち大学に行っている人の数がこの一番下の黒い部分になっています。子供の数がどんどん減る中で、大学の数はどんどん増え、現在では、大学に行きたいと思っている人の90%以上の人が、実際に大学に入っています。そんな時代になっています。

この様な歴史の中で、大学の多様化が起こります。進学率が上昇し、多様化した大学に対応するため、大学の設置基準が緩和され、その結果ほとんどの大学は専門教育を充実するために教養部を無くしました。つまり、「専門教育が大事だから、それに比べ効用が不明確な教養教育は少し軽視しても良いのではないか」、そんなふうに考え、日本の大学は動きました。ところが、その後更に大学の分化が進みました。今言った1990年というのはこの辺りですが、それがここまで進んでくることによって、また大学が変わりました。偏差値の低い大学では、学生の学習意欲が落ちています。

そのため、「大学を卒業した人が持つべき力とは何か？」ということが問題になり、検討の結果、教養教育が再度見直されています［スライド7］。それが現在の状況で、大学を卒業した人が持つべき力を「学士力」と言いますが、それについて説明をいたします。皆さんは専門とする学問分野を持っていますが、専門に対する知識・理解というものが最初に来ます。それも単なる知識ではなく、知識体系として専門の学問を理解していることが必要で、自分と結び付けて専門について説明でき

ることが必要です。

社会に出た時に必要なこと、「こんなことをするだろう」ということがスライドに書いてありますが、それを見てみると、専門に関する知識・理解だけではなくて、もっと他のことが必要だということが分かります。それがコミュニケーション・スキルだとか、数量的スキルだとか、情報リテラシーだとか、論理的思考力だとか、問題解決力とか、そういった様々なことに使える力です。だから、学士力として、知識・理解だけではなく、このような汎用的技能も必要になりますし、さらにもっと他のものも出てきます［スライド 8］。

ここにあるように、自己管理力、チームワークとリーダーシップ等についての力、倫理観、社会的責任観、生涯学習力などが必要になります。抽象的に話すと分かりにくいのですが、具体例を挙げると分かります。誠実に責任を持って、まわりの人と協力して仕事をし、自分の専門性を高める努力をする。さらに、経験を積んだらチームを率いていく力を持つ。こんな力が必要になります。

４つ目の力は何かと言うと、獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、新たな課題に適用し、課題を解決する能力です。これが最終的な目標になります。

学士力はこういうものですから［スライド 9］、全ての学生が持つべき共通した力ということになり、その中核となるのは教養です。「大学とか個人で差が付きやすいものが教養である」と言えると思います。専門に関する力はそんなに差が付かないけれども、教養については非常に差が付きやすい。下位の大学では、そんなことを勉強しない人もいるわけですが、「勉強しないでも卒業できるが、学習しないで卒業しても良い仕事ができない」と言えると思います。

社会は常に変わって行きます。企業も変わります。そうすると、企業でも仕事も社会の変化に応じて変わり、その結果、働く会社を変える人もでます。皆さんの中でも、働く会社を変えることもあるかと思います。同じ会社にいても仕事の内容を変えることもあります。そういう時に、柔軟できる学士力があれば、安心して生きていくことができます。これをまとめると、「人生では色々なことがあるが、自分の持つ力だけが、自分の将来を保証できる」となります。

最後に教養とは何かについてまとめます［スライド 10］。教養というのは、簡単には身に付かないものです。しかし、社会に出て自分が働く姿を想像すれば、身に付けるべき力が分かると思います。そのような力を身に付けることを意識して、これから努力を積み重ねていけば、徐々に力が付いていくと思います。教養については、これだけを理解できればいい、どこまで身に付ければ十分だというものがなくて、その代わりに広い教養を持っている、深い教養を持っているとか、そういったふうな広さとか深さとかいったことが問題になります。

最後に、付け加えたいことは何かと言うと、国内外のライバルは努力をしているということです。ここの下に出ているのは、海外の、西欧の、欧米の有名な大学ですがそれだけではありません［スライド 11］。新興国の中国の清華大学、インドのインド工科大学、台湾大学。こういったものも日本の大学に劣らない、東北大学にもあまり劣らない力を持っております。さらに国際学力調査とか科学オリンピックなんかでは、アジアの新興国が非常に強くなっています。みんなが社会に出ると、こういった新興国で頑張っている人たちが競争相手になります。

ということで私の話はおしまいにいたします。どうもご清聴ありがとうございました。

司会（関内）：森田先生ありがとうございました。それでは次のセッション、パネルディスカッションに移りますが、ステージを準備いたします。皆さんも座席に座りっぱなしでしたので、背筋を伸ばしてストレッチをするため、あるいはおトイレタイムということで、10 分ほど休憩を取りたいと思います。パネルディスカッションでは、新入生の皆さんと教員との間で様々な話題のやり取り、質問と議論などで盛り上げていきたいと思いますので、よろしくお願いいたします。では若干の休憩です。2 時 45 分に再開致します。

東北大学 教養教育院

大学と高等学校では、勉強の仕方やすべきことが異なる

大学は自分で主体的に学ぶ所

歴史から見た教養教育
ー　グローバル時代の今

森田康夫

［スライド 1］

アテネの学堂（ラファエル）

教養の意味

- 一般教養（広辞苑）：職業的・専門的知識・技術に対して、広く人間として共通の教養。普遍的・全体的・調和的人間の完成を目ざし、西洋では古代ギリシア・ローマ以来の伝統をもつ概念。
- 英訳 Liberal Arts は「自由人のわざ」。社会の指導者である自由人に必要な能力を指す。
- 背景:ギリシャ・ローマでは奴隷がおり、その上に「市民」と呼ばれる自由人がいた。
- 奴隷が農業などの生産を行い、市民は貿易、政治、軍事などを担った。

［スライド 2］

ボローニャ大学における1350年代の講義風景

伝統的な教養教育

- 大学：今の大学の原型となったのは、中世ヨーロッパの大学である。神学・法学・医学などの学問の伝授を目的とした。
- 教養教育：法学・医学などの専門科目を学習するための基礎教育。自由7科（文法学、論理学、修辞学、幾何学、数論、天文学、音楽）と哲学からなる。
- 産業革命後人材育成が重視される様になり、工学や経済学など実用的な学問が大学に加わった。

社会のエリートのおつきあいのための教養の一つ。
欧米では、飲み会でなく、家庭でのパーティーがよく行われる。

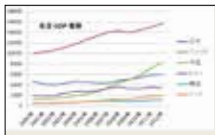
［スライド 3］

第二次大戦後 1980年代まで

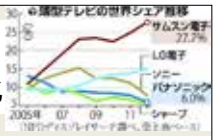
少人数で基礎的な教養を磨くとともに、物の考え方を養うことに重点を置いている。専門は、大学院で勉強する。

- 米国では、ハーバード、プリンストン、スタンフォードなどの少人数教育を行う Liberal Arts Colleges と大規模な州立大学がある。戦後日本の教養教育は、前者をモデルにして始まった。
- 戦後の日本は、バブル崩壊までは学歴・年功社会であり、どの大学の入学試験に合格したかが人生を決めた。企業は、社内研修が充実しており、大学の文系や教養教育には多くを期待しなかった。
- 周囲の環境にも助けられ、日本の経済は順調に成長し、1980年代には世界第2の経済大国となった。

［スライド 4］



経済のグローバル化

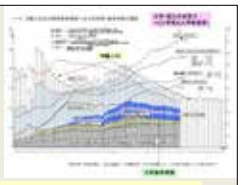


- バブル崩壊（1991-99）により、企業は体力を落とし、日本経済は長く停滞した。
- 日本企業はリストラ（中高齢者の解雇など）を行い、生産コスト引き下げのため、製造業は国外に進出した。
- この間もアジアの諸国は着実な発展をしていた。
- 日本の製造業は、技術が流出し、韓国、台湾、中国などの国に追い上げられている（国際競争の激化）。
- 日本企業は、充実した社内研修を行う余裕をなくし、即戦力の人材を求めるようになった。

［スライド 5］

教養教育の見直し

大学の多様化及び経済のグローバル化と共に進行



戦前：エリートのための大学 → 戦後：大衆のための大学 → 最近：誰でもが入学できる大学

- 進学率が上昇し、多様化した大学に対応するため、設置基準が緩和され（1991年）、その結果、殆どの大学は専門教育充実のため、教養部をなくした。
- その後、大学の分化が更に進み、偏差値の低い大学では、学生の学習意欲が落ちている。
- 「大学を卒業した人が持つべき力（学士力）とは何か？」が問題となり、教養教育が見直されている。

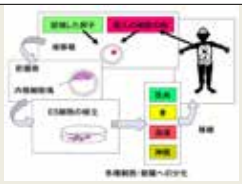
［スライド 6］

求められる能力
（学士力）

- **知識・理解**：専攻する学問分野における基本的な知識を体系的に理解するとともに、その知識体系の意味と自己の存在を歴史・社会・自然と関連付けて理解する。
- 汎用的**技能**（いろいろなことに使える力）：コミュニケーション・スキル、数量的スキル、情報リテラシー、論理的思考力、問題解決力など。

［スライド 7］

チームで仕事をする


生命倫理を考える

自分の仕事をより良くする

- 態度・志向性：自己管理力、チームワークとリーダーシップについての力、倫理観、社会的責任観、生涯学習力など。
- 統合的な学習経験と創造的思考力：獲得した知識・技能・態度等を総合的に活用し、新たな課題に適用し、課題を解決する能力。

誠実に責任感を持って周りの人と協力して仕事をし、自分の専門性を高める知識欲を持つ。
さらに、経験を積んだら、チームを率いて行く力を持つ。

［スライド 8］

- 学士力は、すべての学士が持つべき共通した力だから、教養が中核となる。
- 大学や個人で差が付きやすいのが、教養である。
- 下位の大学では勉強しないでも卒業できるが、学習しないで卒業しても、良い仕事が得られない。
- 企業の仕事は、社会の変化に応じて変る。働く会社を変える人もおり、同じ会社にいても、仕事内容を変えることが多い。教養があれば、この様なことに柔軟に対応できる。生涯学習力も関係する。
- 人生には色々なことがあるが、自分の持つ力だけが、自分の将来を保証できる。

［スライド 9］

教養とは？

- 教養は、簡単に身につかない。
- 社会で自分が働く姿を想像すれば、身につけるべき力が分かる。
- その様な力を身につけることを意識して、これから努力を積み重ねて行けば、徐々に力がつく。
- 教養には、どこまで身につければ十分だというものはない。広さや深さが問題となる。
- 国内外のライバルは、努力している。

ハーバード大学

プリンストン大学

ケンブリッジ大学

ゲッチンゲン大学

［スライド 10］

インド工科大学

台湾大学

（注意）国際学力調査や科学オリンピックでは、アジアの新興国が非常に強い。
10 年から 20 年後に諸君が社会で活躍する頃には、強力なライバルとなる。

ご静聴有り難うございました。

［スライド 11］

司会(関内)：はい、それでは再開致します。ステージには、3人の話題提供者に加えまして、おふたりの先生に上がって頂きましたので、最初に紹介いたします。順番に、まずは哲学ご専門の野家先生です。

（拍手）

司会（関内）：さらに、宇宙空間物理学専門の福西先生です。

（拍手）

司会（関内）：ここで、私の方から東北大学の教養教育院について若干説明いたします。先ほど第3の話題提供をして頂いた森田先生も含めて、壇上に上がって頂いた野家先生、福西先生ともに教養教育院という組織の総長特命教授であります。この教養教育院は、皆さんが所属する文学部、工学部というような学部とは違います。東北大学で教育研究活動の実績ある名誉教授の先生方の中から、総長が特にこれからの教養教育を充実化するために、総長特命教授という形でお願いした先生方によって構成されております。さらに、教養教育院には現役の先生方も入っております。こちらは全学教育それから教養教育において現在、様々な面でリーダーシップを取っている先生方に、教養教育特任教員という形でお願いしているところです。

そこで、これからのパネルディスカッションでは、壇上の5名の先生方のみならず、教養教育院の総長特命教授関係の先生方にもご発言いただくためにフロア前列に座って頂いておりますので、私の方から紹介したいと思います。皆さんのお手元にある資料の2枚目のパネルディスカッションの欄に、各先生方のお名前が掲載されていますので、その順に紹介したいと思います。物理学専門の海老澤先生です。

（拍手）

司会（関内）：続きまして、農業経済学専門の工藤先生です。

（拍手）

司会（関内）：植物栄養学専門の前先生です。

（拍手）

司会（関内）：英語学専門の福地先生です。

（拍手）

司会（関内）：さらに名簿にはありませんが、現役の先生で教養教育院に所属している特任教員の先生方にも来て頂いておりますので紹介いたします。英語担当の浅川先生です。

（拍手）

司会（関内）：ドイツ語担当の杉浦先生です。

（拍手）

パネルディスカッション「東北大学のチャレンジ～グローバル時代の教養教育」

司会（関内）：それでは、パネルディスカッションに入ります。先ほど、お話ししていますように、ぜひ新入生の皆さんからこの点を聞いてみたい、あるいはこれはどう考えたらよいだろうか、というような質問をお願いしたいと思います。これまでの話題提供でもお話がありましたように、高校までの勉強とは大学は違います。問いを如何に投げかけて、皆さんが学ぶかという学生自身の主体性が試されます。皆さんの方から様々な質問、あるいは疑問がたくさん出されることを期待しています。

学問はその言葉のとおり、問うことによって学ぶことができますので、どんな事柄でも結構です。花輪先生からは、かなり具体的な全学教育の科目の話もして頂きました。さらに原先生からは、現在の研究活動の中で文理融合の重要性であるとか、あるいは文科系、理科系の様々なコラボレー

ション、これが必要不可欠だという話を頂きました。森田先生からも教養教育についての歴史と現状について話をして頂きました。

どんなことからでも結構です。マイクをフロアに回しますので、手を挙げて発言をお願いします。いかがでしょうか。はい、手が上がりましたね。では真ん中の方、お願いします。よろしければ所属、何々学部と言ってもらえると大変ありがたいです。お名前ももちろん言って頂ければ。

学生 A：所属は理学部で、名前は A といいます。森田先生のお話に関連することなんですが、レベルの低い大学では大学の分化がさらに進み、学生の学習意欲が落ちているということと共に、教養についての学習が疎かになるという話があったと思います。そうした時に僕達はそういうことを見過ごしていいのかと言うか、僕らのような一部の人だけが教養を学んだとしても、それでは弱肉強食の世界になってしまうような気もしますし、そういった時に自分達にできることとか、やるべきことは何があるのか。あともうひとつ、これは全般に関しての質問なんですけれども、大学ならではの教養とは何かということです。この情報あふれた時代、現代では大学に通わなくても情報はいくらでも得られるし、自学自習でも得ることができるような学習がいっぱいあります。大学が教養教育を学ぶ環境を与えるだけに留まっているのか、大学ならではの教養というのは何か学ぶことができるものなのか、2つお願いします。

司会（関内）：では森田先生、お願いいたします。

森田：まず、自分達だけ頑張っても、頑張らない人がいたらという、そんな話だったと思います。

高度成長期から 1980 年頃まで、日本は教育の底上げを重視してきました。そのためにほとんどの人が同じような力を持っていたと思います。それに対して、現在の日本では、高度成長期のような「欧米に追い付け追い越せ」ではなくて、私たち自身が新しいものを作らなくてはいけない、そういう時代になっています。そういう時代では、均一な学力ではなくて、トップレベルの高さが問題になります。そういった意味で、ここにいる人達を始め、上位の大学にいる人達がさらに頑張ってもらうことが、日本の将来にとって非常に重要なことであると思います。2つ目は、「なぜ大学でなければいけないか」ということかと思います。それは、例えば情報について勉強するのだったら、専門学校に行くことも可能だと思いますが、大学の良いところっていうのは、特に総合大学の良いところは、どの分野を取ってみてもトップレベルの研究者がいるということで、勉強したいと思えばどんなことでも教えてもらうことができる。そこにメリットがあるかと思います。東北大学にいる先生方は、その分野でのトップレベルの研究を行っている方ですから、自分が調べたいと思えば別の学部まで行って聞くことによって、色んなことを勉強することができると思います。大学というのは、そういう面で非常に良いところを持っているかと思います。これくらいでよろしいでしょうか。

学生 A：2つ目の質問についてはすごく納得できるのですが、やっぱりひとつ目の質問に関してですね。多分ここにはかなりレベルの高い人達が来ているわけで、それは人口に占める割合としては、ごく限られた人達だと思うんですね。そういう人達というのは、極端な話、別に放っておいても、高いレベルの教育は受けられるわけです。伸びしろがあるのは、もっと多くの人が占めている低いレベルの層というか、そういうところだと思うんですね。じゃあそういう時に自分達にできることは何なのかということを考える必要性が出てくると思うんですけれども、いかがでしょうか。

森田：先ほど言ったように、今だと大学に入りたいと思えばどこか入れる大学を見つけることは非常に容易になっています。「そういったところでもいい」、「人並みの勉強をして、人並みの生活ができればいい」と思っている人達が今たくさんいて、その人達にとって「大学に入ることは難しくないから、あまり勉強しない」ということになっているのかと思います。その人達には「本当はそれではいけない」ということが言えると思うんですが、それを納得してもらうのはなかなか難しい。私は個人的には、その人達がこの状態では良くないということを分かるようになるには、あと10年とか、そんな長い時間がかかると思います。現在時点では、その人達は入った大学から、「あなた達は大学卒業できればいい職を貰えますよ」という様なことを言われおり、今以上に努力する必要性を認めることができないのだと思います。私自身は非常勤で他の大学で教えたことがあるんですが、その辺を深刻に感じました。つまり、短時間でその人たちを底上げするのは非常に難しい。価値観自体が違っている。そういうふうに思っております。

司会（関内）：これは非常に面白い問題提起を最初にして頂いて、むしろ他の先生方にもお聞きしたいと思います。大学が大衆化している状況、そうした社会全体の中で皆さんは研究大学に入学した学生さんで、どのような社会貢献をすべきなのか、という話ともつながって来るかと思いますので、よろしかったら他の先生、野家先生いかがでしょうか。

野家：今のふたつの問題ですが、前者の方、レベルが低いといわれる大学にいる人たちとどう付き合っていくかというふうなご質問だったと思います。今仙台では、市内の大学のコンソーシアムというのができていて単位互換制度というのもあります。ですから、皆さんは東北大学に入ったわけですから偏差値がかなり高い方かもしれませんが、そういう形でお互いに学び合うというか、東北大の学生が、例えば他の大学に行って学ぶこともできるし、他の大学の学生が東北大学の講義で単位を取るということもできます。そういうふうに相互交流ができるシステムができ上がっていますので、それを通じてお互いに啓発し合ったり、あるいは足りないところを補い合ったりすることが可能になっています。それからもうひとつは、皆さんは多分今、外に出ると色んなサークルの勧誘に出会われると思います。サークル活動を通じて、他の大学と交流するということも盛んに行われていますので、そういう形で人と人とのネットワークを通じて、お互いに啓発し合ったり足りないところを補い合ったり、そういうことができるのが大学という場の重要なところというか、大切なところだと思います。自分たちがエリートだと思い上がるのではなくて、スポーツや芸術の面ではむしろ他の大学の人たちの方が東北大よりもレベルは上ですから、それぞれにメリットというか、いいところがあるわけです。様々なネットワークを活用して、お互いに学び合うということが全体としてのレベルを上げる重要な働きをするのではないかなと僕自身は考えています。

司会（関内）：ありがとうございました。他の先生方、いかがでしょうか。どなたか。

福西：専門教育と教養教育のレベルに関してですが、専門教育というのは国際的な競争の中にあって、その競争の中でトップレベルを目指しているわけです。そこで割合とそのレベルが分かりやすいですね。例えば、大学院の学生でも、いい論文を書くと世界的に認められる。世界のトップレベルの成果を上げた学生が東北大にたくさんいます。でも学生の皆さんが一番困るのは、教養の1、

2年の時に自分がやっていることはレベルの高い教養教育かどうかよく分からないことです。そこで教養の捉え方を少し変えてみる必要があります。教養教育のレベルというものはあくまでも後から分かるものです。実際にやってみないと、その結果でしか教養教育のレベルは判断できないんですね。やる前に、どれだけのレベルを目指すかということで教養の勉強をすると、まずいと私は思います。今、学生の皆さん方は本当に自由な立場にいるわけですね。何でも学ぶことができる。だから、自分の興味というものを大事にして、そしてその興味のあるものに関してどんどん学んでいく。そうするとその学びの中で自分のレベルというのもだんだん分かってくるし、それからさらに興味が進んでいく。最初からレベルというものをあまり意識しない方がいいんではないかと私は思います。

司会（関内）：ありがとうございました。質問してくれた理学部のA君どうでしょうか。

学生A：レベルというのもあるんですが、教養を学ぶモチベーションですね。それがみんなにあるかどうかというと、怪しいと思います。それを変えていくために、じゃあ自分たちが能動的に、主体的に何ができるのかということを疑問に思っていて。そういうことは何かあるんでしょうか。さっきおっしゃった、コンソーシアムも手段の一つだと思うんですけれども。

司会（関内）：はい、福西先生どうぞ。

福西：大学で一番できることはいろいろな人と友達になることです。それから仙台はたくさんの大学があるので、他の大学の人とも友達になれるわけですね。そういうことが、一番今のことに関しては関係してくるんではないかと思うんです。

司会（関内）：はい、ありがとうございました。花輪先生お願いします。

花輪：はい、私はこう考えるんですね。先ほど、2番目の質問からしますと、情報は色んなところで取れるではないかと。インターネットで全部検索できてしまうと。じゃあ大学って一体何なんだという疑問だったと思うんですが、大学ってやっぱり人が作っているんですよね。先生がいて、職員の方々がいて、それから学生の人たちがいて初めて共有の空間として大学っていうのがあるわけですね。だとすれば、私は人間対人間、フェイス・トゥ・フェイスで色んなことが、物事が進んでいく空間が大学だと思うんですね。そこが全く違う。つまり、自分の力だけではなくて、自分と対する人とのコラボレーションで次が決まっていくといいますか、それが一番大事なんじゃないかと思います。ということで、これがまた1番の質問に対して答えたいんですが、先生がいるではありませんか。職員の人がいるではありませんかと。そういう人にぶつかったらいいと私は思うんですが。問いかけたら。それができるのが大学っていう空間だろうと、私は思います。きっと思いもかけない面白いことが、創造的なことができていくと私は信じます。

司会（関内）：はい、ありがとうございました。さて、よろしいでしょうか。それでは他にどうぞ。たくさん手が上がりましたので、では順番に。ちょっと待ってくださいね。それでは後ろの方からどうぞ。

学生B：工学部1年のBといいます。よろしくお願いします。先ほどの話題提供にもありました、食品の風評被害を防げるかとか、防災に関して政治が動いていくことが大事だということにもつながると思うんですが、自分の専門の研究を、社会の問題に対して働きかけていくためには、やはり市民や政治あるいは会社員なら経営陣などに、自分の研究がどう役に立っていくのかということを

説得する必要があると思うんです。それは多分、自分の研究分野について知識を持っていない人にも理解してもらわなくてはいけない部分があって、その点では学術発表とはちょっと違う部分があると思います。学術発表の訓練が大学でできるというのはイメージできるんですけど、市民や政治を説得する時に、まず教養やあるいは原発の事故での社会の反応などを注意深く見るということも大事だとは思うんですが、実際に自分で何かを伝えて、自分の専門外の人を説得していくという体験は、大学でどんなところに機会を求めていけばいいのかというのがあまりイメージできないので、そこをお聞きしたいのですが。

司会（関内）：誰か先生のご指名ありますか。どなたでもいいですか。

学生 B：はい、皆さんに聞きたいです。

司会（関内）：はい、いかがでしょうか。では野家先生お願いいたします。

野家：今質問してくださったのは大変重要なことで、大学の学問とそれから市民の方々との接点をどういうふうに求めていったらいいのか、あるいは大学にそういう場所があるのかというご質問だったと思います。大学も昔は「象牙の塔」と言って、非常に高尚なことをやっている場所というイメージが強かったのですが、最近では大学を市民に開いていこうという動きが活発に出てきています。ひとつの例として、サイエンスカフェというのは聞いたことありますか。もちろん日本全国色んな大学でもやっているのですが、東北大学の取り組みは非常に早く、多分福西先生がサイエンスカフェを最初に企画立案されたので、後で詳しい話をしてくださると思います。今、月に一度「メディアテーク」という施設はご存じかしら。定禅寺通りにある図書館とか映像メディアとか、そういうものが活用できる場所なのですが、そのメディアテークで月にいっぺん、確か最終金曜日の夕方6時頃からだったと思いますが、東北大学の色んな分野の先生方が、最新の研究内容をお話し下さって、それからグループに分かれてその内容について市民の方々を交えてディスカッションをするというふうな場所が設けられています。それからサイエンスカフェというのは主に、サイエンスという言葉通り理工系の先生方の最新の研究成果を紹介する機会が多いのですが、もうひとつリベラルアーツ・サロンという催しがありまして、これは主に川内の附属図書館を会場にして開かれています。こちらの方は人文社会科学の先生方が、例えばギリシャ美術について最新の研究成果をご披露して、その内容について市民の方々と色んなことを考えるというふうな機会が設けられています。その他にも講演会やシンポジウムを含めれば、最近の大学は市民の方と接する機会が非常に多くなっていますので、ポスターとかあるいはホームページとかご覧頂くと、そういう機会がいつでもどこにでもあるということがお分かりになると思います。皆さんもぜひそういう催しに参加して頂ければと思います。サイエンスカフェについては福西先生から補足的な説明を頂ければと思います。

福西：サイエンスカフェは、2005年に始まったんですが、来年の1月で100回を迎えることになります。私がそれを始めた動機というのは、東北大学での成果というのを市民の皆さんに知って貰いたいと考えたことです。若い人には、じゃあ自分もそういう道を目指そうというような刺激を与えたい。市民のいろいろな方々には、大学で何をやっているのかを分かってもらいたい。そういう場としてサイエンスカフェを企画して、それが100回になろうとしています。今度、河北新報で特集を始めます。サイエンスカフェに関係した人たちが連続的に新聞に記事を書いていく企画で

す。サイエンスに関する特集ですね。そういう意味では、市民と大学との関係というのは今ものすごく密になってきています。それだけではなく、大学のあちこちで社会に関係した様々な取り組みが同時に行われています。だから質問されたことはもうあまり心配しないで、実際ちょっと覗いてみて頂ければ多彩な活動があることがすぐに分かると思います。

司会（関内）：はい、ありがとうございました。どうぞ、お願いします。

原：B君のひとつの疑問は、学生としてどういうふうに社会と関わることができるかというようなことも含んでいると思います。そういう意味で言うと、今の震災復興の取り組みというのはまさに全てが地域、被災地域での取り組みです。先生もそうですが、一緒にやっている学生諸君もみんな地域に出て行って、いろいろな形で地域の人たち、市民の人たちと接触しています。今日も見えている木島先生たちは水産、海洋生態系の調査をされていて、漁民の方々、あるいはそれに関わる人たちと直接関わり合いをもたれています。農学分野に進む人は、おのずからこれから数年先までは、そういう機会が学部の時代でも出てくると思います。ただ、全ての学部で地域の人たちや市民の人たちと関わる機会があるかと言われると、なかなか難しいかな。しかし人文系でも、古文書のレスキューをやっている人たちは、地震や津波で被災した土蔵が壊される時に出かけて行って、泥にまみれた古文書を救い出し、きれいにする活動をしています。学生さんたちが、地域の人と、なぜ古文書のレスキューが必要か、ということをお話ししながら活動しています。それから、工学部の都市建築系の学生さんたちは、地域の再建の計画に直接関わっています。地域の再建計画はものすごく難しいです。我々が理想とするような設計図は、地域の人たちにはそのまま受け入れられないことが多いわけですよね。そういう時にやっぱり、何が問題なのかということを話し合いながら、我々も設計図を変えなくてはならないし、時には、地域の人にも考え方を変えてもらわなくてはならない。そういう作業をみんなやっています。分野にもよると思いますけれども、どうやればいいかということは簡単には言えませんが、そういうところはたくさんあります。フィールドワークを主体としている分野は、非常に市民、国民と近いところにあると考えて頂ければと思います。

司会（関内）：はい、花輪先生からもありますか。

花輪：はい、2つの点で私の考え、お答えしたいと思います。ひとつは大学を運営している国立大学法人としての東北大学っていうのは、国民の皆さんから税金を頂いて活動している部分が大半ですね。そのためには、やっている行為を説明する責任があるということで、今までお話に出ました色んな場を利用して行われていること、あるいは研究成果を国民の人に説明するという努力はしていると思います。それから、じゃあそういう説明のやり方と言いますか、個人個人がそういう能力をどこで獲得するのか。例えばサイエンスカフェ、上手な先生もいるし、あまり上手でない先生も、私は居ると思います。じゃあどこでそういう訓練を受けるのかということなんですが、なかなかこれは難しくて、きちんと今の東北大学の中でそのスキルを伸ばすようなことをやっているかというと、ちょっと申し訳ない、やってないなという気がいたします。でも展開ゼミ、あるいは基礎ゼミと呼ばれる少人数教育の中では、必ず、皆さんがやっていることを他の人に伝えるところをやるはずなんですね。それから、英語でディベートすることをやりましょうとか、そういうものは少しずつですけれども設けていっているつもりです。そ

れから我々もそうなんだけれども、一般の方に自分のやっている専門を説明するってすごく難しいんです。一番楽なのは同業者です。同じ学会の人たちに、しゃべるっていうのは一番楽で、市民の人にしゃべる、あるいは中学生・小学生にしゃべるっていうのはものすごく難しいです。でもやっぱりそれは、続けなければいけないし、皆さんには早くからそういうスキルを磨くような場を提供したいなというふうに考えています。まだ十分ではありませんけれども。

司会（関内）：ありがとうございました。私からもちょっと補足します。花輪先生からの話題提供で、SLA について紹介があったと思います。これは、大学の上級生が 1、2 年生に色々な形での学習支援をするという仕組みです。この SLA の中で雑学ゼミという企画がありまして、大学院生が専門外の 1、2 年生に自分の専門のことについて講演をするというものが始まっています。皆さん 1、2 年生ですので、おそらく自分の専門とは違う院生さんからそういう話を聞けるチャンスが出てくると思いますし、場合によっては数年後にはぜひ、皆さんがその SLA になって、後輩に教えるというように、経験を積んでもらえればいいかなと思います。このような仕組みは市民一般に対してではありませんが、大学の中で一般の下級生に対する取り組みとして東北大学でなされているということです。

では他にいかがでしょうか。たくさん手が上がりましたね。順番でどうぞそちらから。

学生 C：農学部の C といいます。先ほどの質問とほとんど同じことを質問しようとしていたので、大部分はとても納得したんですけれども。研究者と市民との対話、理解の共有という場で、サイエンスカフェなど市民とディスカッションをしていく様々な場を設けているということは分かりました。でも今回の東日本大震災のような広い地域での震災等大きく被害の出るようなものや、震災関係で言えば今の風評被害とか、原発とか。自分のやろうと思っている農業なら、例えば遺伝子組み替えなども、研究者と市民とで意見がまだ合わないところが色々とあるとは思うんですが、大学が特定の市民との交流の場を開いているとはいえ、それを市民が全員知っているかというと、あまりそうではないと思うんですよね。それを、国などという大きな視点で国民に訴えていくような活動は、なされているかということをお聞きしたいです。

司会（関内）：具体的な質問をしてもらうと分かりやすいかな。

学生 C：国と言うより…。東北大学はサイエンスカフェをやっていますが、東北大であれば東北というのではなくて、例えば他の大きな大学と連携して、色々な地域でより多くの人々に知ってもらったり、意見を共有できる。多分難しいとは思うんですけれども、そういうものはあるんでしょうか。

司会（関内）：これはいかがでしょうか。大学間の連携、はい。

原：ちょっと答えづらいところがありますが、ひとつは大学間の連携という話で言いますと、東日本大震災の復興に関わる取り組みというのは大学間連携で行われているものがたくさんあります。C 君は農学部ということですので、先ほども例に挙げた東北マリンサイエンスというプロジェクトをご紹介します。このプロジェクトは、津波で色々変化した海洋生態系の変化・回復の過程を調査して、それを漁業・水産業の復興に役に立てようというような取り組みです。東北大学が中心になり、東京大学、国の機関ですけれども海洋研究開発機構、それから北里大学などいくつかの大学が

一緒になってプロジェクトを進めています。地域的にも東北大学だけでカバーできるところは、宮城県を中心としたところになりますが、東大が岩手県で調査をやってくれて、沖合の調査は海洋研究開発機構がやっているというように、みんなで協力してプロジェクトをやっています。ただ、国民に幅広く伝えていくという意味で、そういう広報活動ができているかと言われると、今のところなかなかないというのも確かです。サイエンスカフェなど、市民の方に来て頂く取り組みはたくさんあるけれども、それでは全部ではないですよねというのが、C 君の質問の意図だと思いました。そういう観点でいくと、地域に先生方が出かけていくという取り組みもいくつかあります。サイエンスカフェの「出前版」というのは語弊があるかもしれませんが、加齢医学研究所の先生方が行っている取り組みです。加齢医学研究所は、「脳トレ」で有名な大先生がいらっしゃる、スマートエイジングを研究しているところです。そういう先生方が地域に出向いて地域の人とお話をするという取り組みも、中にはあるということでよろしいでしょうか。

司会（関内）：ありがとうございました。

学生 C：ありがとうございます。それで、今の話に対してなんですが、大学自体ではなくて、将来は私達もみんなそういう場に立たなくてはいけないと思うんですね。今この大学にいる間に、より視点を広げ、多くの方に対して色々なものを発信できるようにするためには、どのような力を付ければいいのでしょうか。

花輪：サイエンス、科学を何で我々進めようとしているのかというと、旺盛な好奇心のためというのが昔々の、この辺は野家先生が一番得意な分野だと思いますけれども、私なりに。好奇心を満たすための科学っていうのが従来の科学だとすれば、今は社会のための科学というのがものすごく重要視されていて、それがかなり重要な部分をだんだん占めてきていると思うんですね。単純に面白いからやってみようというだけでは済まされない、社会のための科学という分野がどんどん進んでいって我々研究者は、では一体社会が必要とする科学の何をできるんだろうかと。そういう問題意識を一方では常に持ってやることが必要なんだろうと思います。皆さんが大学で今から数年間過ごすわけですけれども、いつもそういうところ。大学でやっている営為っていうのは、一体社会とどういう結び付きがあるのかというのを、やっぱり皆さん自身が常に考えるということが、大事なんだろうと私は思います。野家先生、いかがですか。

野家：そうですね、花輪先生が言われた通り、科学のための科学ではなく、社会のための科学、science for society という考えは今、世界的にも科学者コミュニティの重要な目標になっています。先ほど、大学を越えた連携体制がどうなっているのかというお話がありましたけれども、ひとつは「日本学術会議」という組織があります。お隣の森田先生をはじめ、東北大学の中にも会員や連携会員に選ばれている先生方多数おられます。日本学術会議では東日本大震災が起こった直後から、委員会や分科会を立ち上げて、全国的なネットワークというか組織の中で支援活動や、あるいはこれからの復興・復旧に向けての新たな提案とかをしています。ですから、東北大学だけで我々は活動しているわけではなくて、それぞれの先生方はそれぞれまた専門学会に属しています。その学会ごとに、やはり色んな社会的な活動を行っていますので、そういうことを通じて社会に貢献しているわけです。ですから大学は閉じた組織ではなくて、常に社会に開かれた形で活動しています。特に現代は、サイエンスのみならず「トランスサ

イエンス」という言葉で語られるような状況が出てきています。トランスというのは、科学を超えたという意味ですが、例えば原発事故にせよ、あるいは鳥インフルエンザやBSEの影響とか、そういったことは特定の分野の研究だけではなくて、社会や経済や政治や文化、色んなことと結び付いているわけですね。ですから現代の「社会の中の科学」というのは、それだけで孤立して実験室の中で営まれるのではなくて、実験室がそのまま社会と地続きになっている。それだけに、それぞれの研究者、科学者も社会とのつながり、社会に対して自分の研究がどういう関わりを持っているのかということを常に意識して、社会のために何ができるかということを考えながら自分の研究を進めていかなければならないという時代に入ってきています。その意味では、今Cさんが言われたような社会と科学のつながりというのは、これからますます強まっていくと思いますので、皆さんが社会に出る頃には今以上にそういう社会貢献や、社会活動というものが求められるような時代に入って行くだろうと思います。

司会（関内）：はい、ありがとうございました。時間が少しずつ差し迫って来ていますが、先ほど3人ぐらいの方から手が上がっていましたね。もう一度手をあげてください。さらにたくさんあがりましたね。では女子学生から、今まで男子学生ばかりしていたので、女子学生からお願いしたいと思います。はい、そちらの方から。

学生D：理学部のDと申します。私は研究者を目指しているんですが、色々な論文などが英語で書かれているというところもあるように、世界とのつながりがすごく大切だと思います。生協などでも留学の案内がたくさん出ていたり、もちろん語学研修という面はあると思うんですが、世界とのつながりはどういった面で今私たちにとって大切なのかを教えてください。

司会（関内）：グローバル時代の教養教育というテーマですので、大変良い質問を頂いて、ありがとうございます。花輪先生、いかがでしょうか。

花輪：すみません、この場所すごく聞き取りにくいんです。もう一度お願いできますか。

学生D：研究者とかそういう、未来のことを考えた時に、今の私たちが世界とどうつながっていくかということと、その大切さを教えてください。

福西：世界とのつながりについてですが、研究の世界というのは今まさにインターナショナルにやっています。東北大のどの研究室も世界と共同でいろいろな研究を進めています。それは先生方が進めているだけではなく、そこにはもちろん大学院の学生も入ってくる。ただ教養の1、2年の段階で、世界とどういうふうにつながっていけばいいかという、多分そういう質問だと思うんですが、その時に私が一番期待するのはまず留学ですね。短期でも長期でもいいですが、留学して世界の人と友達になること。それが一番手っ取り早い方法だと思います。それからもうひとつは、東北大に今1,500人ぐらい留学生が来ています。ものすごくたくさんの留学生がいます。その留学生たちはみんなよく話してくれます。そこで留学生と友達になるということも非常にいいことではないかと思います。それから東北大学の寮の中で留学生と一緒に生活する寮があるんですね。そういうところに入った学生に話を聞くと、留学生からいろいろな刺激を受けると言います。考え方も違うし、だけど話していくと分かり合ってくる。東北大というのはそういう意味では世界とつながる様々な活動ができる場だと思うんですね。ぜひそういう場を活用してもらいたいと思います。

司会（関内）：はい、ありがとうございました。どうでしょうか、これで納得できましたでしょう

か。とりわけ1、2年生の時には積極的に、というお答えでしたけれども。

学生D：はい。じゃあ積極的に留学生の方とお話をしたり、短期でも長期でも留学したりというのが今の時点でも大切だということですか。ありがとうございました。

司会（関内）：非常に大切で、今年度からグローバル人材の新しいプログラムも始まりますので、ぜひチャレンジしてほしいと思います。では、この間ずっと手を挙げている人がいましたので、そちらの人にお願いします。

なお、実はもう予定の時間になっていますが、たくさんの質問が出ていますので、15分ぐらい延長したいと思いますので、皆さんご了承ください。ではどうぞ。

学生E：理学部のEです。さっきの2人の質問に関連してなんですけれども、いくら優秀な教授が津波の再来を予測したとしても、その時は国民への働きかけが足りなくて事故の予防が十分にできなかったのに加えて、国民というか市民の論文への関心が足りなかったのも原因だと思います。その関心がないのは、市民の大学への期待が少ないというか、もう少し大学側が市民に対して自分達の研究の利点などを伝えていくことが足りないのではないかと思うんですけれども。先生方に意見を伺いたいです。

司会（関内）：ありがとうございます。いかがでしょうか。では花輪先生、お願いします。

花輪：はい、全くその通りだと思います。それでサイエンスカフェ等々は、研究者自身が行って市民との対話ということで、情報の伝達を担う場なんですが、最近は研究者と市民を結び付ける専門家、サイエンスコミュニケーターとか、インタープリターとか、そこに、あるスキルを非常に磨いた人を中において、情報発信しようとするようなことも行われています。例えば研究者が研究して、ある成果を出したとすると、それが分かりやすい言葉で、分かりやすい例で、こういう意義があるというところを専門にするような方ですね。日本の中にいくつかの大学でそういう人たちを専門に育成しようというところも出てきています。でも本学はどうかと言いますと、やはり少し私自身は足りないのかなというふうに思っています。そこの部分を強化していかなければいけないというのはその通りだと思います。それから、肝心の一番最初の箕浦先生がああいうことを発見したにも関わらず、何も対策取れていなかったのは、というところの問題なんですが、これも大変本当に重要な指摘で、なおかつ難しい、克服するのに難しい問題だと思いますが、やはり研究者と一般市民の間の信頼関係の構築が一番大切なんだろうと思います。また、例えばちょっと近々の例を出して悪いんですがあるところで断層かどうかを見たところ、断層だと言ってしまった一月後に、あれは古いコンクリートの破片が入っていただけだということで、ものすごい問題になりましたね。ご存じですか。活断層の研究で。ああいうことを、私やっぱりあれは猛省すべきだと思います。研究者が。ああいう非常に誤ったことを情報発信してしまったというのは、やっぱり信頼関係を損ねる出来事だったなと。我々研究者は、やっぱり細心の注意を払って、きちんとした情報をきちんとした形で社会に還元すると。それが一番必要なことであろうというふうに私は思います。

司会（関内）：では、他にいかがですか。はい、それでは順番にお願いします。

学生F：私は経済学1年生Fと申します。中国から参りました。さっき先生がおっしゃったようにアジア各国の学生達は今すごく頑張っていますが、でも全体的に見ると、アジアの教育と欧米は

まだある程度の差があると私は思います。東北大学はアジアのリーディング大学として、欧米の大学と対等に戦うことができるように、私達学生に対して具体的にどんな支援制度があるのか。これが１つ目の質問です。また、面接をした時によく聞かれた質問、「東北大学生としての誇りは何ですか」。今度は先生たちに伺いたい。私達は東北大学生として、一体どんなところを誇るべきかと。これが私の質問です。

司会（関内）：はい。２つ質問がありました。

花輪：とても難しい質問ですね。具体的にということは非常に難しい質問ですが、よくグローバルスタンダードという言葉で、世界標準という言葉で、こういうことをやればいいんだと。これが世界に追い付き、追い越して、世界に伍して並ぶようなことができるんだというふうな話がありますけれども、私は日本の小中高、あるいは家庭から入れたい。家庭、小学校、中学校、高校、あるいは社会制度全部含めて、日本の大学の教育ができていると思うんですね。その大学の中で、世界標準で、世界で、世界の海外の大学でやっていることを同じようにやっても、これは成り立たないと思います。やはり、あくまでも日本の社会システムの中の大学っていうことですので、その中で伸ばせるところはもっと伸ばす、得意なところは得意な、強みは強みとして残して、足りないところを伸ばしてやると。そういうことしかないんだろうと思います。じゃあ今、一番何が本学足りないんですか。あるいは日本の大学足りないんですかと言うと、海外とのコミュニケーション能力の低さなんだろうと思います。簡単な言葉で言うと語学教育みたいなものなんだろうと思います。やっぱり日本の学生っていうのは、海外に出て行きたくない、よく内向き志向と言われていますけれども、それはひとつには語学の能力っていうのがあると思うんですね。できる限り、私はそこの部分の障壁を取るようなことがまず本学、あるいは日本の大学にとっては必要なのかなと。行って、海外の色んなところを見て帰ってきたら、それがモチベーションになって自分で学んで世界に伍して活躍できるような人達になっていくんだろうなというふうに思います。ということで私の回答は、世界と同じ、世界の大学と同じようなことを日本の大学でやっていいかというと、それはそういう問題ではない。社会システムの中に大学は位置付けられているので、それはそれで認めて、ひとつひとつ障壁を取り払っていって、世界のリーディングユニバーシティーの仲間に入るんだろうと思います。現在一番大切だと思うのは、世界の中で色んな人とコミュニケーションを取る能力、有態に言えばもう語学。そこの部分を、きちんと力を付けさせることかなというふうに思います。

司会（関内）：ありがとうございました。２番目に頂いた質問、東北大学が誇るべきものは何ですかという質問には、東北大学への入学を友人に誇りたいという留学生の思いが出ています。非常にいい質問を頂きましたので、これは討論の最後に５人の先生方から、東北大学が誇るものということで、ご発言頂きたいと思います。では他に質問お願いいたします。まだ、たくさん質問がありますね。

学生Ｇ：理学部のＧといいます。話を聞いていてすごく引っかかったところがあるんですが、花輪先生が「社会に役立つ科学」という言葉をおっしゃったと思います。それはつまり実利というものを考えた上での学びということを指すと思いました。ここで教養の話に戻りますと、教養教育という考え方では、皆さん広い教養を得ることが大切だということをおっしゃっていたので、自分が元々考えていた研究に直接関連しないような、そ

ういう実利を度外視した学びを大切にすることだったと思うんですね。そう考えると、この２つの考え方は相反するもので、いずれ一筋縄ではいかないというのも納得できるんですが、どこかで衝突することもあると思うんですね。僕達１年生は今、時間割等を組む上で実際にそういう葛藤に晒されているわけなんですが、個人の考えとして皆さんはそういう時にどちらを優先させて考えるのか。あとはそう考える理由というものを伺いたいんですが。よろしいでしょうか。

司会（関内）：社会に役立つ科学という言葉を聞くと、どうしても実利というようなものを連想してしまう。しかしそれは、今までお話のあった教養を身に付けるということと矛盾しないかという質問をいただきました。いかがでしょうか。

花輪：私は全く矛盾しないと思っています。実利と言うと非常に直接的なダイレクトな意味で、これをこういう研究をやったら社会の人皆さん、すぐ明日にでも喜ぶというイメージで捉えていませんか。それもありますけれどもそうじゃなくて、ある意味長い目で見たり、例えば私達が何で我々生きているんだろうというふうに、非常に抽象的な問いですよね。その問いに答えるための何かをヒントが得られてもそれは、私は社会のために役立つ科学だと思います。ということで実利の中身なんですが、もっと幅広く捉えた方が私はいいのかなと。社会のための科学と、そういう言葉を使ったとしても。その中で、教養とはじゃあ何ということであれば、その社会のために役立つものは何かと。例えば捉えること、そのこと自身がものすごく社会を理解する力がないと、獲得できないものだと思うんですよね。だからそういうものを獲得するためにも、幅広く教養と言いますか森田先生の言葉、なかなか身に付かない、というのは私もその通りだと思いますけれども、絶えまず、絶えず、教養を身に付けるためにというのはちょっと変な言い方なんですが、例えばいつも読書に親しむとか、そういうことを通して培われるもんだろうなというふうに思います。だから私の回答は、私の中では今のご質問に対しては、相矛盾するものではないんじゃないのというのが私の答えです。

司会（関内）：はい、では森田先生お願いいたします。

森田：最近山中先生がノーベル賞を貰いましたよね。あの研究を見てみると、最初はやはり知的好奇心で始めているのだと思うんですね。ところがその研究を進めていったら、すごく役に立ちそうになってきた。科学の研究は大体そんなものだと思うんですね。あまり実利に捉われすぎていると、大きな役に立つものを見逃してしまう。だから、面白いものを研究するっていうことは非常に大切なことであって、それをやっていく中で色々役に立つことができることが多いと。そういうのが科学の本質だと私は思います。

司会（関内）：他にいかがでしょうか。よろしいでしょうか。

福西：役に立つ研究は何かと考えると、本当にそれは答えがないと思うんですね。全て研究というのは役に立つと思うので。ですけれども役に立つことをやりたいという、その気持ちが一番大事だと思うんですね。だから、教養に入ってきて、大学で自由にいろいろなことができる今の段階で、世の中の役に立つことをやりたいと思う。そういう気持ちがあれば、必ず自分がやっていく中で何か発見していけると思うんですね。最終的に、それが役に立つということになっていくと思います。だから、最初からこれが役に立つかどうかと考えるよりも、「役に立つことをやりたい」ということをいつも考えていれば、どこかで必ず気が

付くことが出てくるような気がするですが。

司会（関内）：ありがとうございました。では、野家先生お願いいたします。

野家：ただ今のは大変いい質問だと思いました。確かに、社会に役立つ学問とか、社会のための学問というと、実利とかあるいは市場原理といったことに大学が振り回されているのではないかと考えられるかもしれません。私が専門にしているのは哲学なのですね。だから哲学が社会に何の役に立つのかと聞かれるといつも困るのですけれど。哲学は何の役に立つかと学生から質問された時には、「哲学というのは役に立つとはどういうことかを考える学問だ」というふうに答えています。ですから、それぞれの学問にはそれぞれの知的関心に基づいて、深めれば深めるほど多分直接的に社会に役立つということとは関係のない、純粋な理論的な世界の中に入っていくのだろうと思いますが、やっぱりそれでもその人間が持っている知的好奇心というのは、最終的にはこの人類がこの地球の上で、よりよく生きていくというか、最近は「持続可能な社会」ということが言われていますけれども、そこと一見縁がないようでも結び付いているのだと思います。確かに東北大学は開学の理念のひとつとして、「実学」ということを掲げています。明治時代に福沢諭吉が実学ということを言い始めましたが、その時福沢が実学の中心に置いていたのは物理学です。ですからすぐに役立つというよりは、物事の原理をしっかりつかまえる、そのことによって最終的には回りまわって人類の福祉や幸福に役に立っていく。だからそういう直接的にすぐに社会の役立つということよりは、長期的な視野に立って最終的には人類の幸福のために役に立つ。それが大学で追求すべき学問だというふうに考えればよろしいのじゃないかと思います。

司会（関内）：ありがとうございました。まとめ的なお話を頂きました。時間がもう来てしまいましたが、ぜひこれだけは聞きたいという人がいたら受けたいと思います。この機会に、ぜひこれだけは、という質問、ではひとりだけ、端的にお願いします。

学生 H：工学部の H です。花輪先生の話の中の社会貢献力の要素のひとつに、芸術を愛する力というのがありました。ここでいう芸術を愛するというのがそもそも何なのかということと、芸術を愛することと社会貢献にどういう関係があるのか疑問に思ったんですが。

司会（関内）：ありがとうございます。この質問は今まで話題にのぼらなかったので、非常にありがたい。

花輪：美しいものを見て、美しいと感ずる力ということを言いたかったんですが。つまり、色んなことに感動できる心を養う。それを、芸術を愛する力という言葉で表現してみました。とすると、社会が抱える色々な問題に敏感になれる。課題設定できるということを言いたかったんです。私の身の回りに色んなことがありますよね。今日ものすごいきれいな夕焼けが見えたら美しいなと思う心。それを大事にできる心。そういうものを、やっぱり養うというのか、ひとりでに身に付いていくものだろうとは思うんですが、そういうものに触れると言いますか、どうして人間はこういうものを美しいと思っているんだろう。こういう芸術っていうのはどうして残るんだろう。なんでこれが名画なんだろうというのを味わう。そういうものを通して、例えばきれいなものをきれいだ。嫌なものは嫌だ。これは正義ではない、これは正義だという、そういうことを判断できる力を身に付ける。それが非常に大事なんじゃないかなという意味で、私は書きました。感ずる能力でいいです。

色んなことを感ずる能力を付けるということが、大事なんじゃないかなという意味で書かせて頂きました。

司会（関内）：ありがとうございました。感動する力、驚嘆する力ですよね。はい、では福西先生、一言。

福西：私は大学時代にオーケストラに入ってやっていたのでよく分かるんですが、音楽というのは右脳を刺激するんですね。論理的な思考だけをやっていると本当の教養は身につかない。やはり右脳と左脳と両方を刺激するようなことが非常に大事で、一見無駄なようですけれども本当にいいアイディアを出すためには、音楽も絶対に必要だと思います。

司会（関内）：ちょっと時間がなくなりましたが、先ほど私からお願いしておりましたこと、東北大学の誇りについて、先生方よろしいでしょうか。パネルディスカッションの締めくくりとして、5人の先生方から一言ずつ、東北大学はここが誇りですと発言頂いておしまいにしたいと思います。では、花輪先生からですね、よろしくお願いいたします。

花輪：はい、先生方が皆さんと共に苦労すると言いますか、苦闘すると言いますか。研究第一という言葉、私はやっぱり好きですね。第一線の研究をする中から、学ぶことができる、教えることができると。それを一緒にやってくれる先生が本学の中にはたくさんおられる。それが誇りです。

原：花輪先生のお考えに私も同感です。私も工学が専門なので、やはり常日頃、学生に研究第一主義を実践することを心がけていますし、学生にもそう言っています。皆さんに誇りにしてほしいのは、皆さんが見るべき背中がたくさんある大学だということです。かっこいい背中、つまり目標とするべき人がたくさんいる大学だと思います。だからその中から更にいい先生を、皆さんの好きな先生を選んでいけば、力が付くと思います。そのことが、私が思う東北大学の誇りです。

森田：私は、東北大学には伸びしろの残った人が多く入っていて、大学に入った時の力と卒業する時の力を比べて、伸びている人が多い大学だということが私の誇りです。

野家：東北大学の誇りということですが、私は実は昨年３月まで図書館長を務めていました。東北大学の図書館は全国的にもと言うか、世界的にも東北大学が誇りうる財産のトップであろうと思います。大学生活を有効に過ごすためには、図書館の存在というのが不可欠です。それで今、図書館ではオリエンテーションや様々な行事をやっていますので、ぜひ皆さんの大学生活の成否は図書館の活用にかかっているということを肝に銘じて、これからの大学生活を送って頂ければと思います。図書館には、だんだん分かってくるとは思いますが、夏目漱石文庫とか、狩野亨吉文庫とか、あとは外国書だとヴント文庫やケーベル文庫といった、他には見られない貴重なコレクションが揃っていますので、ぜひ図書館を活用して有意義な学生生活を送って頂きたいと思います。

福西：私の考える東北大学の誇りは社会貢献です。今日は学生の皆さん方から社会貢献ということについて多くの発言があり、本当に感心しました。私も教育に長年携わってきましたが、やはり最終的に伸びる学生というのは、社会貢献がしたいという学生ですね。だからその気持ち、今のその気持ちを忘れないで、まず教養教育で皆さん頑張って頂きたいと思います。

司会（関内）：ありがとうございました。５人の先生方に、拍手でもって感謝したいと思います。

（拍手）

閉会挨拶

高等教育開発推進センター長　木島 明博

司会（関内）：それでは、閉会の挨拶を頂きます。高等教育開発推進センター長の木島明博先生より閉会の挨拶をお願いいたします。

木島：本日は、ご講演いただきました先生方にお礼申し上げます。今日ここに来た人は、本当に幸せな方だと思います。なぜかというと、教養とは何かということを考えさせられたからです。私も実際に来て、皆さんの意見を聞き、皆さんの質問を聞き、その答えを聞き、はて、今日の結論は何だったのだろうかと思いました。そういう思いを皆さんも持ったのではないかと思います。つまり、教養とはひとつの価値観ではないんだということが、今日の結論ではなかったかと思っています。

その中で、ひとつだけ僕の方から言わせて頂きたいことがあります。さきほど、どこの外国に行ったらいいのかという質問がありました。それはどこでもよいのです。「百聞は一見に如かず」という言葉のとおり、見てくることと聞くことでは全く違うのです。1回外国に行くと、その外国のその人たちと接することによって、ネットでは得られない多くの情報を自分で得ることができます。またもうひとつ。その時に、自分がどう感じるかという経験。外国で色々疑問に思うこと、感じること。それはこれまでの自分の経験と比較して感じることになっているのです。それが大切なのです。授業でも同じです。生きているこの時間の中で、面白くない授業があったとします。その時に、この先生何を考えて授業をやっているのかな。この先生というのは、どういうバックグラウンドを持っているのかなとかを考え、何かを感じることも僕は大切ではないかと思うのです。つまり人を観察する、人を知る、そして自分を知ることがすごく大事かなと今日は考えていました。

どうも本日は、長い間本当にありがとうございました。

司会（関内）：新入生の皆さんには、2時間半にわたってご協力頂きましてありがとうございました。特別セミナーをここに閉じたいと思います。これからの4年間あるいは6年間、皆さんが様々な面で頑張って活躍することを期待しております。閉会でございます。

1.2 特別セミナーに対する学生の評価

このセミナーに対する参加者の感想や意見と、評価のおよその分布を知るためにアンケートを行った。方法として、参加者に渡す資料の最後のページに質問事項を記し、解答用紙としてミニットペーパーを配付し、終了後に出口で回収することにした。回答数は 124 であった。

アンケート回答者の学部別構成を見ると、参加者数の多い工学部学生が全参加者の約 40%であり、工学部入学生の約 5.8%にあたる。その他の学部で、入学者数に対する参加者数が全学部平均 4%以上となっているのは、文学部、経済学部、理学部、農学部である。

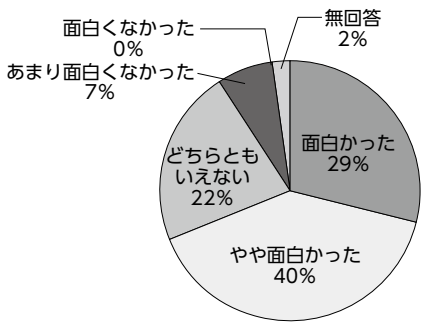
まず、継続の必要性については、約 3/4 の人が肯定的に考えた。内容についての反応を見ると、教養教育の大切さを感じ、勉学意欲を刺激された人が大半であったが、理解度については必ずしも充分だったとは言えないようである。これは昨年度の傾向と共通している。セミナーとしては成功したと思われ、話題提供をした立場からは概ね満足できる回答であろうが、理解度をあげるための努力は必要だと思われる。関心が増したことを肯定的に答え、今後の継続に結びつけるべきものであろう。

時間的な長さについては、もっとディスカッションの時間を長くして欲しいという意見が出ているが、様々な条件を考えると、概ね適切であったと思っている。

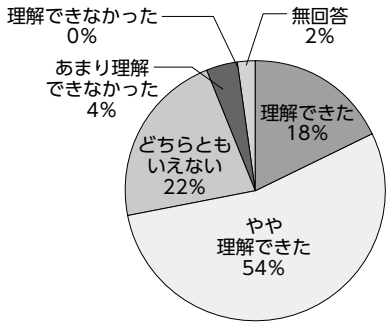
学部別アンケート提出者数と東北大学 1 年生との対比

	アンケート提出者		東北大学 1 年生		対在籍者
	実　数	全体比	実　数	全体比	提出率
文学部	8	6%	223	9%	4%
教育学部	1	1%	76	3%	1%
法学部	2	1%	160	6%	1%
経済学部	10	8%	267	11%	4%
理学部	18	15%	345	14%	5%
医学部	4	3%	278	11%	1%
歯学部	0	0%	54	2%	0%
薬学部	1	1%	84	3%	1%
工学部	51	41%	878	35%	6%
農学部	10	8%	160	6%	6%
無記入	18	15%			
教員	1	1%			
計	124	100%	2,525	100%	5%

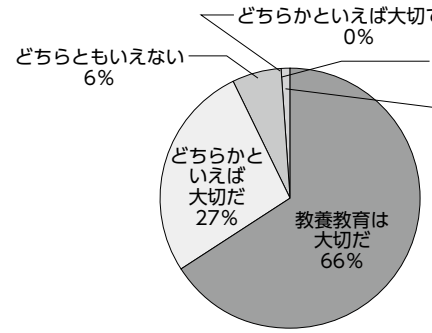
※参加者数は約 250 名



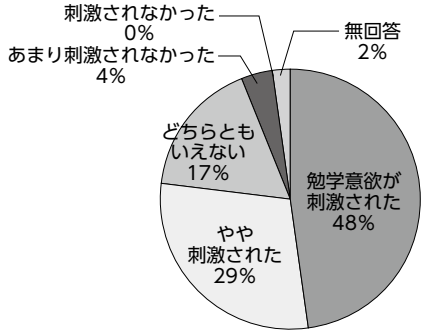
【質問 1】 面白さ



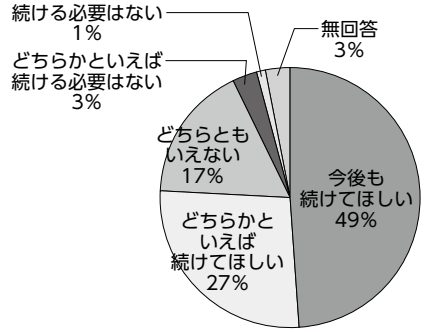
【質問 2】 理解度



【質問 3】 教養教育の大切さ



【質問 4】 勉学意欲



【質問 5】 継続希望

■質問 6・7、その他、の代表的なコメント等

［質問 6］あなたが今日のセミナー全体を通して最も興味深かったことは何ですか。

パネルディスカッション

・やり取りを聞いて、色々な考え方があることが分かった／自分の考えが変わってきた

・同じ新入生として、他の学生の意識／レベルの高さ

・教員が一つ一つに丁寧に応えていたこと

教養の大切さ

・今まで学習だと思ってきたことだけが学びではないこと

・国際的に通用する人間を育成するために必要／国際的な交流を通じて身に付くものだ

・社会貢献力が養われ、人間を理解する力がつく

・コミュニケーション能力の必要性を実感した

・頭が良くても汎用的技能がないと…

大学と社会

・研究者と社会の情報共有が足りていない

・復興に関しての市民との交流が大切だと感じた

・フィールドワークやサイエンスカフェなどが実施されていること（参加してみたい）

・「社会のための」科学を考えることの重要性を感じた

・サイエンスコミュニケーターに興味がある

震災・津波

・「文明が発達するほど災害の被害は大きくなる」ということ。文明は本当に万人の幸福につながるのか？

・放射性物質に対する風評被害の解決には学問の力が必要であること

・文理連携による地震・津波の研究が大切だと思った

国際化・グローバル化時代

・新興国の大学の学生たちと私たちの今後の関わりについて、自分に何ができるか考える機会になった

・外国人学生の率直さと日本人学生の質問の分かりにくさ。自分の言いたいことをきちんと伝えられる人材の育成が大切だと感じた

不満・疑問等と不明確なコメント

・3 つの講演は、歴史・事実の列挙にとどまり、各スピーカーが学生に何を求めているのかがよく分からない

・教養の意義を先駆的（？）に知ることはできないと思うが、先生方はそう思っていないのが意外だった

［質問 7］あなたは東北大学の教育にどんなことを期待しますか。

時間割・授業

・一般教養の充実。入学時に学科を振り分けることは疑問ではないか？（工学部）

・興味ある分野をとれるように定員（受講者制限）をなくすか時間割（開講時間数）を増やしてほしい

・文理問わずあらゆる分野の授業を受けることができるようにしてほしい

・卒業に必要な基幹科目を増やすことにより、教養をよく学ぶことができるようにすればよい

・基礎ゼミの時間を増やしてより広い教養を身につけられるようにしてほしい

教育の方針など

・「社会のため」「企業のため」という話だったがそれに引っ張られすぎない university としての教育を進めてほしい

・「学びの転換」だけでなく、教員の側の「教えの転換」も必要だ。現代の学生像に対応した、双方向形式の lecture などを期待する

・自ら主体的に学ぼうとする学生のサポートをしてほしい

・「東北大学だからこそ」といえるような教育をしてほしい

・教員と学生がもっと関われるようになって、質問等の交流が活発に行われるようになったらいいと思う

・将来リーダーになれるような教養と汎用的技能を重視すべきだ

・外国の大学のやり方で良いものを取り入れてほしい（ディベート等、コミュニケーション能力を鍛えるもの）

・このようなディスカッションの場をより多く設けていただきたい

留学

・留学のサポートと留学後の授業取得がスムーズになるカリキュラムの編成をしてほしい

・留学生と関われる機会を増やしてほしい

・金銭面のサポートをしてほしい

文系／理系

・文理の隔たりをなくしてお互いをより身近に感じるようにしてほしい

・理系には文系、文系には理系の科目が重要であることをもっと強く訴えたほうがいい

社会とのかかわり

・田舎の学校の意欲ある人たちにも大学の研究に触れる機会としてサイエンスカフェを出前して開催してほしい

・社会とのつながりを持ち、社会に何が必要か考え研究に生かせるようにしてほしい

国際社会

・海外に出ても生きていけるような高いレベルの教養と倫理観を養うことができるような教育
・世界で通用するような幅広いものの考え方
・世界の表舞台で充分に戦えるだけの語学力を鍛えるプログラム

その他、印象に残った点、改善すべき点などがありましたらお書きください。

良かった点

・教養とは何か、何を得るかなどを今は存分に考えていいと思えました。
・学生からの質問は「大学の本質・意義」的なものを追及するものが多く、対する先生方の返答も大学の理念が伝わってきて新鮮。
・早い段階で世界とつながっていくのが大切だとわかった。
・海外にもライバルがいることを改めて実感した。

不満足な点と改善要望

・パネルディスカッションの時間をもっと長くした方がよい。
・パネルディスカッションが教養教育の観点から大きくずれて、大学と社会のつながりの質問が多くなった。司会は話題を戻すべき。
・グローバル時代について期待していた内容と違った。
・もっと疑問を投げかけるような、考えさせるテーマを出してほしかった。
・広報にもっと力を入れ、もっと多く参加させるようにしたほうがよい。
・話題提供ではなく議題を１つに絞っても良いのではないか。新入生自ら議題を選ぶのも面白いのでは？

※質問６・質問７・その他に全く記載なし：18 件

「東北大学のチャレンジ～グローバル時代の教養教育」アンケート

このアンケートは、今回の特別セミナーに対する皆さんの率直な感想などをお聞きし、今後の教育に役立てようとするものです。所属学部･回答をご記入のうえ、会場の入口にあるボックスに入れてください。無記名で結構です。

※〔質問１〕～〔質問５〕は各質問の答となる１～５を選んで、１つ○をつけてください。たとえば質問１については、「とても面白かった」は５、「面白くなかった」は１、「どちらとも言えない」は３を、その中間の場合は４あるいは２を選んでください。

※〔質問６〕・〔質問７〕は自由にお書きください。

所属学部	学部		2013 年 4 月 8 日
〔質問 1〕	面白かった	5 ── 4 ── 3 ── 2 ── 1	面白くなかった
〔質問 2〕	理解できた	5 ── 4 ── 3 ── 2 ── 1	理解できなかった
〔質問 3〕	教養教育は大切だ	5 ── 4 ── 3 ── 2 ── 1	教養教育は大切でない
〔質問 4〕	勉学意欲が刺激された	5 ── 4 ── 3 ── 2 ── 1	勉学意欲が刺激されなかった
〔質問 5〕	今後も続けてほしい	5 ── 4 ── 3 ── 2 ── 1	続ける必要はない
〔質問 6〕 あなたが今日のセミナー全体を通して最も興味深かったことは何ですか。			
〔質問 7〕 あなたは東北大学の教育にどんなことを期待しますか。			
その他、印象に残った点、改善すべき点などがありましたらお書きください。			

■教養教育院　http://www.las.tohoku.ac.jp　Email info@las.tohoku.ac.jp　TEL 022-795-4723

第Ⅱ部　総長特命教授合同講義

教養はなぜ必要か
―就活に役立つ？

平成 25 年 10 月 22 日

平成 25 年度　教養教育院

総長特命教授合同講義

教養はなぜ必要か

―就活に役立つ？

2013 年 10 月 22 日（火）

時間 16：20 ～ 18：30（2 時間 10 分）

会場 マルチメディア教育研究棟 2 階 M206

受講者 公開の合同講義です。学生・教職員は自由に参加できます。
当日、直接、講義室においでください。

講義

日本的雇用慣行と大学教育：進路選択の基礎知識	猪股　歳之（教育社会学）	高等教育開発推進センター キャリア支援室　助教
リベラルアーツで育むグローバル人材	福西　浩（宇宙空間物理学）	教養教育院総長特命教授
教養と就活の関係と無関係	野家　啓一（哲学）	教養教育院総長特命教授

討論

海老澤丕道（物理学）　森田　康夫（数学・数学教育）
工藤　昭彦（農業経済学）　福地　肇（英語学）　各教養教育院総長特命教授
会場の皆さん

司会

前　忠彦（植物栄養学）　教養教育院総長特命教授

【お問合わせ】東北大学教養教育院　TEL：022-795-4723　E-mail：info@las.tohoku.ac.jp
http://www.las.tohoku.ac.jp

2.1 総長特命教授合同講義　事前配布資料

平成 25 年度教養教育院　総長特命教授合同講義　レジュメ

2013 年 10 月 15 日

総合タイトル

教養はなぜ必要か―就活に役立つ？

日　時：2013 年 10 月 22 日（火）　16：20 ～ 18：20
場　所：マルチメディア教育研究棟 2 階　M206 教室（マルチメディアホール）

事前配付資料

教養教育院総長特命教授などによる公開の合同講義を行います。この講義は、総長特命教授担当の総合科目受講者はもちろん、学生・教職員すべてに開かれています。

今回の講義では、共通テーマを「教養はなぜ必要か―就活に役立つ？」とし、前半 45 分の講義を行った後、休憩をはさみ、受講者と共に討論を行います。

【講義】
・「日本的雇用慣行と大学教育：進路選択の基礎知識」　猪股 歳之（教育社会学）
［高等教育開発推進センターキャリア支援室助教］
・「リベラルアーツで育むグローバル人材」　福西　浩（宇宙空間物理学）
・「教養と就活の関係と無関係」　野家 啓一（哲学）

【討論】
・海老澤 丕道（物理学）
・森田 康夫（数学・数学教育）
・工藤 昭彦（農業経済学）
・福地　肇（英語学）

【司会】
・前　忠彦（植物栄養学）

◆この資料について◆

この合同講義は受講者の皆さんも参加する 1 つの授業です。後半は皆さんにも発言していただきたいのです。この資料はそのために予め、前半に 3 名の教員が講義する内容の概略を、総合科目受講者の皆さんにお知らせするものです。これを読んで感じたこと、質問したいことを準備しておいて下さい。また、この資料は教養教育院のホームページからダウンロードすることもできます。

当日講義を聴きながら考えた、あるいは予め考えてきた質問やコメントを、休憩時間に『質問・コメントシート』に記入して提出して下さい。その中の幾つかを採り上げて討論の材料とし、残りは教養教育院のホームページの特集コラムでお答えします。

当日配付する資料の中に、今回の資料の最後にあるような質問・コメントシートを複数枚添付しますので、聞きたい相手（複数指定可）ごとに別の紙に書いてください。

【教養教育院ホームページ】http://www.las.tohoku.ac.jp

日本的雇用慣行と大学教育：進路選択の基礎知識

高等教育開発推進センター　　猪股 歳之

日本的雇用慣行として指摘されてきたのが､「長期安定雇用（終身雇用）」「年功型賃金」「企業内労働組合」の三つの仕組みで、これらをあわせて「三種の神器」と呼ぶこともある。さらにこれらの日本的雇用慣行と密接に結びついているのが「新規学卒者一括採用方式」と呼ばれる採用のあり方である。職業経験のない、つまり職務遂行能力そのもので評価できる状態にない学生を、在学中の限られた期間に選考し、職務を限定せずに（職種によっては限定される場合もある）、正社員として採用する。

こうした雇用慣行のもとでは、就業者は学校卒業と同時に企業等に採用され、年功序列型の賃金体系のもとで安定した雇用が保障される。このような働き方は、「就職ではなく就社」と揶揄されるように、多様な職務を配置転換（その多くが企業側からの一方的な通告である）で経験しながら定年まで勤め上げる、というイメージとして描くことができよう。一方で、こうした慣行は、企業側にとってコスト負担は重いものの、自社内での安定した人員確保と、長期的視野に立った効率的な人材養成を可能にしていた。また、労働組合が企業別に組織されることにより、自社の経営状況を無視した労働条件の改善が要求される可能性も極めて低くなる。

しかし、コスト削減への圧力から、こうした日本的雇用慣行にも変化が生じてきている。そしてその変化は、労働市場において相対的に弱い立場にある若年者に特に重くのしかかる。非正規労働の拡大は、低賃金や不安定な雇用といったそれに従事する者の問題であるだけでなく、限られた人数で増加する業務をこなす必要に迫られる正社員の過剰な業務負担（長時間労働化）にもつながる。さらに給与において成果に基づいて配分される部分が拡大すれば、競争的環境が強化され、その傾向がますます顕著になっても不思議ではない。

厳しさを増す就職環境のなかで、採用時に重視されるのは、職務を遂行するために必要とされる能力を保有している程度である。こうした能力を個別に定義し、測定することは極めて困難であるが、それらの核となる要素を汎用性のある「能力」として措定し、その獲得を可能にする大学教育のあり方が模索されている。専門職養成を目的とした一部の専門分野を除き、大学で学んだ専門分野に直接関係しない職に就く者の方が多いのが実情であるが、こうした「能力」を獲得することでチャンスを拡大する（あるいは縮小させない）ことが期待されている。この「能力」を学生時代のうちに涵養することは、学問と労働をつなぐという点のみならず、主体的かつ幅の広い学習を継続できるようになるという点で重要な意味を持っており、よりよい人生の実現を可能にする要素ともなるのである。

総長特命教授合同講義　2013 年 10 月 22 日（火）
教養はなぜ必要か―就活に役立つ？

リベラルアーツで育むグローバル人材

東北大学教養教育院・総長特命教授　　福西　浩

・グローバル人材が必要とされる背景

日本では最近「グローバル人材」という言葉が盛んに使われ始めた。企業はグローバル人材を求め、大学はグローバル人材の育成を目指し、メディアはグローバル人材に関するニュースを頻繁に取り上げている。その背景にあるのは経済のグローバル化と科学技術の急速な進歩と社会の多様化だ。従来の日本の企業は終身雇用と年功序列制度によって従業員に全面的な忠誠を求める自由度の低い組織だった。従業員は企業を発展させるために必要な人的資源と考えられていた。しかし加速するイノベーション時代では、従業員のモチベーションを上げ、個々の能力を引き出し、組織全体の競争力を高める必要が出てきた。企業と従業員がともに成長していくパートナーの関係となる自由度の高い組織がこれからの企業の姿である。

・グローバル人材に求められる能力

グローバル人材に関しては人によってさまざまな考え方があり、決った定義はないが、国際的に使われ始めたグローバルタレント（Global Talent）に近い概念と考えられる。グローバルタレントとは全ての人、一人ひとりが才能、個性、強みをもったタレントであるとみなし、その人材の持つ能力をグローバルな視点で最大限に活用しようとする考え方である。

グローバル人材に一番必要な能力は、答えがない問題にグローバルな視点で取り組み、解決策を見出す能力であろう。この能力を獲得するためには、①多様性への適応力、②コミュニケーションスキル、③斬新な発想力、④タフな行動力を高めていかなければならない。多様性への適応力では日本人としてのアイデンティティをベースにした異文化への深い理解と尊重が必要となり、コミュニケーションスキルでは語学・情報スキル、論理的思考力、社交スキルが必要となる。発想力を高めるには問題を違った視点から見る力や知の統合による構想力が必要となる。また行動力を高めるには未知へのチャレンジ精神とリーダーシップが必要となる。

これらの能力が専門的スキルの獲得を目指す専門教育だけでは得られないのは明らかで、専門教育と教養教育の一体化が必要不可欠となる。またグローバル人材を育成する上で「学力」は大前提であるが、日本の大学生の学習時間がグローバルスタンダードからかけ離れている問題がある。日本では 70％の学部学生が週に 5 時間以下しか勉強していないが、米国ではそうした学生はわずか 15％で、60％の学生は週に 11 時間以上勉強している。さらに教養教育は画一的な教育から多様性をもった教育への転換が必要で、課題解決型授業や留学・国際ボランティアの経験が重視され始めた。これらの問題を東北大学での自分自身の教養教育実践例に基づき考える。

教養と就活の関係と無関係

教養教育院総長特命教授　　野家 啓一

はじめに

いささか人を喰ったようなタイトルをつけましたが、もちろん教養が直接に就活に役立つわけではありません。かといって全く無関係と言い切ることもできません。というのも、教養とは、つまるところ「人間力」にほかならないからです。

1.「採活」の経験から

私は 2005 年から附属図書館長として図書館職員の、2008 年からは理事として東北大学職員の「採活（採用活動）」に携わりました。具体的には小論文を読み、最終面接に立ち会ったわけですが、そのとき実感したのは、いずれにせよ付け焼刃は役に立たないということです。小論文にせよ面接にせよ、大事なのは「スッキリした簡潔な受け答え」と「ドッシリと落ち着いた立ち居振る舞い」です。こうした能力は、一夜漬けで身につく「知識」ではなく、まさに「教養」と呼ばれるべきものです。

2. 教養とは何だろうか？

「教養」という言葉は、もともとドイツ語の Bildung の訳語として大正期に定着したものです。Bildung とは「人間形成」とも訳されますが、内面的価値の形成を伴った精神的成長を意味します。要するに、教養とは近代市民社会を生きる自立した個人としての基礎的能力にほかなりません。先に教養を「人間力」と言い換えたゆえんです。ところが日本では、明治以降の西欧文化への憧れから、教養が西洋の文学・芸術・哲学に関する知識と短絡して考えられてきました。そのような古典的教養概念はすでに役割を終え、この科学技術時代にはもはや通用しません。

3. 教養の再定義

教養が「人間形成」であるとすれば、その「人間」を定義するためにも現在は人文知だけでは足りず、科学知をも必要とします。教養概念を再構築しようという試みのなかで、私が最も示唆を受けたのは、歴史学者の阿部謹也さんの「教養とは自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のために何ができるかを知っている状態、あるいはそれを知ろうと努力している状態である」という定義です。この提案を踏まえながら、私は「教養とは、歴史と社会の中で自分の位置を確認する地図を描くことができ、それに基づいて人類社会のために何ができるか、何をなすべきかを知っている状態である」とモデファイしたいと考えています。それゆえ、現代の教養は人文知と科学知、言い換えれば社会文化リテラシーと科学技術リテラシーの双方をその射程に収める必要があるのです。

おわりに

教養を獲得するために特別の訓練は必要ありません。四年間の充実した大学生活を送っていれば、授業やゼミ、サークル活動やボランティア活動などを通じて、それは自然に身に着いていくものです。その意味では、教養にも就活にも、ともに「王道」はないのです。

平成 25 年度　教養教育院

総長特命教授合同講義

教養はなぜ必要か
―就活に役立つ？

日時　2013 年 10 月 22 日(火)　１６：２０～１８：３０

場所　マルチメディア教育研究棟２階　Ｍ２０６教室

当日配付資料

●はじめに：　教育・学生支援・教育国際交流担当理事、教養教育院長　花輪 公雄（海洋物理学）

●講義：　４５分程度

１．日本的雇用慣行と大学教育：進路選択の基礎知識
高等教育開発推進センターキャリア支援室助教　猪股 歳之

２．リベラルアーツで育むグローバル人材
教養教育院総長特命教授　福西 浩

３．教養と就活の関係と無関係
教養教育院総長特命教授　野家 啓一

●休憩：　１５分程度
『質問・コメントシート』作成、回収

●討論：　６０分程度
猪股 歳之（教育社会学）、福西 浩（宇宙空間物理学）、野家 啓一（哲学）、
海老澤 丕道（物理学）、森田 康夫（数学・数学教育）、工藤 昭彦（農業経済学）、
福地 肇（英語学）、会場の皆さん

●おわりに：　高等教育開発推進センター長　木島 明博（海洋生物学）

●司会：　教養教育院総長特命教授　前 忠彦（植物栄養学）

※『質問・コメントシート』は A5 サイズのカラー用紙です。休憩時間中に係員が回収にまわります。
提出いただいたものの中から幾つかを採り上げて本日の討論の材料とし、残りは後日教養教育院のホームページの特集コラムでお答えします。
※今後の合同講義等改善に役立てる為、講義終了後、アンケートのご協力をお願いします。
この資料の最終ページに質問があります。回答は別紙ミニットペーパーに記入してください。
（下記総合科目を履修している学生は、必ず提出してください。）
※総合科目履修学生は、アンケートとは別に、担当教員の指示に従ってレポートを提出してください。
【火５講時】　「科学と人間」（海老澤丕道）
「教育と科学技術」（森田康夫）
「環境と経済・社会の調和に関する多様なアプローチ」（工藤昭彦）
「植物面白考―巧みな生存戦略と私達の暮し」（前忠彦）
「急成長する中国の科学技術と経済」（福西浩）

〈問い合わせ〉東北大学教養教育院　TEL：022-795-4723　E-mail：info@las.tohoku.ac.jp　http://www.las.tohoku.ac.jp

2.2 総長特命教授合同講義の記録

司会（前）：こんにちは。時間になりましたので、これから平成25年度の教養教育院主催の総長特命教授合同講義を開催します。「教養はなぜ必要か―就活に役立つ？」という大テーマのもとに、3人の先生にまず講義をいただいて、そしてそれについて皆さんから『質問・コメントシート』を通して、意見・コメントをいただいて、その一部を取り上げて討論に移っていくという流れになります。

最初に2、3注意並びにお願いがありますので、それについてご説明いたします。司会は私、前が担当させていただきます。本日は、映像と音声による記録を取っております。後ほど教養教育院のホームページに、この合同講義の様子を載せる予定でおります。記録に残ることを希望しない方がおられましたら、私達のほうに申し出てください。

それから皆さんのお手元の『質問・コメントシート』記入の仕方ですが、今日は3人の先生がお話しになります。どの先生に質問あるいはコメントしたいか、それが分かるように、先生の名前のところにチェックを入れていただき、質問・コメントの内容ごとにこの欄に書いてください。直接今日のお話に関係しないような質問の場合は、下の欄に書いてください。講義の後に15分程の休憩時間を設けます。その間に、係の者が回収にまわります。それをこちらで整理して、ディスカッションの時間に使うことになります。それでも、質問に全部答えることができなかったり、あるいはコメントに対応することができない、そういう場合は、後程ホームページで特集コラムを設けてお答えする予定でおります。

それからもうひとつお願いです。これからの合同講義の改善に役立てるために皆さんの評価を受けたいということで、後程アンケートをお願いします。ミニットペーパーの該当するところに記入して提出していただきます。それから、このアンケートは火曜日5講時の「総合科目」履修学生にとっては出欠届も兼ねておりますので、帰りに必ず提出してください。それから総合科目履修学生の方は、このアンケートとは別にそれぞれの先生からテーマが出ていると思いますので、そのレポートは各先生の課題に従って、それぞれの先生に後程提出してください。

それでは、プログラムに従って進めていきたいと思います。始めに、教養教育院の院長でもあり、また教育・学生支援・教育国際交流担当理事であられます、花輪先生のほうからご挨拶をお願いします。

はじめに

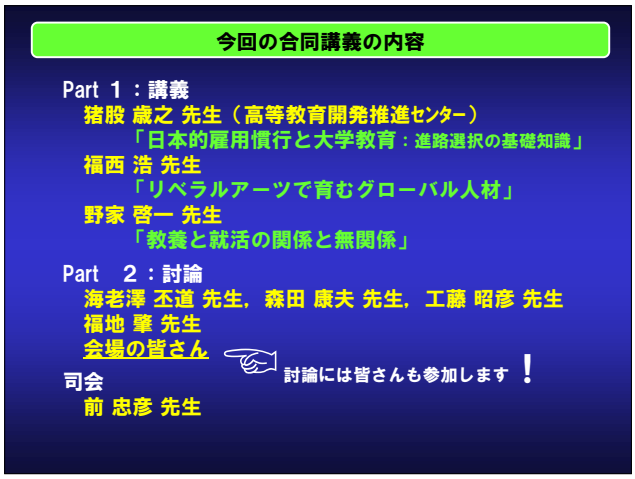
教養教育院長　花輪 公雄

花輪：皆さんこんにちは。ただ今ご紹介いただきました、花輪と申します［スライド1］。教育・学生支援・教育国際交流担当の理事をしております。今日は総長特命教授の先生方の合同講義ということで、お集まりいただきありがとうございます。この総長特命教授の先生方が所属している組織が、教養教育院であります。私はその院長を仰せつかっております。［スライド2］まず教養養育院という組織を紹介いたします。この組織は6年前の2008年に設置されました。現役時代に、研究と教育に実績のある名誉教授の先生方に、特に教養教育をお願いしたいということで、総長特命教授という肩書きで教養教育に当たっていただいております。

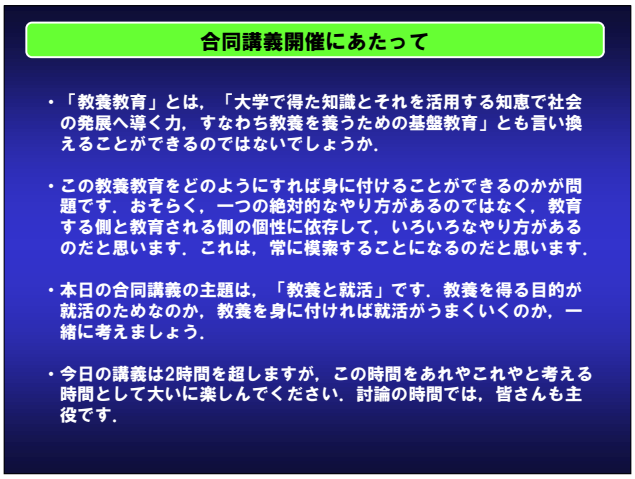
すでにOBの先生方もおられますが、現在7名の先生方が教養教育院の総長特命教授として色々な講義をしていただいています。それから5名の現役の先生が教養教育特任教員として、この組織には参加しております。『読書の年輪2013』という冊子があります。皆さん、入学手続書類の中に入っていたのを思い出すかもしれません。総長特命教授の先生方の講義などに、いや実はそうではなくて皆さん大学生だったら、ぜひ手に取って紐解いてほしい本が紹介されております。昨年度まで9名の先生方が総長特命教授として任命されていますが、各自6冊ずつ、合計54冊の本がここに紹介されています。いずれも名著と言いますか、定評ある本ですので、皆さんこの『読書の年輪』をガイドブックとして、ぜひ手に取って読んでいただきたいと思います。それから教養教育院のウェブサイトがあります。ぜひ訪問してください。今日のテーマに限らず色々な観点から、教養とは何か、教養教育とは何か、ということが記されているページがたくさんあります。［スライド3］今日の合同講義ですが、ご紹介ありましたようにパート1として、3名の先生方からお話しいただきます。パート2が討論です。先程、前先生から皆さんもっと前へ、双方向の授業をやるんだから、という話がありましたけれども、私は会場の皆さんが主役だと思っています。ぜひ、3名の先生方のお話の内容について、分からないところがあったり、あるいは自分だったらこう考えると、そういうものがありましたら、どしどしこの場で発言して、ある意味、先生方を困らせてください。［スライド4］教養あるいは教養教育の定義は何か。これは100人いれば100人の定義があるんだろうと思います。私は「大学で得た知識とそれを活用する知恵で社会の発展へ導く力」、これが広い意味での教養ではないか。それを養うことが教養教育ではないだろうかと。そんなふうに考えております。これも今日の一番最後でしょうか、野家先生のほうからきちんとした定義がまたあろうかと思います。それから、じゃあこういう教養をどうやって身に付ければいいのかということです。これも答えがひとつということでは全然なくて、皆さんと我々教員という関係性は非常に大事だと思うんですけれども、その関係性に依存して、色々なやり方で教養というのは身に付いていくのではないかと考えます。答えというのはなくて、時代と共に色々変わりますので、常に模索していくことかというふうにも考えております。今日の主題、教養と就活、関係あるのか、ないのかということが議論されていくということなので、皆さん一緒に考えましょう。考えるということは非常に楽しいことであると思います。考えた結果として、まだもやもやが続くかもしれませんし、自分はこう思うという、一転すごくがちっとしたものが得られるかもしれません。いずれにせよ、考えるということは、非常に我々の活動の中では楽しい活動なんだと私は思います。今から2時間近くありますが、ぜひ一緒になって考えましょう。大いにこの時間を楽しんでください。ということで、私の挨拶に代えさせていただきます。どうもありがとうございます。

［スライド 1］

［スライド 2］



［スライド 3］



［スライド 4］

司会(前)：それではこれから講義に入るんですが、その前に今日講義をしてくださる先生３人をまずご紹介したいと思います。猪股先生、福西先生、野家先生。それから討論のほうには総長特命教授の４名の先生方が参加してくださいます。ちょっと簡単に一言ずつ。

工藤：専門は農業経済学です。工藤です。よろしくお願いします。

（拍手）

森田：数学と数学教育をやっている森田です。よろしくお願いいたします。

（拍手）

海老澤：海老澤丕道です。物理学が専門です。よろしくお願いします。

（拍手）

福地：福地肇です。英語学を担当しております。

（拍手）

司会（前）：それから、締めをお願いしております高等教育開発推進センター長の木島先生です。

木島：木島です。皆さんの議論を聞いて、最後にまとめなくてはいけないので、今日はしっかり聞かせていただこうと思っております。よろしくお願いします。

（拍手）

司会（前）：特に今、ご紹介しませんが、これを行うに当たって、SLA サポート室の方々並びに教養教育院の補佐の鈴木さんにお手伝いいただいております。後程 SLA サポート室のほうから活動内容についての説明が、休み時間にあると思います。

講義「日本的雇用慣行と大学教育：進路選択の基礎知識」

猪股 歳之

司会（前）：それでは早速講義のほうに移りたいと思います。一番初めに猪股先生、お願いいたします。

猪股：皆さんこんにちは。高等教育開発推進センターの猪股と申します［スライド 1］。私のほうからは、後の議論に向けて、雇用の場における日本的な特徴と考えられているものについてお話ししていきたいと思います。本題に入る前に、［スライド 2］私の所属は高教センターキャリア支援室なものですから、キャリア支援センターの紹介のスライドを皆さんのお手元の資料にも入れてあります。一番覚えておいていただきたいのは、［スライド 3/4/5］1、2 年生から利用できるプログラムも、大変多く用意しておりますので、就活が始まってからだけではなくて、1、2 年生のうちからぜひ積極的に利用していただきたいということです。［スライド 6］それから、今月末から「東北大学学生生活調査」という調査を実施します。これは 2 年に一度、全ての学生を対象に実施している調査です。今年度皆さんに協力していただいて、2 年後にもまた協力をしていただきたいと思いますが、今月末に依頼状と、学生用メールアドレスへの案内メールをお送りしますので、それを見て協力をしていただければと思います。［スライド 7］それでは本題のほうに入りますが、［スライド 8］日本的雇用慣行という時に、よく指摘されるのがこの 3 点になります。1 つが長期安定雇用という雇用のされ方です。これは、採用されたら定年までずっと雇用が続くというもので、2 点目が年功賃金。年功序列という言葉がありますけれども、働き続ければその分給料が自然に上がっていくという仕組みですね。そして、労働組合が企業別にあるというのも日本的な特徴であるというふうに言われています。労働組合が企業別にあると、あまり無理なことは言えなくなりますので、労使の利害が大きく乖離しないということになります。この 3 つの特徴を合わせて〈三種の神器〉とよく言われています。［スライド 9］こ

の〈三種の神器〉が何をもたらすかということなんですが、おそらく組織と就業者の協調関係を非常に作りやすくなるのだと思います。それは働く側から見れば、非常に安定した雇用を保証されるということになるわけですが、一方で仕事の中身、働く場所、どういうトレーニングを受けるかというところまで、全て企業のほうにコントロールされるという状況に置かれることも意味しています。日本的雇用慣行として指摘されるのがこの3点なんですけれども、実は就職に関係するともうひとつ重要な特徴があります。［スライド10］それが、新規学卒者一括採用方式という採用の仕組みになります。これは、在学中に選考を行って、卒業してすぐにその選考を通った人を採用する仕組みです。多くの職種で、仕事の中身を限定しないで採用する、総合職などという言い方が典型的ですけれど、何をするかよく決めないで採用するわけですね。更に、学生時代に選考を行いますので、実際に働いた経験がない人、つまり働いた実績が無いですね。そうした実績が無い人を、何か別の間接的な指標を使って評価して、採用するかどうかを決めるということが行われている。学生の側から見ると、売り手市場とか買い手市場という言葉を聞いたことがあると思いますが、景気によってこの口が大きく開いたり狭くなったりするので、雇用の調整弁というふうに言われることもあります。ただ、採用される人数から言うと、この新規学卒者一括採用で採用される人数の比率は非常に高くて、競争相手は同じぐらいの歳の同じ時期の卒業生のみになりますので、採用される側から言うとちょっと有利な点もある。なのですが、一方でこの新規学卒者一括採用方式を利用できるのは、卒業する時の1回のみ。こういう制約が出てくることになります。こうした制約等もあるわけですが、この一括採用方式も、通年採用なんていう言葉があるように、色々な変化が起きてきています。［スライド11］この日本的雇用慣行の変化をもたらしてきた背景としてまとめられるのは、おそらくコスト削減の必要性とそれを可能にしてきた制度の変更ということになろうかと思います。景気が悪くなって、更にグローバル化して競争相手が世界中に出てくるというようなところでは、当然コストを削減しなければならない。これは特に人件費圧縮への圧力としてかかってくる。一方で制度的にも労働関係の法律が非常に弾力化されてきています。雇用者と被雇用者の力の関係は当然全く違っていて、雇用者がやりたいようにやれてしまうと、雇用される側にとっては非常に不利なことが簡単に起こる。なので、雇用の安定性を守るために労働関係の法律がある、という性格が見て取れるかと思うのですが、その中で雇用の在り方を弾力化していくような変化が起きています。例えば、期限の付いた雇用を認めるとか、派遣労働を色々な業種で認める等です。これは、安定した雇用とは反対の短くて不安定な雇用が認められつつあるということになります。こうした影響が、特に労働市場の中では弱い立場とされる若年者に重くのしかかっているということです。［スライド12］代表的な例が例えば非正規労働等になりますけれども、雇用が短くて不安定である。賃金も低くて訓練の機会も少なく、責任も与えられない。正社員に転換しようと思っても、それを後押ししてくれるような経験を持っていない。しかも、新規一括採用の入り口は使えませんので、中途採用になる。中途採用の入り口での競争相手は主に正社員として働いてきた人になりますので、相当厳しい競争になるということになります。［スライド13］一方で、正社員として就職できれば安心かというとそんなこともなくて、最近問題になっているのが正社員の長時間労働です

ね。これは人員削減の影響もありますし、競争的な環境がどんどん持ち込まれてくると、競争でよりよい結果を実現するために、どんどん労働時間が長くなるということが起こっています。また、深刻な問題として多く取り上げられているのが、早期離職率の増加で、就職して3年以内に3割ぐらいの人が仕事を辞めてしまう。これだけ厳しい競争を勝ち抜いて就職したにも関わらず、3割ぐらいが辞めてしまうという問題です。私は早期離職が一概に悪いとは思いませんけれども、あてのない辞め方をしてしまうと先程の非正規の枠組みの中に移って行ってしまうことになりますので、そういうことはちょっと考えておく必要があるだろうというふうに思います。［スライド14］この日本的雇用慣行、やはり安定した雇用という点でそこへの回帰を求める声というのが高くありますが、おそらくすんなりそのままは戻れなくて、多分職務とか役割を中心にした雇用システムに変更されていくことになるんだろうというふうに思います。［スライド15］こうした変化が起こることが予想されていますけれども、就職というところに目を向けてあげると、そこを移行する学生という存在は、教育のシステムから違う指向性を持つ労働というシステムの中へ移行していくことになります。この違った指向性を持っているそれぞれのシステムは、どういうところに価値を置いて活動しているかということを見てみると、大学教育というのは、当然ですが専門知識を身につけてもらうということを目標にしているわけですが、採用する側の人達に何を重視しますかとアンケートを取ると、大体コミュニケーション能力とか、主体性などというのが出てくることになります。［スライド16］ただ、東北大学卒業生については、専門分野の知識というものに対するニーズも非常に高くあります［スライド17/18］。こうした、一見ちょっと違う価値を持っているんじゃないかというふうに見えるものなんですが、共通する部分はどこにあるんだろうかということを考えてあげると、［スライド19］それが最近よく話題にもなりますが、基礎的・汎用的能力というものであろうと思います。この基礎的・汎用的能力というのは、働く上でも重要だし、大学教育の中でも身に付けられるものである。あるいは身につけられるようにしようというような理解がされているものになります。具体的な例で言うと、生きる力から始まって、学士力とか、社会人基礎力とか、エンプロイアビリティとか、キーコンピテンスとか、聞いたことがある言葉があるかもしれませんけれども、こういったものとして色々なところでまとめられているようなものになります。それぞれをよく見てみると、大体最後に「力」が付いていて、行動とか態度のレベルまでが含まれているもの、というふうに見ることができます。［スライド20］これは社会人基礎力ですね。［スライド21］これが文科省による社会・職業への移行に必要な力のまとめですけれども、というようなことが色々打ち出されてきているということになります。［スライド22］繰り返しになりますが、知を保有するだけでは不十分ということがこの「力」の中では出てきていて、知を運用するとか、新たな知を獲得できるとかですね。更にはそうした行動を取るための価値観とか行動様式というものまで含まれている場合も多くあります。こうした価値観とか行動様式というのは非常に人間の深いところまで入り込んでいるものですので、後から社内の教育で変えようと思ってもなかなか変えるのが難しい領域になります。なので、企業等組織としては、もしそういう行動様式が必要だとしたら、最初からそういう行動様式・価値観を持っている人を採用したほうがコストは少なくて済みますの

で、採用時にそれらを重視するということは大いに合理的であろうと考えられます。さらに、こうした態度は仕事で必要だといいますけれども、これはおそらくもっと広いところで使えるものであって、人生とか、この後も議論になりますが、教養というものの考え方にも通ずるところがあるだろうというふうに思います。東北大学卒業生も、この教養というものを非常に重視する立場を取る方が多くて、［スライド 23］これは東北大の卒業生に対するアンケート調査の結果から自由記述を抜いてきたものになります。例えば 3 つ目の医学部の卒業生の方は、どのような専門人となろうとも、全教養的な視点は忘れてはならない。とかですね、その下の工学部卒の方も、社会に出てから重要なのは、（特に東北大を卒業した者に求められるものは）総合的な人間力であり、専門だけでなく総合的教養を重視すべきだとかですね。といったような形で、東北大卒業生の多くは、将来のリーダーとなることが期待されていますので、［スライド 24/25］そういう期待に応えるためにも、教養と専門、両方を身に付けていくということが重要だろうと思います。［スライド 26］最後ですが、これは同じ卒業生に対する調査で行ったものですけれども、上のほうは、教養と専門というふうに科目を分けた時に、どういうふうに勉強したかったかというのを答えてもらいました。1 年生から卒業に向かってどう勉強するかということなんですけれども、専門だけでいいんだという人は 12％しかいないですね。それ以外の方は、教養がなければならないと。更に、教養をどういうふうに学びたいかというと、これはちょっと区別が難しいんですけれども、両方で言うと 67％ぐらいの方が、1 年生から 4 年生までずっと専門も教養も勉強できるといいと答えています。これは今計画されている、高度教養教育といった教育プログラムにもつながるもので、皆さんは今、この専門と教養の両方を学ぶチャンスを持っています。この機会を生かして、大いに学習していただければと思います。私のほうからは以上です。ありがとうございました。

司会（前）：ありがとうございました。卒業生が、卒業してみて教養をどう考えているかというデータまで示して説明していただきました。今日はまずお三方にお話をいただいて、それから休憩を取ってパネルディスカッションに移りたいということなので、この段階では質問は受けません。どうか、質問内容を忘れないうちに、今書いておいていただけたらと思います。

1

平成25年度　教養教育院　総長特命教授合同講義
「教養はなぜ必要か　－就活に役立つ？」
2013年10月22日

日本的雇用慣行と大学教育
:進路選択の基礎知識

高等教育開発推進センター　猪股　歳之

［スライド 1］

キャリア支援センターの紹介

2

- 窓口へ：
  管理棟2階　教務課
  窓口向かい側

- Webページも：
  「東北大学キャリア支援センター」で検索

［スライド 2］

1，2年生も多数利用しています

3

例1：インターンシップ情報
- HPで検索もできます

例2：公務員志望者向け相談
- 学年不問の個別相談

例3：キャリア相談
- 1，2年生向け個別相談

例4：アルバイト・家庭教師求人情報

例5：職業適性診断

など

［スライド 3］

4

全学教育科目
- 基礎ゼミ
- 展開ゼミ
  - 東北の「みらい」を拓く新聞論
  - 新聞から見た現代社会
  - など
- 総合科目・
  カレントトピックス科目
  - 社会と大学生
  - ライフ・キャリアデザイン
  - など

各種セミナー・ガイダンス等

「キャリア・就職ガイド」

など

［スライド 4］

5

これらの情報は、

- 窓口
- ホームページ
- メール配信システム

などから入手できます！

［スライド 5］

調査への協力のお願い

6

- 「第10回　東北大学
  学生生活調査」を
  実施します
- 2年に一度の、全学生を
  対象とした調査です
- 今月末に依頼状を
  発送します
  （郵送・学生用メール）
- ご協力をお願いします

［スライド 6］

目次

7

- 0. キャリア支援センターの紹介
- 1. 日本的雇用慣行
- 2. 就業をめぐる環境変化
- 3. 大学教育の目的と採用時に重視される能力
- 4. 教育と労働をつなぐ「力」

［スライド 7］

日本的雇用慣行

8

- 「長期安定雇用（終身雇用）」
  → 定年まで雇用される
- 「年功賃金」
  → 勤め続けることで賃金が上昇
- 「企業別労働組合」
  → 労使の利害が大きく乖離しない

↓

＜三種の神器＞

［スライド 8］

日本的雇用慣行

9

＜三種の神器＞

- 長期安定雇用（終身雇用）
- 年功賃金
- 企業別労働組合

↓

- 組織と就業者の協調関係を形成しやすい構造
- 一方で、教育訓練も組織内で行う部分が大きく、安定した雇用と引き替えに強いコントロールを受ける

［スライド 9］

日本的雇用慣行

10

- そして、「新規学卒者一括採用方式」
- 毎年4月1日に全国の企業が一斉に採用
  - 在学中に選考し卒業と同時に採用。教育と労働のシステムの間に時間的隙間がない
- 職務を限定せずに採用
  - さらに、実際の職務経験を持たないため、間接的な指標を基準に採用（教育訓練コストの見込みなど）
- 「雇用の調整弁」
  - 景気変動による雇用の緩衝材としての機能も併せ持つ
- 採用枠の保障＋制約　（→「卒後3年まで新卒扱い」の提言）
  - 大きな採用枠。しかし、未就業者の就職機会は基本的に最終学歴の卒業時のみ

［スライド 10］

就業をめぐる環境の変化

11

- 人口減、経済状況の悪化、グローバル化などによるコスト削減の**必要性の高まり**
  → 例：バブル崩壊後の「就職氷河期」、競争的環境の拡大、…
- 雇用制度の弾力化などによるコスト削減の**可能性の高まり**
  → 例：労働基準法改正による有期雇用の拡大、労働者派遣事業法改正による派遣可能業種の拡大　など
- そしてその結果としての、特に**若年者への大きな影響**
  → 例：「就職難」「非正規労働の拡大」「労働条件の悪化」、…

［スライド 11］

就業をめぐる環境の変化

12

- 非正規労働の拡大
  - 正規雇用から非正規雇用への代替領域拡大
  - 雇用継続の不安定さ（有期雇用、雇用期間内での解雇も容易）
  - 低賃金である上に、社会保険・福利厚生などの条件も低い
  - 職務内容が限定的、教育訓練の機会低い
  - 正社員への転換困難（新卒でなくなることで、「中途採用」が入口。しかしそこでは、正社員経験者との競争を強いられる）

［スライド 12］

就業をめぐる環境の変化

13

- 労働条件の悪化
  - 正社員の長時間労働化
    （人員削減、業績による評価の拡大　など）
  - 賃金上昇率の低下
  - 企業内教育訓練機会の減少
  - 早期離職率の増加
    （必ずしもすべてに問題があるわけではないが、
    就職後3年以内に3割が離職する傾向が続いている。
    離職後の再就職の際には中途採用の入口での選抜
    を経ることになる。）

［スライド 13］

就業をめぐる環境の変化

14

- 日本的雇用慣行の今後
  - 不景気による雇用安定化の重要性再認識
  - 特に高まる長期安定雇用に対するニーズ
  - しかしそれを維持する、もしくはそこへ回帰する
    ことは困難
  - 新卒者／既卒者、正規／非正規問題のような
    極端な格差を設けず、
    労働市場への出入りにおける自由度を高める必要
  - 職務や役割を基盤とした雇用と報酬の組み合わせ
    を重視した仕組みへ（能力・業績が重視される）

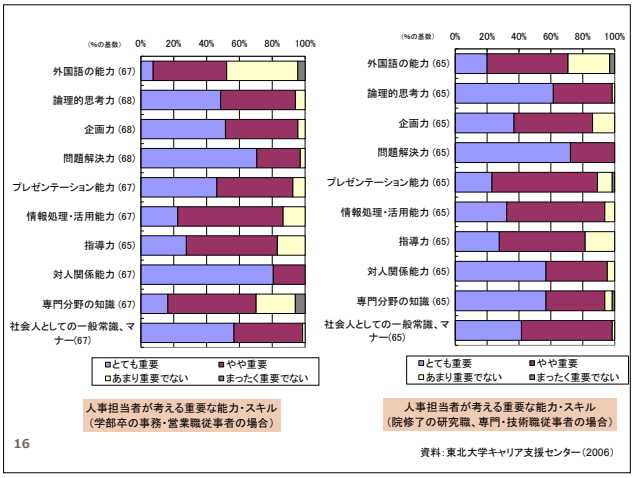
［スライド 14］

大学教育の目標と採用時に重視される能力

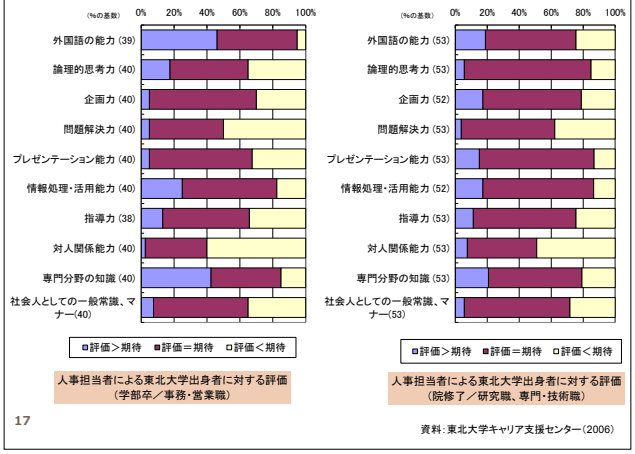
15

- 大学教育の目標
  - 高等教育機関として当然でもある「専門重視」
- 採用時に重視される能力
  - 「コミュニケーション能力」「主体性」などが重視される傾向
  - 東北大卒業者に対しては「専門分野の知識」を含め、全
    般的に高い期待
    （そして、その期待に十分に応えてきた卒業生）

［スライド 15］



［スライド 16］



［スライド 17］

大学教育の目標と採用時に重視される能力

18

- 大学教育の目標
  - 高等教育機関として当然でもある「専門重視」
- 採用時に重視される能力
  - 「コミュニケーション能力」「主体性」などが重視される傾向
  - 東北大卒業者に対しては「専門分野の知識」を含め、全
    般的に高い期待
    （そして、その期待に十分に応えてきた卒業生）
- 両者に共通する部分は？

［スライド 18］

教育と労働をつなぐ「力」

19

- それが「基礎的・汎用的能力」
- 採用時に重視される能力、もしくは、就業する上で必要とされる基礎能力は、学校教育を受けるなかで身につけられる
  - 「生きる力」、「学士力」、「社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力」（文科省）
  - 「社会人基礎力」（経産省）
  - 「就職基礎力」、「エンプロイアビリティ」（厚労省）
  - 「キーコンピテンス」（OECD）　　など
- いずれも、行動・態度のレベルまでを含む

［スライド 19］

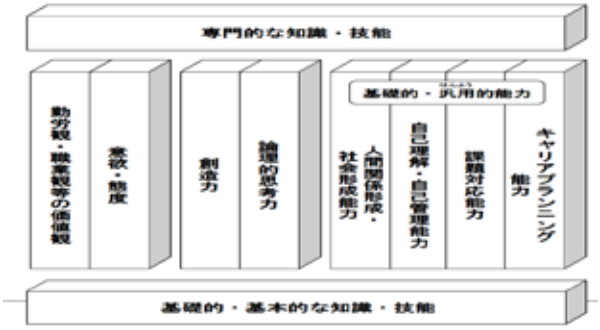
社会人基礎力（経済産業省，2006）

20

［スライド 20］

社会的・職業的自立、社会・職業への円滑な移行に必要な力（文部科学省，2010）

21



［スライド 21］

教育と労働をつなぐ「力」

22

- 知を保有するだけでは不十分
- 知を運用することができる、新たな知を獲得できる行動がとれることが求められる
- さらには、その前提として、そうした行動を支える価値観・行動様式を持つ、というレベルまでが期待されている
- 企業内教育などを用いても事後的に変革することが難しい（コストが大きい）からこそ採用の段階から重視
- こうした態度や志向性は、職業生活のみならず、人生そのものにもきわめて有益。教養とも通底。
- 東北大学卒業者も教養を身につけることの重要性を認識

［スライド 22］

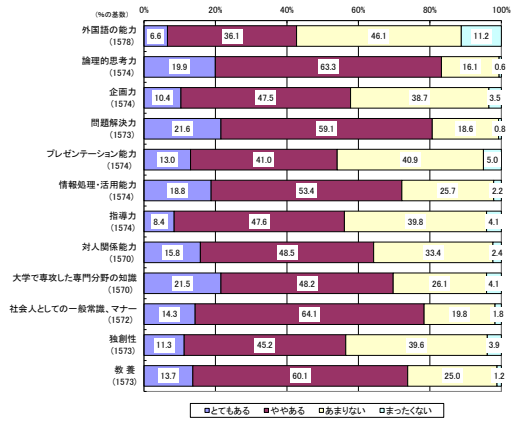
教養を身につけることの意義

23

- 教養は専門の土台となる一方で、専門を補完、促進するものであると考えるので、初期に教養をある程度身につけ、専門を学ぶ中でも教養に触れる機会を保つのがよいと思う。（文卒）
- 広い視野を持つために教養は必要。卒業して聞かれるのは専門分野。（経卒）
- どのような専門人となろうとも、全教養的な視点は忘れてはならない。（医卒）
- 社会にでてから重要なのは、（特に東北大を卒業した者に求められるものは）総合的な人間力であり、専門だけでなく総合的教養を重視すべき。（工卒）
- 社会に出て教養が必要なことは事実だが、勝負はあくまで専門分野である。（農卒）

資料：東北大学キャリア支援センター（2007）

［スライド 23］

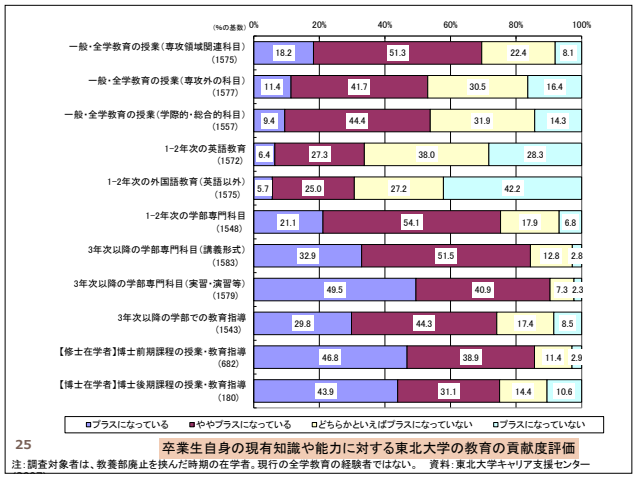


24

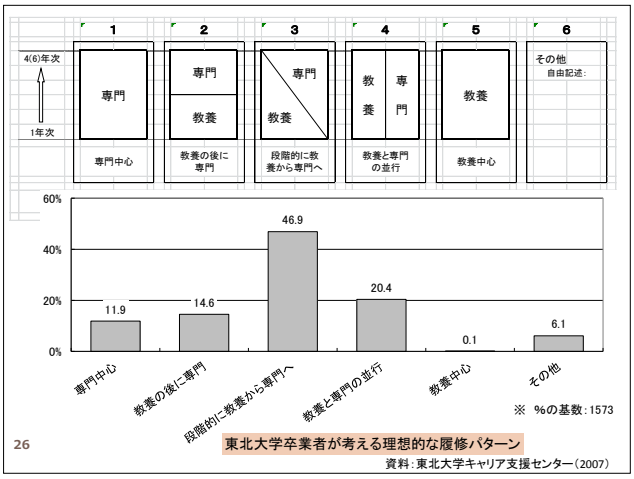
東北大学卒業者の能力・スキル等に対する自己評価

注：調査対象者は、教養部廃止を挟んだ時期の在学者。現行の全学教育の経験者ではない。　資料：東北大学キャリア支援センター

［スライド 24］



［スライド 25］



［スライド 26］

司会（前）：それでは次の福西先生、よろしくお願いします。

講義「リベラルアーツで育むグローバル人材」

福西　浩

福西：福西です。今日は「リベラルアーツで育むグローバル人材」というタイトルでお話をします［スライド1］。グローバル人材の話題は連日、新聞やテレビで報道されており、皆さん方の中にはもう聞き飽きたと思われている方も多いかもしれません。しかし私はまさにこのグローバル人材が必要だと思っていまして、私の経験も踏まえて、今日の話をしたいと思います。

［スライド2］この自己紹介のスライドにありますように、私はいろいろな経験を積んできましたが、アメリカでも生活し、最近では中国でも生活しました。それから宇宙空間の研究をしているんですが、そういう研究を国際チームの中で各国の人々と一緒に進めてきました。そういうことで、私自身、グローバルに活躍するということは非常に大事だと思っていますし、また同時に、グローバルにいろいろと行動することがすごく楽しいと感じています。自分自身で世界を動き回ることは非常に楽しいことです。だから皆さん方にもぜひ、そういう楽しい経験をこれからしてもらいたいという意味も含めて、今日はお話をさせていただきたいと思います。

［スライド3］今、世の中が非常に大きく変わろうとしています。皆さん方にとって大事なことは、これからの世の中がどうなっていくのか、それをきちんと想像することです。これが一番必要だと思います。先ほど猪股先生から、現在の日本の就職事情の説明がありましたが、これからはその状況が大きく変わろうとしています。じゃあどういうふうに変わるのか。それは人によっていろいろと捉え方があると思いますが、私がここでまとめた現在の社会の最大の特徴は、グローバル化と高度情報化です。こういうものが進行しているわけでして、その結果として多様性（Diversity）の増した複雑な社会に変わりつつあります。まず気がつく今日の社会の第1の特徴は、経済活動のグローバル化とそれに伴うグローバルな環境破壊の進行です。そのために私達はこれから、国家・地域社会の枠を超えた相互依存の世界に生きていかなくてはならないわけです。今日の社会の第2の特徴は、科学技術の急速な進歩と加速するイノベーションですね。その結果、新しい技術というものを誰もが習得し、新しい技術に適応していかなくてはならないわけです。第3の特徴は、社会が非常に多様化し、同時に非常に細分化しつつあることです。その結果、対人関係では自分と異なる人とのコミュニケーションの機会が、今までと比べて格段に多くなってきています。

［スライド4］じゃあ、そういう新しい社会では、企業はどういう人材を必要とするのでしょうか。皆さん方が数年後に巣立っていく時に、企業は一体どういう人を求めようとしているのでしょうか。これは、Human Resource から Global Talent への転換が起こりつつあると捉えることができます。猪股先生から説明がありましたように、今までは終身雇用や年功序列などの習慣があって、組織と従業員は縛り・縛られる関係だったわけですね。つまり、非常に自由度の低い組織でした。そういうところで企業は成り立っていたわけです。ところがこれからは、そういう閉じた組織では日本の企業はもうやっていけなくなっていて、従業員と企業は共に成長していくパートナーとなり、自由度の高い組織に転換しなくてはやっていけなくなる。その場合は、企業は単なる人材ではなく、Global Talent という人材を必要

とするようになり、雇用形態が非常に多様化していきます。従業員のモチベーションを上げて、個々の能力を引き上げない限り、組織全体の能力は上がっていかないという、そういう状況になりつつあります。

［スライド5］今、世界が求め出した人材はGlobal Talentです。グローバル人材というのは日本語でして、これに対応する確立された英語はありません。でも国際的に使われ出したGlobal Talentという言い方がほぼ日本語のグローバル人材に対応していると思います。タレントというと、皆さんは非常に特殊な人だと思っているかもしれませんが、このGlobal Talentの考え方というのはそうではなくて、全ての人、一人ひとりを才能、個性、強みを持ったタレントだと見なし、その人材の持つ能力をグローバルな視点で最大限に活用しようとする考え方です。最近、働く人は自分の「市場価値」や「キャリア形成」、「能力発揮」、「チャレンジの場」などを強く求めています。だからもし企業が、そういう従業員の求めにうまく対応できないと、その企業は競争力を失って衰退していくことになります。現在、企業の衰退が非常に早いスピードで進行していますが、従業員の能力をうまく引き出せなかった企業がそういうことになっています。逆に、従業員に対して魅力ある仕事や機会を提供することができる、そういう企業が急速にこれから伸びていこうとしているわけです。だから皆さん方には、そういう、これから伸びる企業にぜひ就職してもらいたいと思っています。

［スライド6］グローバル人材の定義というのは、日本でまだ決まったものはありませんが、いろいろなところでさまざまな議論がなされています。代表的なものは、産学協働人財育成円卓会議が昨年度に出したレポートです。このスライドにあるようにいろいろと書かれていますが、これを見ると、これだけ全ての能力を身に付けることはとても大変ではないかと皆さんは思うでしょう。でも私は努力すれば必ず獲得できると思います。

［スライド7］最近日本ではグローバル人材ということが盛んに言われ出しましたが、グローバル人材に関してはかなり前から国際的にさまざまな議論が進んでおり、グローバル人材には一体どういう能力が必要かという研究が盛んに行われてきました。代表的なものは2003年のOECD報告書の中でまとめられたキー・コンピテンシーという考え方です。これは個人の成功だけではなくて、社会が成功しなければ今後世の中が成り立っていかない。両方をうまくバランスさせなければいけない、そのためにはどういう能力が必要かと。そういう議論をしています。［スライド8］そして、個人が持たなくてはならない代表的な能力として、Category 1が道具を活用できる力、Category 2が集団でともに活動できる力、Category 3が自律的に活動できる力です。［スライド9］それぞれのカテゴリーで多様な能力が必要になってきますが、これらの能力を獲得する場として重要なのがリベラルアーツです。

［スライド10］でも日本のリベラルアーツは世界のトップレベルのリベラルアーツと比較して改善すべき多くの課題を持っています。日本の教養教育の一番の問題点は学生の学習時間が非常に少ないということです。グローバル人材を育てるということは能力の高い人を育てることですから、学力が決定的に大事になってきます。しかし日本では、70％近い人が週に5時間以下しか勉強していません。アメリカでは、逆に5時間以下というのはたった15％しかいません。また日本では、単位を取りづらいと見ると、単位を取りやすい学科に逃げるという問題もあります。それから、アメ

リカの大学は、非常に点数を重視して、GPA というもので5段階評価しており、この点数によって卒業や進級や奨学金等、全て決めていきます。それから就職も、GPA の成績によって大体決まっていきます。それが日本と非常に違う点です。

ただ、日本でも最近言われ出したことは、日本の大学生の学力を高めない限り、国際的に太刀打ちできないのではないかと。アメリカでは基本的に、学部ではリベラルアーツ（教養教育）をやって、大学院の段階で専門教育のほうに進んでいきます。そういうふうなやり方をやっているので、学部の時の学力というのを非常に高く評価します。それからもうひとつアメリカの大学の特徴は、進学率が非常に高いことです。約 70％です。日本は 56％です。アメリカの高い理由は社会人学生が 22％もいることです。日本では社会人学生はわずか 2％です。つまり、日本の大学というのは非常に限られた年代層しかいない。だから多様性に欠けるわけですね。アメリカはいろいろな歳の人がクラスに入ってくるので多様性に富んだクラスになります。

［スライド 11］さっき言った日米の学習時間の比較調査に関して、ここではその比較をグラフで示してありますが、1時間から5時間しか勉強しない学生を冷めた学生だと考えると、これが日本だと 67％で、アメリカだとたった 15％です。6時間以上勉強する燃えている学生がアメリカでは 85％と圧倒的に多いです。そういうわけで、日本の教養教育の一番の問題点は学習時間の問題で、教養教育できちんと学力を付けるためには当然学習時間をもっと長くしなければいけないですね。

［スライド 12］それではグローバル人材を育てるために、日本の大学教育をどのように改革していけばいいのか。いろいろと考えられますが、私が大事だと思ったことをこのスライドにまとめました。まず、多様性を持った教育への転換が必要です。そのためにはまず教える側が多様性を持たなくてはいけないですね。教養教育院というのはそのひとつの試みで、さまざまなキャリアを持った先生が教える側に入り、多様性ある教育に寄与しています。次に、学生の多様性を高めるには、私が一番効果的だと思うことは留学や国際ボランティアの経験です。外国で生活すると、自ら行動しない限り何も進みませんから、今まで気が付かなかったことに気が付くようになるし、自ら行動することが楽しくなってきます。3番目に、これはよく言われていることですが、単に受身の教育ではなくて、課題解決型学習だとか、問題解決型学習が大事ですね。こうした学習を教養教育の段階でどんどんやっていく必要があります。最後に、講義形式の時でもディスカッション形式の授業が非常に効果的だと思います。

［スライド 13］教養教育と専門教育の関係についてですが、両者は相乗効果があり、互いに高め合う関係でなければならないと思います。その際、一番大事なことは知的好奇心ですね。何にでも興味を持つ、そういう知的好奇心を高めることによってこそグローバルな人材を育てることができると思います。そのためには教養教育と専門教育がうまくかみ合わなくてはいけないですね。このスライドにまとめたグローバル人材に必要なさまざまな能力を学部1、2年の段階だけで獲得するのは不可能で、学部4年間、大学院を通して身に付けていくという考え方が必要だと思います。でも1年生では何をどの段階までやるのか、さらに少なくとも4年ぐらい先までは自分でやることを決めて、どんどんチャレンジしていく。そういうやり方が大事だと思います。

［スライド 14］現在、東北大学はグローバルリーダープログラムという新しい取り組みを始めてい

ますので、皆さん方がチャレンジする機会がものすごくたくさんあります。

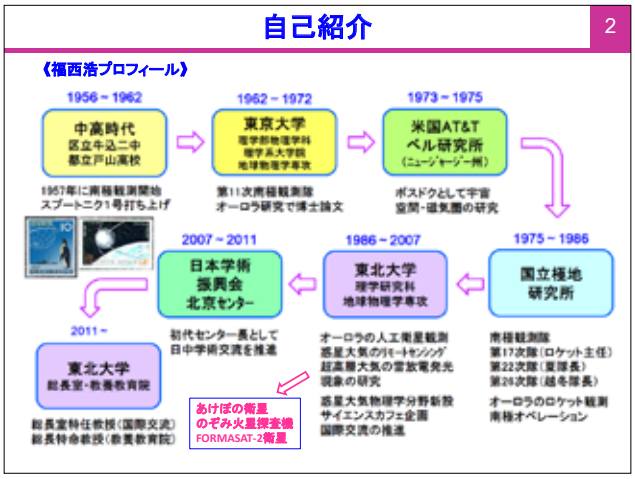
［スライド 15］最後に、私の教養教育での実践例について話します。東北大学は基礎ゼミというものに力を入れています。これは要するに、新入生に対して高校までの学びから大学での学びに転換するための教育プログラムですね。私が担当する基礎ゼミのひとつ「未知への挑戦～南極観測から学ぶ」では、東京の立川市にある、日本の南極観測を担う国立極地研究所にバスツアーで学生たちを連れて行って、そこの施設を見学し、研究者たちと交流し、議論し、まさに最先端の研究はどういうふうに行われているのか、それを知ってもらう機会を提供しています。極地研究所は私が以前働いていた研究所なので、全面的な協力が得られ、学生たちに大きな刺激となっています。

［スライド 16］こちらのスライドは、私が担当するもうひとつの基礎ゼミ「宇宙天気予報に挑戦しよう」の紹介です。茨城県つくば市にあるJAXA 筑波宇宙センターにバスツアーで学生たちを連れて行き、施設を見学し、やはり第一線の研究者と議論をしている様子です。こうした経験から、将来、一流の研究者の中に自分も入っていくんだという、目的意識が生まれてきます。

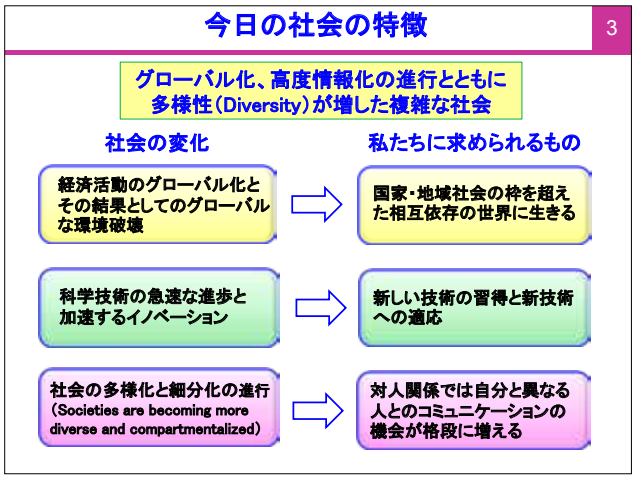
［スライド 17］それから総合科目の実践例ですが、私は中国に最近 4 年間、日本学術振興会北京センター長として滞在したので、その経験に基づいて、総合科目「急成長する中国の科学技術と経済」というタイトルの講義をしています。この授業では中国に関係した企業の第一線で働く外部講師を招へいし、ディスカッション授業などさまざまな工夫をしています。受講学生の感想を読むと、中国を多面的に見て、いろいろな考え方を知り、議論することによって、一人ひとりの学生が急速に視野を広げていく様子が分かります。ですから皆さん方もぜひ教養教育の中で自分自身の視野を広げることにチャレンジしていただきたいと思います。

司会（前）：福西先生、ありがとうございました。繰り返しますけれども、先生への質問・コメント等は忘れないうちに書いておいてください。頭の痛い話もちょっとあったように思います。

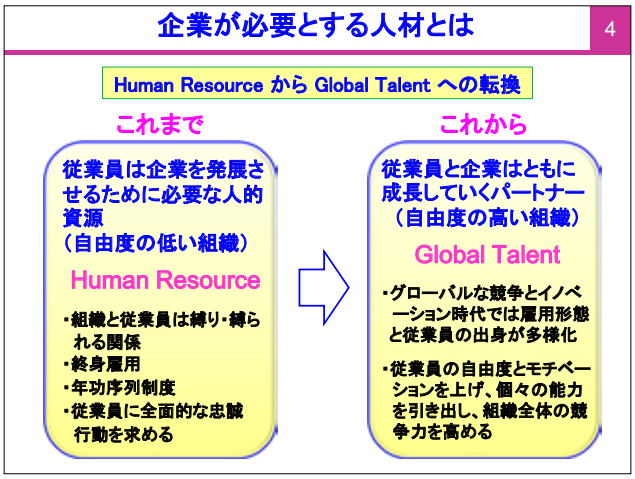
［スライド 1］



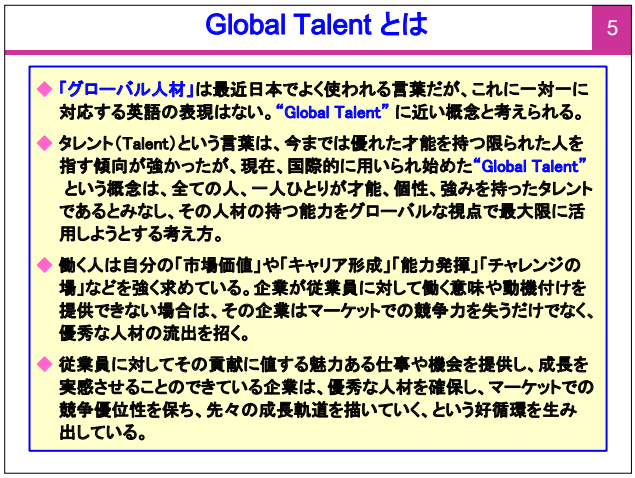
［スライド 2］



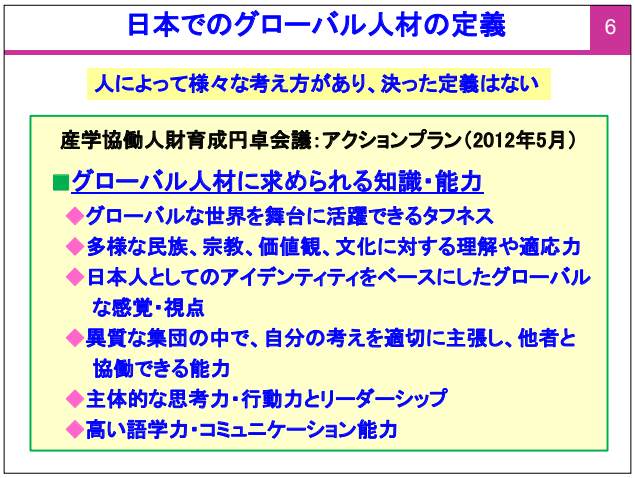
［スライド 3］



［スライド 4］



［スライド 5］



［スライド 6］

グローバル時代に求められる能力とは　7

◆ DeSeCo: The Definition and Selection of Key Competencies
キー・コンピテンシーの定義と選択―2003年にOECD（経済開発協力機構）が最終報告

◆一人ひとりがクオリティ・オブ・ライフを実現し、公平な社会の実現と自然環境と調和した経済・社会の持続可能な発展に貢献するためにはどのような能力 が必要とされるのか？

個人の成功のために
Success for individuals
・雇用と収入
・健康と安全
・政治への参加
・社会的ネットワーク

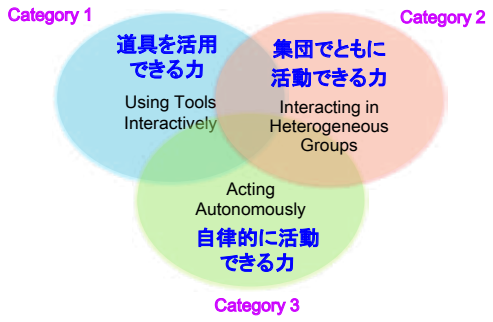
社会の成功のために
Success for society
・経済生産性
・民主的プロセス
・社会の連帯・平等・人権
・生態学的に持続可能な社会

個人と社会のための キー・コンピテンシー

必要な能力
Require:
・個人の能力
・組織の能力
・個人の能力を社会の目標を実現させるために使う力

［スライド 7］

キー・コンピテンシーの3つのカテゴリー（1）　8



［スライド 8］

キー・コンピテンシーの3つのカテゴリー（2）　9

Competency Category 1: Using Tools Interactively
道具を活用できる力
A. Use language, symbols and texts interactively
B. Use knowledge and information interactively
C. Use technology interactively

Competency Category 2: Interacting in Heterogeneous Groups
異質な集団でともに活動できる力
A. Relate well to others
B. Co-operate, work in teams
C. Manage and resolve conflicts

Competency Category 3: Acting Autonomously
自律的に活動できる力
A. Act within the big picture
B. Form and conduct life plans and personal projects
C. Defend and assert rights, interests, limits and needs

［スライド 9］

リベラルアーツの日米比較　10

◆グローバル人材を育成する上で学力は大前提。しかし日本の学生の学習時間はグローバルスタンダードからかけ離れている（日本では約70%は週に5時間以下しか勉強しないが、米国では5時間以下は15%）。

◆ 日本では単位が取りづらいとみると学生は「楽勝科目」へ逃げる。米国では楽勝科目がない。

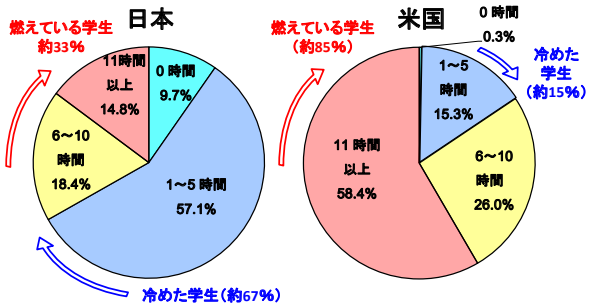
◆ 米国の大学では GPA（Grade Point Average）で評価する。科目ごとに5段階評価し、0～4点を割り振る。卒業 や進級、奨学金などの判定に使われる。またGPAが就職の決め手になる。

◆ 米国では、大学の成績（GPA）がその後の就職や進学（医科や法科大学院、ビジネススクール、研究大学院など）に大きく影響するので、学生はじっくり勉強をしてよい成績を取ることに真剣である。

◆ 大学進学率は米国70%に対して日本は56%。進学率が高いのは社会人学生が多いため。社会人学生の比率は米国22%に対して日本はわずか2%。日本の大学の学生構成は多様性に欠ける。

［スライド 10］

日米大学生の学習時間比較　11



東京大学大学経営政策研究センター（CRUMP）『全国大学生調査』2007年

［スライド 11］

グローバル人材育成のための大学教育　12

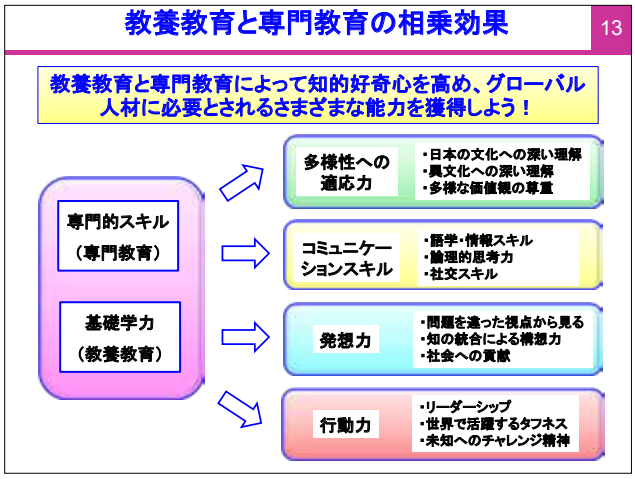
◆ 画一的な教育から多様性をもった教育への転換が必要。そのためにはまず教員の多様性の促進が必要不可欠。

◆ 学生の多様性への適応力を高めるには留学や国際ボランティアの経験が効果的。海外に滞在すれば自らアクションをとっていかないと暮らせないことが分かるし、自ら行動することの楽しさも知ることができる。

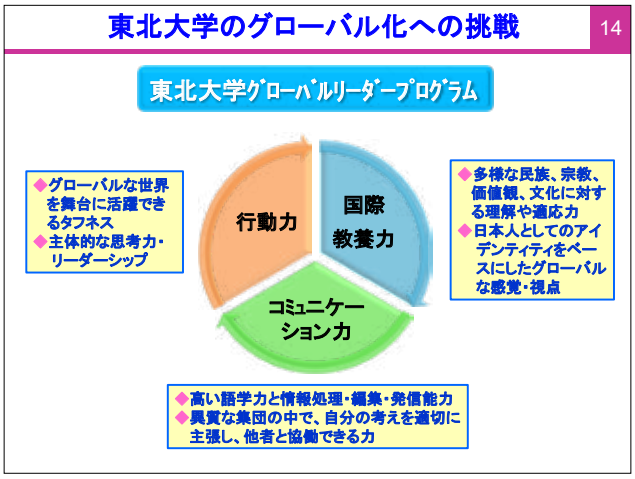
◆ すでに存在する課題を解くのではなく、課題そのものを見つけるところから始める教育がイノベーションには欠かせない。課題解決型学習（PBL: Project-Based Learning）や問題解決型学習（Problem-Based Learning）が教養教育でも重要。

◆ 教養教育で主体的に考え、自ら実践する学生を育てるには少人数のディスカッション授業が効果的。

［スライド 12］



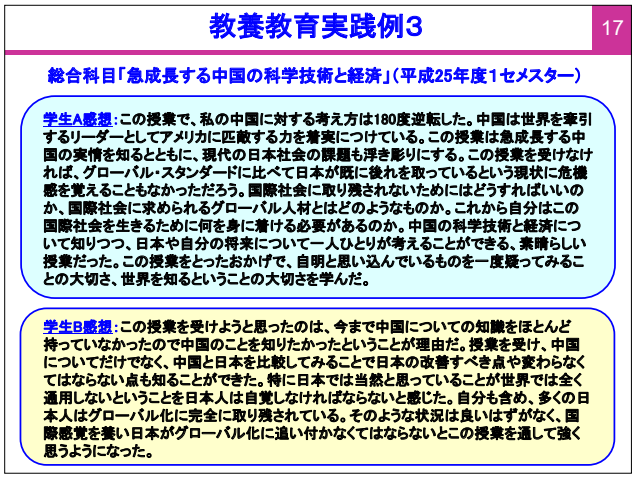
［スライド 13］



［スライド 14］

［スライド 15］

［スライド 16］



［スライド 17］

司会（前）：それでは続きまして、野家先生のほうに、少し視点を変えてお話をいただきます。

講義
「教養と就活の関係と無関係」

野家 啓一

野家：皆さんこんにちは。最後になりましたが、教養教育院の野家です［スライド1］。今までお2人の先生から、かなり中身の詰まった重要なお話をお聞きになったので、少し皆さん疲れておられるかも知れません。私のタイトルは「教養と就活の関係と無関係」という、ちょっと人を食ったようなタイトルで申し訳ないのですが、今回の総合テーマが「教養とは何か―就活に役立つ？」というタイトルですので、私の専門である哲学の観点から両者の関係についてお話をしてみたいと思います。［スライド2］内容はこのような順序で15分ばかり時間をいただいてお話をします。

［スライド3］最初に、教養とはどんなものかについてはこれから順次お話していきますが、それが就職活動、就活と特に直接に関係あるわけではありません。しかしかといって、全く無関係とも言い切れないところがあります。ですから、視点を変えることによって関係あるとも言えるし、関係ないとも言えるということです。スライドの左側に、Duck-Rabbit アヒル - ウサギと言われている、心理学でよく反転図形として例に出されるものがあります。これを耳と見るとウサギですが、嘴と見るとアヒルに見えます。ですから、視点を変えるということが、何につけても大切です。教養と就活の関係を議論する場合にも、少し視点を変えてみることが重要になります。教養というのは、今まで猪股先生、福西先生のお話にもありましたように、つまるところは人間としての総合力ということになりますが、最近は「力」という言葉を使って「人間力」ということが言われています。私はあまり良い言葉だとは思いませんが、これからお話しするように教養という概念は、人間形成という概念と表裏一体というか、非常に密接な関係を持っていますので、そういう観点から見れば、就活に必要なのもこの人間力ということになります。

［スライド4］就活に対して採用者側の採用活動のことを「採活」と言うらしいですけれども、私は東北大学で採活にも何年かのあいだ携わっていました。ひとつは2005年から附属図書館の館長をしておりましたので、図書館の職員の採用に数年間携わっていました。それから2008年からは花輪先生と同様に理事の職にありましたので、東北大学の職員の採用に関わりました。東北大学職員にも東北大学の卒業生がたくさん応募してこられます。その小論文の試験と、それに基づいた最終面接、それぞれに一次面接、二次面接をクリアしてこられた優秀な方ばかりなんですが、最終面接に携わった経験があります。そこで感じたことは、結局のところ付け焼刃のような、つまり就活マニュアル本というのが色々出ていますけれども、一夜漬けで身に付けた知識は、最終面接のようなところでは役に立ちません。つまり型通りの、就活マニュアル本には、面接室に入る時のノックは2回がいいか3回がいいかとか、そういうことが書かれているようですけれども、そういう知識はほとんど役に立たないということです。

それで何が大事かというと、これは「テストの花道」というテレビ番組で出てきた言葉をそのまま使いますと、「スッキリ」と「ドッシリ」。つまり、面接での受け答えはスッキリと簡潔に要点を述べる。これは小論文の書き方でも同じですけれども、あまりくどくど長々と自分の体験とかをしゃべる方はアウトということになります。簡潔に自分の言いたいことを明確に述べるということが大切で

すし、また落ち着きがなくソワソワされたりすると、こちらも不安になってくるので、やはりドッシリとして落ち着いた態度で受け答えをする、安心感と信頼を与える立ち居振る舞いですね。その2つが大事だろうと思います。そしてこういうことを身に付けるのは、単なる付け焼刃の知識では役に立たないので、まさにそういうものこそ教養と呼ばれるべきもの、先ほど「人間力」と言いましたが、それだと私は思っています。

［スライド5］それでは教養とは何だろうかということになりますが、これは千差万別、様々な考え方があります。ただ、「教養」という言葉が日本語として定着し始めたのは明治時代以降で、元々教養は教育とほとんど同じ意味に使われていましたが、次第に大正時代になると、いま言ったような人間力みたいな概念として使われるようになります。元をたどれば、ドイツ語にBildungという言葉がありますが、これの訳語として定着しているというのが現在のところだと思います。ドイツ語でBildungというのは形成するという意味ですから、とりわけ人間形成あるいは人格の陶冶という、ちょっと難しい言葉ですが、そういう意味で使われることが多い概念です。つまりは「内面的価値の形成を伴った精神的成長」と、これもまた少し難しいんですが、要約できます。文学にBildundsroman教養小説という概念があります。例えばロマン・ロランの『ジャン・クリストフ』とか、ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』とかそういった作品がBildundsroman教養小説と呼ばれますが、これは要するに主人公の精神的な成長を描いた小説という意味です。

この教養という概念に少し難しい哲学的な意味を与えたのがドイツの哲学者ヘーゲルで、ここに似顔絵が出ていますね。［スライド6］ヘーゲルが考えた教養というのは、近代の市民社会、フランス革命以降のヨーロッパ社会を生きる自立的な個人の自己形成という意味でして、彼は教養について『精神現象学』の中でこんなことを述べています。これも少しややこしい定義なんですが。「日常の衣食住の生活をぬけ出して」というのは、単なる生物ないし動物としての生活を一歩抜け出して、「教養へと一歩を踏み出すには、一般的な原則と視点に立つ知識」、つまり幅広い視点に立った知識「を獲得し、事柄一般を思考できるまでに訓練を重ね」、ということは単に自分だけではなく社会のこと、人類のことを、そういう広い視点に立って思考ができる、ということです。それから「根拠をあげて事柄の是非を判定し、具体的でゆたかな対象を明晰に捉え」というんですから、論理的で説得力のある議論がきちんとできるということですね。そういったことを「きちんと言葉にし、真剣に判断をくだせるのでなければならない」わけですから、コミュニケーション能力を身に付ける、ということでしょう。色々と難しいことは言っていますが、基本的に社会人として生きていくための、先程、「社会人基礎力」という言葉が猪股先生のお話の中に出てきましたが、そういったものと考えていただければいいだろうと思います。

［スライド7］そのヘーゲルが『精神現象学』でそういったことを述べてからほぼ半世紀後に、日本は明治維新を経験して、近代社会に一歩を踏み入れたわけです。これは福沢諭吉の写真ですが、彼がまだちょんまげを結っていた頃ですね。一万円札にはもっと後の顔が印刷されていますけれども、有名な『学問のすすめ』を書いた人です。『学問のすすめ』にちょっとでも目を通したことのある人はいますか。ああ、何人かいますね、感心です。実はあの『学問のすすめ』というのは、今読んでも非常に我々に刺激を与える、あるいは「教養の

すすめ」と言ってもいいようなところがあります。彼はその中の、第12編において、「観察と推論」Observation と Reasoning という英語を使ってその重要性を指摘し、「なおこの外に書を読まざるべからず、書を著さざるべからず」先程、最初に花輪先生から『読書の年輪』の話がありましたね。それから「人と談話せざるべからず、人に向かって言を述べざるべからず、この諸件の術を用い尽くして始めて学問を勉強する人と言うべし。」読み書きは勿論のこと、人と談話し議論をする、つまりはコミュニケーション能力ですね。そういったものを身に付けて初めて学問をしたと、あるいは教養が身に付いたと言えるのだというふうに言っています。

［スライド8］さらに時代を下って大正時代、これは阿部次郎という哲学者なんですが、阿部次郎という名前を皆さん、聞いたことある人いますか。ああ、いますね。そこの萩ホールの脇に、弓道部の練習所の脇を通って「三太郎の小径」という遊歩道があるんですが、歩いてみたことある人いますか。これも何人かいますね。昨日僕は予行演習を兼ねて歩いてみたんですが、10分か15分ぐらいで萩ホールの裏のほうに出ます。大変きちっと整備されて歩きやすい道なので、格好のデートコースになると思います。ぜひ川内にいる間に一度歩いてみてほしいんですが、「三太郎」というのは誰だろうと思った方もあるかもしれません。阿部次郎の最も有名な著作に『三太郎の日記』という本があります。まだ絶版にはなっていないというか、新版が出ていると思うんですが、多分先程紹介があった『読書の年輪』の中には入っていないでしょうね。僕らの学生時代には必読書リストや推薦図書があると、『三太郎の日記』は必ず入っていたんですが、最近は残念ながら読む方もいなくなっているかもしれません。その中で教養について論じた部分があります。「我等は我等の教養を釈迦に、基督に、ダンテに、ゲーテに、ルソーに、カントに求むることに就いて何の躊躇を感ずる義務をも持っていない」。ややこしい言い方ですが、要するに教養の基本というのは、釈迦は東洋だから除くと基督、ダンテ、ゲーテ、ルソー、カント、そういったものに教養の基盤があるというわけです。だから皆さんもそういったものを読んで教養を身につけよと阿部次郎は言っているんですが、これは「大正教養主義」と普通言われるような考え方を、非常に端的に表しています。つまりヨーロッパ文化、特にヨーロッパの芸術や哲学に対する憧れというものが基盤にあって、それを身に付けることが教養だというような風潮が、特に旧制高校を中心に戦前の日本では広まっていました。ただ現在では、皆さんにこういうものを読めといっても、すぐに実行できるわけではありませんし、この他にも皆さんには色々とやるべきことがあるでしょうから、そのままこういう教養概念が通用するとは思われません。

［スライド9］現在必要なのは、そういった意味では大正教養主義的な教養概念に代わるような、教養概念の再定義であろうと思います。これは阿部謹也さんという歴史学者、一橋大学学長を務められた先生ですが、その阿部先生が岩波新書の『学問と「世間」』という本の中で、「教養とは自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のために何ができるかを知っている状態、あるいはそれを知ろうと努力している状態である」というふうに述べています。つまりは、教養というのは社会の中での自分の位置を知る、一種の自己認識の能力だということでしょうか。自己認識のためには、もちろん他者と交わり、コミュニケーションを行う必要があるわけですが、［スライド10］的確な自己認識というのはなかなか出来るようで

できません。自分のことは自分が一番よく知っていると思うのですが、なかなか自分で自分の欠点や、長所をきちんと把握するというのは難しい。

これは、エルンスト・マッハという物理学者で哲学者であった人が描いた自画像です。彼の言葉によれば「たとえば私が安楽椅子に横たわって右の眼を閉じると、左の眼に、図のような映像が映る。眉毛」これが眉毛です。「鼻」これが鼻ですね。「及び口髭」ここに口髭があります。「からなる枠の内に、見える限りでの私の身体の一部とその周囲が現れる。」つまり、自分の目で見える範囲の自画像を描こうとすると、こうなるということです。要するに、何が見えていないかというと、自分の顔。自分の顔というのは一番自己認識で重要なことなんですが、自分で見える範囲で自画像を描こうとすると、自分の顔が一部しか見えない。特に日本人は平面的な顔で鼻が低いですから鼻は多分、髭も見えないんじゃないかと思いますが、結局自画像を描く時は、普通は鏡に映して自分の顔を見るわけですね。鏡に自分の顔を映すということは、他人の眼差しで自分を眺めるということです。ですから、自己認識というのは、基本的に自分の内面を眺めるだけで足りるわけではなくて、常に他者の眼差しで自分を見つめ直すということが自己認識に必要なことです。

それは、教養ということについても、まさに同じことだと僕は考えているんですが、［スライド11］これは前に、さっきの阿部謹也先生の教養の定義を少しアレンジして、僕なりにリベラルアーツ、教養について書いたものです。『学術の動向』という、日本学術会議が出している雑誌です。その中で、「教養とは、歴史と社会の中で自分の現在位置を示す地図を描くことができ、それに基づいて人類社会のために何ができるか、何をなすべきかを知っている状態である」というふうな定義をしたことがあります。これは、先程福西先生言われたように、グローバルな視点、皆さんはこれからグローバルな企業や、グローバルな組織や、そういったところで活躍をすることが期待されているわけですから、やはり人類社会のために何ができるのか、何をなすべきかということを常に念頭に置いて、そこに自分がどれだけ近づいているのかということをきちんと把握する、そういう自己認識が必要であると思います。そのためにはやはり、今は大正教養主義的な人文的な教養だけでは足りずに、科学技術時代の教養というものが、つまり人文知と並んで、科学知をきちんと身に付けておく必要があるだろうと思います。ですから、今日お集まりになっている方は、理系と文系は半々ぐらいでしょうか。理系の方はむしろ人文知、あるいは僕は社会文化リテラシーと呼んでいますが、自分の科学研究というものが社会の中でどういう位置を占め、どういう影響を社会に及ぼすのかということについて、自覚的であらねばなりません。それから文系の方は、例えば原発反対を唱えるにしても、放射能の半減期について知らないでは話になりませんし、また遺伝子組み換え食品の安全性を議論するにも、分子生物学の初歩ぐらいは知っていなければなりません。そういう意味では、科学技術リテラシーを文系の方もきちんと身に付けておく必要があります。

［スライド12］というところで、最後にまとめをしますと、就活に必要な教養というのは先程猪股先生のお話にあったような基礎的・汎用的な能力、それに加えて人間力とか人間としての総合力ということになるでしょう。最初に言ったことですが、そのために特別な訓練や、あるいは資格というものは必要ではないと私は思っています。むしろ今、皆さんが始められた大学生活を4年間充実して送る。その中で、授業やゼミ、あるいはサー

クル活動や国際ボランティア活動も含めて、そういう活動を基盤にして、先程福西先生が自分の好奇心を大切にして、それを発展させていくということを言われましたけれども、まさに自分の好奇心に基づいて、そういう授業やサークル活動を基盤にした人間関係やネットワークを、グローバルな形で、積極的に発展させていくということが、最終的には人間力の形成、教養というものにつながっていくだろうと思っています。そういう意味では就活にしろ、教養にせよ、それを身に付けるには短絡的な道というか､安易な道はありません。そういう意味で「王道」は存在しません。ですから大学の 4 年間を、きちんと授業やゼミで身に付けたことを基盤にして、それを更に自分なりの関心に即して発展させていくことが、重要であろうと私は考えています。ご参考になれば幸いです。ありがとうございました。

司会（前）：野家先生、ありがとうございました。私が下手に、中間的なまとめをするのはかえって内容を崩してしまうと思います。それでは、ここで 13 分ほどの休憩を取ります。先程から申し上げておりますように、この間にそれぞれの先生に対するコメント、あるいは質問等を書いていただけたらと思います。

1

教養と就活の関係と無関係

野家啓一（教養教育院）

合同講義2013　2013/10/22

［スライド 1］

内容目次

* はじめに
* 1.「採活」の経験から
* 2. 教養とは何だろうか？
* 3. 教養の再定義
* おわりに

合同講義2013　2　2013/10/22

［スライド 2］

はじめに

- 教養が直接に就活に役立つわけではない。
- かといって、全く無関係とも言い切れない。
- 教養とは、つまるところ人間としての総合力
  → 人間力
- 就活においても、試されるのは人間力

2013/10/22　合同講義2013　3

［スライド 3］

1.「採活」の経験から

- 採用活動（採活）
  2005.4～2012.3：図書館職員
  2008.4～2012.3：東北大学職員
  → 小論文と最終面接
- 付け焼刃（型通りの応答）は役に立たない
- 「スッキリ」と「ドッシリ」
  → スッキリと簡潔に要点を述べる受け答え
  → ドッシリと落ち着いた立ち居振る舞い
  → 「知識」ではなく「教養」

2013/10/22　合同講義2013　4

［スライド 4］

2-1. 教養とは何だろうか？

- 教養（Bildung）
  →人間形成、人格陶冶
  →内面的価値の形成を伴う精神的成長
- Bildundsroman
  → 教養小説
- ヘーゲル（1770~1831）
  →近代市民社会を生きる自立的個人の自己形成

2013/10/22　合同講義2013　5

［スライド 5］

2-2. ヘーゲルの教養概念

- 「日常の衣食住の生活をぬけだして教養へと一歩を踏み出すには、一般的な原則と視点に立つ知識を獲得し、事柄一般を思考できるまでに訓練を重ね、根拠をあげて事柄の是非を判定し、具体的でゆたかな対象を明晰にとらえ、きちんと言葉にし、真剣に判断をくだせるのでなければならない。」
- ヘーゲル『精神現象学』1806（長谷川宏訳）

2013/10/22　合同講義2013　6

［スライド 6］

2-3. 福沢諭吉の学問論

- 『学問のすすめ』1872

「この二箇条（観察と推論）の他に書を読まざるべからず、書を著さざるべからず、人と談話せざるべからず、人に向かって言を述べざるべからず、この諸件の術を用い尽くして始めて学問を勉強する人と言うべし。」

2013/10/22　合同講義2013　7

［スライド 7］

2-3. 阿部次郎の教養概念

- 『三太郎の日記』1914
  →三太郎の小道（川内）
- 「我等は我等の教養を釈迦に（中略）基督に、ダンテに、ゲーテに、ルソーに、カントに求むることに就いて何の躊躇を感ずる義務をも持っていない。」
- 大正教養主義

2013/10/22　合同講義2013　8

［スライド 8］

3-1.教養の再定義 ①

阿部謹也1935 ~2006
『学問と「世間」』岩波新書

- 「教養とは自分が社会の中でどのような位置にあり、社会のために何ができるかを知っている状態、あるいはそれを知ろうと努力している状態である。」

→ 教養＝社会の中での自己認識

2013/10/22　合同講義2013　9

［スライド 9］

3-2.自己認識と他者の眼差し

- エルンスト・マッハ
- 『感覚の分析』1886

「たとえば私が安楽椅子に横たわって右の眼を閉じると、左の眼に、図のような映像が映る。眉毛、鼻、及び口髭からなる枠の内に、見える限りでの私の身体の一部とその周囲が現れる。」

→自分の顔は見えない：鏡
→他者の眼で自分を見る

2013/10/22　合同講義2013　10

［スライド 10］

3-3. 教養の再定義 ②

- 「教養とは、歴史と社会の中で自分の現在位置を示す地図を描くことができ、それに基づいて人類社会のために何ができるか、何をなすべきかを知っている状態である。」
  （野家啓一『学術の動向』2008/5）
- 科学技術時代における教養：人文知/科学知
  → 理系の社会文化リテラシー
  → 文系の科学技術リテラシー

2013/10/22　合同講義2013　11

［スライド 11］

おわりに

- 就活に必要な教養
  → 基礎的・汎用的能力（猪股）
  → 特別な訓練や資格は必要ない
- 充実した四年間の大学生活を送り、授業やゼミ、サークル活動やボランティア活動を基盤に、自分の好奇心に基づいて人間関係やネットワークを積極的に発展させていくことが重要 → 人間力の形成＝教養
- 就活にも教養にも「王道」はない

2013/10/22　合同講義2013　12

［スライド 12］

司会（前）：それでは先生方、壇上のほうに移動願います。本日は大タイトルが「教養はなぜ必要か―就活に役立つ？」でした。皆さんそれぞれ色々なことを考えたと思います。これから先生方に、この中から、とても全部は無理なので、いくつかを選んでお答えしていただきます。また、それに対して意見があったり、新たな質問があったりする時は、手を挙げていただきたい。そして、今日は何遍も言うようにクロストーク、双方向の講義に皆さんと作っていきたいと思います。これは私達だけでは出来ない。それではひとつふたつ、先生方から質問の紹介と、回答をいただけたらと思います。準備できましたでしょうか。

討論「教養はなぜ必要か ―就活に役立つ？」

野家：これは僕じゃなくて、海老澤先生にお答えいただいたほうがいいと思うんですが。

> **今回の合同講義のタイトルに“就活”を入れたのはなぜか。たんに「教養はなぜ必要か」でも良かったし、就活の代わりに“人生”や“恋愛”でも良かったと思う。ただただ、学生の興味を引きそうだったから、では悲しいです。**

という、総合タイトルに対しての質問なんですが、これは、一番中心的に企画を進められた海老澤先生からちょっとお答えいただいたほうがいいかと思います。

海老澤：野家先生から指名されてしまったのですけれども、私が就活というタイトルを入れたほうがいいと言ったのではないので、それは誤解しないでください。皆さんが、今の１年生がどういうことに一番興味を持っているだろうと、いくつか思ったうちの１つなので。ですが、それに限ってしまってはいけないのではないだろうかということで、クエスチョンが付いているんです。全て物事にはきっかけというのが大事なのですが、これも１つのきっかけになるんじゃないだろうかという考えを、私は持っています。他の先生方は違うかもしれません。特に就活ということを強く推された先生に、おっしゃっていただきたいと思いますが。

工藤：私がタイトルに就活を入れたらと提案しました。どうしてか。皆さんは入学したばかりなので、まだ就活の意識はあまり無いかも知れませんね。ただ、２年、３年と学年が進むにつれ、多くの学生の意識や行動は就活に的が絞られるようになり、しかもその傾向は益々強まっているように見受けられます。こうした中、私たちがやっているような教養教育はあまり役にたたないのではないか、人間力を養うにはむしろサークル活動をやった方がいいのではないかなど、これまでの教養あるいは教養教育に対していろいろな疑問が投げかけられるようになりました。ですから、あえて「教養と就活」というテーマの講義を通して、皆さんの意見や考えを聞いてみたらどうかと思ったわけです。今日の先生方の話を聞いて、教養、教養教育について、役にたつ、役にたたない、就活とは関係がない等々いろいろなことを感じたと思います。その辺のところを、これから皆さんと先生方とで討論してみたらいかがでしょうか。それにしても、一瞬不意を衝かれました。いい質問です。

司会（前）：用意のできた先生からどうぞ。福西先生。

福西：いろいろと質問があったんですけれども、１つは

> **日米の勉強時間の差**

ですね。それに対してたくさんの質問がありました。それからもう１つ、

グローバル人材を必要としているのは大企業であって中小企業ではない。あまりいろいろなところで必要としないのではないか？

という質問もありました。まず日米の勉強時間の差について。私はアメリカのスタンフォード大学とか、カリフォルニア大学バークレー校とか、そういうところの研究者と一緒に仕事をして、事情は分かったんですが。例えばスタンフォード大学だと、まずできる学生は大企業には就職しないんですね。皆すぐ自分で会社を興して、給料があっという間に大学の教授よりも高くなる。基本的に独立志向がものすごく高いんです。そこで「大学卒業後すぐに独立するには大学で何をやらなければならないか」という、そういう思考が非常に強い。そのために着々と大学在学中に準備する。すごくアクティブなんですね。コミュニケーション能力に関して、

英語は必要ですか

という質問がありましたが、これはもちろん必要です。英語は国際的なコミュニケーションの一番基本ですから。ただ、英語は単に会話ができるということではなくて、英語でものを考えられるかどうかというレベルでないと、なかなか英語圏の人とは通じないですね。つまり、日本語を英語に訳すという発想ではなくて、英語で物事を考えていくという、そういう段階にならないと、本当の意味ではコミュニケーションにはならないんです。ぜひ英語はそういうレベルになるように努力していただきたいです。ただ英語の問題以外に、「学生が在学中に何をしなければならないか」という問題で、日米で目的意識にかなりの差がある。それはどうしてかというと、アメリカの場合は、高校まではあまり勉強していないんですね。だから大学に入った時に数学は全然できないとか、そういう学生がいっぱいいるんです。でも４年経つとものすごくできるようになっている。つまり、大学はあくまでも自分の能力を身に付ける場だと考えている。社会人学生がアメリカでは非常に多いんですが、企業で働いて、ある能力が不足したら大学に行ってその能力を獲得する。アメリカだけではなくてヨーロッパもそういう傾向は非常に強いです。やはり日本の大学は世界的に見るとかなり特殊な状況です。

今、大学でグローバル人材の育成が叫ばれるようになったのは、その特殊な状況ではどうも世界に太刀打ちできないということが分かってきた。企業はより違った方向の学生を必要としてきている訳です。グローバル人材を必要としているのは別に大企業だけでなく、日本のあらゆるところです。特に私が考えるのは、グローバル人材育成が日本で一番遅れているのは公務員ですね。公務員が全然グローバル化していない。その結果、自分の周りのことからしか発想できない。グローバルに考えたら、今のやり方ではなく別のやり方をした方がいい結果になるのではないかという、そういう発想がないですね。私は、グローバル人材は全ての領域で今は必要だと思います。つまり、従来日本人が持っていなかった発想を、どういうふうにしたら持つことができるかという問題ですね。それは努力すれば必ず持てるようになると思います。ぜひ、そういう新しい発想に挑戦していただきたい。

日本の大学は良いところもたくさんありますが、やはり学生の学習時間が少ないのは、日本の大学の最大の欠点で、クラブ活動をやったから学習時間が少なくなるというのは、これは理由にならないと思います。私は学部の時に、クラブ活動でオーケストラに入り、練習を毎日やっていましたし、また運動もやっていました。自分の経験か

ら、クラブ活動と学業を両方同時にやることは全然問題ないと考えます。目的意識さえあれば、必ずできます。ぜひそういうふうにチャレンジしていただきたいと思います。

司会（前）：関連して何か、意見あるいはコメント・質問がある人、手を挙げてください。はい、どうぞ。学部と名前を。

学生A：文学部1年のAと申します。合衆国のトップクラスの学生が、就職じゃなくて起業を、自分の会社を立ち上げる志向が強いのに対して、日本ではそういうのは少ないと。それは、景気の問題だけではないと思うんですけれども、そこら辺の環境の違いを教えていただければと思うのですが。

福西：やはり日本の職業環境は何十年に渡って固定化されており、その習慣に慣れきってしまっているので、新しいやり方に切り替えるのが非常に大変ですね。いろいろなことに挑戦する勇気がなかなか出てこないと思います。ただ世の中は変わりつつあり、新しい方向にチャレンジする人はどんどん出つつあります。東北大からもそういう人がかなり出てきていると感じています。それで私自身はあまり心配していないですね。世の中の変化とともに、チャレンジする人は必ず出てくると思っています。

司会（前）：じゃあ、森田先生のほうから。

森田：今の答えですが、私は、日本人の働くことに関する価値観に関係していると思います。つまり、私たちは大学に入る時には偏差値で大学を選んでますよね。同じ意味で、就活の時にも偏差値で就職する企業を選んでいるような気がします。そうすると、大企業に入るのが一番成功ということになりますね。しかし冷静に考えてみると、何が楽しくて、何が一番お金が儲かるかという観点からいうと、新しい企業を立ち上げて大成功すれば、楽しくて、一番お金が入るわけです。その辺の違いがあるから、要するに日本では今までの習慣で、いい大きな企業に入って働くのが一番いいことだと思っている。そういった常識があるから、そういうふうになっていると私は思います。

司会（前）：はい、どうですか。よろしいですか。ではどうぞ、後ろの方。

学生B：工学部のBです。英語がグローバルな言語だから、その英語で思考をすると言われました。思考の内容というのが、その思考に使う言語によって左右されるという気がするんです。英語は、どの文に対しても主語をはっきり、自分を強調する。日本語は、自分という主語を省略する。そこで、控えめな感じを出している。皆が皆、英語で考えていたら、逆にグローバルじゃないというか、みんなアメリカンな発想をするというのは、グローバルじゃないという気がするんですね。日本語で考えて、日本人っぽい発想をして…それを素早く伝えられなくては意味がないとは思いますけれども、そういうのが何かグローバルな感じがすると。日本という個性を世界に発信するという意味で、グローバルなのではないかと思いました。どうでしょう。

福西：今の意見は、私もそうだと思っています。つまり、グローバルというのはアメリカの真似をしろとか、そういうことではなくて、要するに日本人は日本人の発想法で考えて、世界に無いものを世界に提供するというのがグローバルだと思うんですね。だけど英語というのはその際のコミュニケーションツールなので、日本語で言っても相手に通じなかったら伝わらない訳ですね。そこで英語で正しく伝えるためには、英語というものをどうしてもマスターしなくてはならない。ただその時に、日本語を英語に訳すというやり方で英語を使おうとすると、相手になかなか通じないですね。英語での発想というものを学んでいかない

と、本当の意味でのコミュニケーションにはならない。自分の考え方は持っているがコミュニケーションをどうやってやるかということを考えた時、やはり英語のレベルがそこまで行かないと、本当のコミュニケーションにはならないと思います。福地先生は英語の専門家でいらっしゃるので補足をお願いします。

福地：英語の教師をしていますから、参考になるかどうか分かりませんけれども。今、福西先生がおっしゃったように、何も英語でなくてはいけないというものではなくて、今のこの世の中で英語が、いわば共通のコミュニケーションツールになってしまっているんですね。これがロシア語でもスペイン語でも何でもいいんですけれども、どの言葉でもいいんですけれども、今のこの世の中の現実からすると、どうしても英語でコミュニケーションをしなければならない場合は多いということだと思います。

司会（前）：ありがとうございました。まだあるかもしれませんけれども、他にもいっぱい来ておりますので、次の質問のほうにちょっと移らせていただきます。

猪股：グローバルなお話をしているところですが、具体的なところの質問からお答えしていきたいと思います。まず最後にお見せしたスライドで、教養と専門の学び方の図がありましたけれども、

入学してすぐに教養だけをやってその後専門をする学び方と、それから教養と専門を並行するのと、どちらが望ましいのか

という質問ですが、最初に教養を勉強して、その後専門を学ぶというのが廃止されてどれくらい経ちますかね。相当になりますが、20年ぐらいなりますかね。教養部という仕組みがあった頃の学び方です。ご紹介した調査は、教養部があった時代の最後の3年と、それから教養部が廃止されて、新たな教養教育の仕組みができた時期の最初の3年間の卒業生ということになります。どういう学び方をしても、やはり教養の上に専門を乗っけるというような学び方は、あまり賛同者が多くなかったです。ちょっと特徴的なのは医学部と歯学部の出身者は、教養の上に専門を乗せるというタイプを支持する方が結構多かったんですね。それは専門領域によっての特徴だと思いますけれども、基本的には専門と教養、それぞれ補い合いながら並行して進めていくのが望ましいのではないかというように考えています。それから働き方に関するところで3つほど質問がありました。ひとつは、

新規学卒者一括採用方式によって就職した人々は、その後いきいきと、モチベーションを保って働いていけるのだろうかと思った

ということですけれども、日本の企業は、長期雇用を前提とした、モチベーションを萎えさせない仕組みというものを結構巧妙に作っているといわれています。例えばそれは、最初は全員一緒に昇進するんだけれども、その後ちょっと早く昇進する人と、遅く昇進する人に分かれて、1回また同じ踊り場に立つんだけれども、その後はトーナメントになって昇進する人はするし、しない人はその場で留まる、というような形での人事管理です。定年までその組織で勤め続ける。その前提に立つと早い時期にやる気をなくされちゃうと困るわけですよね。なので、それを維持するための仕組みというものを持っているというように思っています。それから、

企業は「即戦力」を重視しているというふうに聞いていたけれども、企業内教育にもっと力を入れたらいいんじゃないか

という意見ですね。これは日本の企業は、今言ったように仕事の経験がない人を採用して、定年までずっと雇用するわけですね。そのプロセスで、企業内で育てるという要素が強くて、教育にだい

ぶお金を使ってきました。ところが、コストを削減しなくてはいけないという厳しい状況の中で、そういったコストをできるだけ削減するために、企業内教育というものが少しずつ減ってきたということになります。中途採用という入り口は、実際に仕事を経験してきた人を即戦力として採るという入り口として機能しているわけですが、今のところまだ、それほどその口は大きくないということですね。それから

〈三種の神器〉のところの話で、アメリカ等の雇用慣行はどうなっているのか

ということですけれども、日本的雇用慣行ということで、他の国とはだいぶ違うということになります。よく引き合いに出される欧米などでの代表的な例としては、プロジェクトで人を採用するというやり方ですね。組織があるプロジェクトを進めると決断したときにそのプロジェクトを担える人を探して採用する。プロジェクトが終わったら、あるいは継続するに値する成果を上げていなかったときにはそのチームは解散するという形で、元々時限が付いていて、そして実際にそこでの役割を担える経験を持っている人だけを採るというようなやり方をする、という雇用の仕方があります。職務とか、役割によって賃金とかが変わっていくという仕組みは、そういうものにも近づいてくるところは出てくるだろうというように思います。

司会（前）：いくつかについてお答えいただきましたけれども。関連、そしてあるいは更なる質問。どなたか。よろしいですか、質問された方。それでは、またあったら後程ということで、野家先生のほうに。

野家：さっき採用活動、採活の話をしたんでそこに皆さん興味を持って質問をいただきました。ひとつは

採用する立場から見ると、具体的にどんな人物（どんな能力を持っている）を採用したいと思ったか

それから

採用活動の経験をお持ちとのことでしたが、面接等の場面でどのようなところから“型通りの応答”だと感じるのでしょうか

あるいは、

採用活動時には、個人的にどのような人を採用したいと思うのか？「ドッシリとした立ち居振る舞い」とおっしゃっていたが、教養がどのようにそれに関わっていくのか詳しく聞きたい

というふうな質問でした。まず、どのような人を採用したいと思うかということは、端的にいうと、要するに「一緒に信頼して仕事をしたいと思うような人」ですね。図書館の職員にせよ、東北大学の事務職員にせよ、この人となら一緒に信頼し合って仕事をしていけるなと思えるような人を採りたいというふうに、僕は考えて面接に臨んできました。それから、ドッシリとした立ち居振る舞いというのと教養がどう関係するのかということですが、要するに面接試験なんかでこちらがちょっと想定外の質問をすると、どぎまぎして答えられないとか、マニュアル本にないような質問に慌ててしまうとか、そういうことではなくて、臨機応変に、いわば想定外の質問が来ても、自分なりの考えを持って答えられる人ということでしょうか。そういう人をさっき「ドッシリとした立ち居振る舞い」と言ったのであり、個別の専門知識というのは、皆さん大学を卒業しているから、あるいは大学院を修了しているから身に付いていると思うんですが、一般社会での経験はまだないわけですね。そういう時に面接官から、例えば上司から叱られて自分の立場が見えなくなった時に

どうしたらいいかとか、あるいは同僚とのトラブルがあって仕事がうまくいかない時にどういう対応をしたらいいかとか、そういう質問をされると、まだ自分が経験したことがないものだから、どぎまぎしてしどろもどろになってしまうという人が多かったんですが、やっぱりそういう想定外の質問、あるいはまだ自分が経験していない質問にも、想像力を働かせて自分ならこうするということをはっきり言えるような人というのが、僕としては好ましいと思っていました。

それから「型通りの応答」。どういうものに型通りの応答だと感じるかという質問ですが、東北大学の職員採用試験の時には大抵の人は、教員と学生のパイプ役というか、間を取り持つような役割を果たしたいということを誰でも答えるんですね。我々が聞きたいのは、そのパイプ役、間を取り持つ際に自分がどういうふうな役割を果たせるのか、具体的にどういう方策でその間を取り持とうとしているのか、その人独自のアイディアを聞きたいわけです。だから一般的なことは答えられるけれども、ちょっと具体的に突っ込まれると答えられなくなるということでは困る。そういうのはやはりパイプ役という、型通りの答えはできるんだけれども、もう一歩踏み込んで具体的にそれではどういうことをして、そのパイプ役の役割を果たそうとしているのかと質問すると、分からなくなってしまうということではちょっと困る。そういう人は一緒に仕事をする上で、少々敬遠したいと僕は感じました。そんなところですがよろしいでしょうか。

司会（前）：それぞれひとつふたつ、選んでいただいて答えていただきました。また後で、質問あるいはコメントにお答え願うということにします。時間が限られていますので、特にぜひこれは聞いてほしい、聞いてみたい、聞きたいという、そういう方おられたら挙手願います。はい、どうぞ。

学生C：法学部4年のCといいます。どなたかにということではないんですけれども、教養というものを身に付け始めるのが大学からでいいのかということをお伺いしたいんですね。これは下手をすると、高校を卒業しただけの人は教養が無いのかという話になってしまうので、おそらくそうじゃないだろうと思うんですが。でも教養とは何かと考えた時に、猪股先生の定義をお借りして、学問をする上で基盤、前提となるような知というものを持っていて、それを運用することができる。そうした価値観や行動様式を持っていることが教養とするならば、それは大学入学までに高校までですね、身に付けておいてもらって、大学では最初から専門の教育をスムーズに行えるようにすることが、大学にとってはむしろ効率的なんじゃないかというような気がするんですが。生きる力なんていうのは、まさに総合的な学習の時間というようなところで使われた言葉でもありますし、教養というのも、大学から始めなくてはいけないか。高校までで身に付けておくべきものなんじゃないのかということについて、お考えをお伺いしたいと思います。よろしくお願いします。

司会（前）：フロアでも、壇上の先生でもどなたか。

野家：もちろん、高校までの人は教養が無くて、大学に入ったら教養が付くというものではないし、例えば戦前生まれの人は尋常小学校しか出ていない人でも教養のある人がたくさんいます。ですから、学歴と教養は関係ありません。高校を出ようと、大学院を出ようと、教養の有無には関係ありません。それでひとつ関連した質問があります。

自分に教養が身に付いたと実感できる日はくるのでしょうか。教養に特別な訓練が必要ないならば、もしかしたら知らずのうちに教養を身に付けることなく学生生活を終えてしまうかもしれません

ということですが、私自身、教養が身に付いていると実感はできていません。だから教養というのはある意味では一生の目標ですね。ですから、いつになったら教養が身に付くかということは、それは人それぞれによっても違いますし、また教養が身に付いたなんて自慢している人は嫌味な、無教養な人だと僕は思いますので。やはり日々、ある目標に向かって努力をして、ゲーテの言葉に「人間というのは努力をしている限り迷うものだ」という台詞が『ファウスト』という戯曲の中にありますけれども、日々の生活の中で、絶えず目標を決めてそれに懸命に努力をしている状態が教養なので、だからそこは単なる知識とは違うと思います。知識ならば一冊専門書を読んで身に付く知識もあるでしょうが、教養の場合には、ある意味では、永遠に努力の途上にあると考えたほうがいいんじゃないかと思っています。

福西：私も教養を身に付けるためということで、教養教育に臨む必要はないと思います。あくまでも、教養教育の段階はいろいろなことに挑戦し、いろいろな講義を取っていくわけですね。そこで自分が取った講義の中に、自分が考えもしなかったことがあり、こういうふうに考えるのはどうしてだろうか。あるいは、今はこんなことまでやっているのかと、そういう率直な疑問ですね。そういう好奇心があれば、授業も楽しくなってくる。私も東北大の授業をたくさん担当していますが、そういうふうに授業を楽しんでいる人だけでなく、何かつまらなそうに授業を受けている人もいるんですね。そういう人にとって授業は本当に時間の無駄だと思います。何の役にも立たない。だから逆に、どうして自分がその授業をつまらないと思うのかというふうに考えれば、それは多分その授業の中で何かを発見しようという好奇心がないことに気づくと思います。自分の学生時代を思い出すと、授業みんな楽しかったです。今日の合同講義は非常に楽しめましたが、やはり自分自身が授業を楽しむことが大事ですね。そのためには自分の方から好奇心を持たなくてはいけないと思います。そういうことの積み重ねが、最終的に教養じゃないかなと思います。教養を身に付けるためと考えて授業に出る必要は全然ないと思います。

あとは私への質問の中に、「行動力はどうして身に付くか」というのがありましたが、何事にも行動力が必要です。普段の授業の中でも好奇心があればそれに刺激された行動が出てくるので、行動力を身に付ける第一歩は好奇心だと思います。次に、私が行動力を身に付けるためにやったことはいろいろな人と話すということです。いろいろな年代の人と話すと、自分自身がすごく刺激されます。東北大の良いところはいろいろな年代の人がいるわけです。そうした人たちと話すことによって自分の行動力を高めていくことができると思います。そうした話の中からヒントを得て、じゃあ自分はこういうことにチャレンジするにはどうしたらいいのかと考えていくことができます。

猪股：一言だけ。私も、教養を学び始める時期というのは関係ないと思っていますし、それから学ぶ方法も、教育を受けなくてはいけないという書き方をしてくれているようですけれども、教育を受ける必要もないですよね。自ら学ぶような姿勢であるとか、それから行動様式みたいなものまで価値観とかまで入ってくるとなると、実は皆さん芽になる部分というのはもう既に持っていると。そういう芽がないと、受験勉強は一生懸命できないですよね。何か知りたい、大学に行って勉強したいとか思わないわけで、既にそのような芽はもう持っているわけですね。その芽を持って、そして十分な能力を持って入学してきて、教養の全学教育科目も含めて、大変バラエティに富む授業がたくさん開講さ

れているという環境が加われば、相当、教養というものを深めるチャンスが広がるのではないかというように思っていますので、ぜひこの機会を生かしてもらえればというように考えています。

司会（前）：海老澤先生、何か。

海老澤：先程最初に、就活と教養は何かということの関係について質問があった時にいきなりだったので、あまりちゃんと私としては答えが言えなかったのですが、今こういう話になってくるとちょっと付け加えられるんではないかと思って、しゃべらせていただくことにしました。私は就職担当を何度かやりました。それは４年生なり、修士の方々を企業の方に結び付けるというか、紹介するとかそういう役だったんですけれども、その時に企業の方が学生の皆さんに必ず聞くことで特に重要なことは、あなたはどういう人ですか、あなたは何が得意ですか。自分の売りは何ですかということなのですね。それを覚えているので、私は１年生の皆さんに授業をやる時に、このことに対してあなたは自分では何を考えているんですかとか、あなたは自分の今までの経験でどういうことが言えますかということを、訊きます。私は就職の担当した時に学んだことを、１年生の皆さんの授業に使っているつもりなんですけれども。つまりそこで何が大事かというと、教養というのは先程話が出ましたが、自分の場所が分かる、自分の立ち居地が分かる、世の中で、社会の中で自分にどういう位置があるかということを分かるということですね。ですから、そういうことで言いますと、みなさんにはすぐに簡単には分からないですよね。知識も経験もないと、そういう境地にはなかなか達しないと思います。だから常に努力するということは大事だと思います。そういうことでいままで皆さんがおっしゃったこととは、結局は同じなんですが、申し上げてみました。

司会（前）：ありがとうございました。よろしいですか。はい、他にぜひという方。はいどうぞ。

学生Ｄ：経済学部１年のＤと申します。先ほど日米の違いで、アメリカの意識の高い学生は、企業に入るよりも独立するとおっしゃいました。日本の大学だと就活などには支援的な雰囲気があるんですけれども、独立に関して応援する活動というのはあまり聞いたことがないので、何かそういうのはあるのかどうかというのを伺ってもよろしいでしょうか。

花輪：大学ではですね、そういう起業をしようとする方に対する支援というのはあります。イノベーションという言葉をよく使いますけれども、いいアイディアがあって、それが伸びていくという判断をすれば、その人に支援するというサポート体制は、今作っています。それから例えば銀行みたいなところですよね。地元銀行で大きい銀行がありますけれども、そういうところもまず最初はお金が必要ですので、お金を貸そうと。そういう支援もあります。あまり一般的には知られていないんですが、大学を卒業してすぐというよりは、むしろ大学の支援の中で色々な研究をしていく中から、そういう芽が出る時には応援しようと、そういうスタンスなんですね。若い人向けにということとはちょっと立ち位置が違うんですけれども、広く言えばそういうイノベーションで、起業、業を興すような方に対してサポートしようという体制はとられています。

司会（前）：よろしいでしょうか。大学の現状だということでご説明いただいたと思います。

学生Ｄ：ありがとうございます。やっぱりそういうことに関しては、あまり周りのみんなも知らないかもしれないので、そういうことをみんなにも知ってもらったほうがいいかなというのは少し思います。就活だけではなく、そういう意識の高

い学生を増やすためにもそういうサポート体制があるということを、皆さんにも知ってほしいと思いました。ありがとうございます。

司会（前）：花輪先生よろしいですか。時間が押してきましたけれども、フロアからはもうひとつぐらい、もしありましたら。それでは、まだ先生には答えたい質問がそれぞれあると思うので、簡単にひとつずつぐらい。

野家：先程私は自己認識と言ったんですけれども、それは確かに難しいんですね。それで、質問の中で

> **他者の眼で自分を認識できるようになるのは非常に難しいと思う**

というコメントがありました。確かにその通りですね。

> **自己認識ができ、他者の眼差しを正確に知りえるために効果的な努力とは何をいうのでしょうか。よろしくお願いします**

つまり、他者の目で自己認識をするにはどうしたらいいかということですが、端的に答えれば、これは恋愛を、失恋も含めて経験することです。異性を好きになることですね。つまり、そうすると彼氏とか彼女が自分のことをどう見ているかということが絶えず気になります。そうすることは、今の自分というものを知る一番いい手掛かりになると思いますので、大いに学生生活を楽しんで、何よりも青春の特権ですから恋愛をしていただきたいと思います。

福西：いろいろ質問があって、まだ答えていない質問がたくさんありますが、

> **コミュニケーション能力は、別に授業ではなくてアルバイトとか、いろいろ外でやったことによっても獲得できるんじゃないか。学生はそういうことにすごく時間をかけているから、授業には時間を多く割いていないのではないか**

と。そういう指摘があるんですが。確かに私もアルバイトもいいと思うんです。経験としていろいろな人と接していく。ただ大学生の本分は学業です。アメリカの場合は学業をおろそかにすると卒業できないので、アルバイトの場合は非常に限られた、要するに効率いいアルバイトをします。学内で食堂を手伝うとか、そういうことをやっていて、日本みたいにアルバイトにものすごい時間をかけている国は多分ないと思うんですね。アルバイトの経験もいいと思いますが、やはりそれはひとつの経験であって、それによって全部が得られるということは絶対ないと思います。やはり学問というものを追求するというのが大学生だと思います。その中で本当の新しいものが見えてくる。プラス、アルバイトもいい、スポーツもいい、何でもいいですが、そういうことだと思います。

猪股：私だけに対する質問ではなくて、3人全員にチェックが入っている質問なんですけれども、

> **企業から教養のある人材や、グローバル人材を求められていることはわかったのですが、そうすると、学生は大学での勉強によって企業に求められるような人材になることが重要なのでしょうか**

という質問ですね。私自身はそんなことはないと思っていて、企業の採用で、面接で必ず聞かれる質問で、学生時代何に力を入れましたかという質問がありますけれども、この力を入れるもの、力を入れたいと思うものを見つけるというのがまず一番大事なことなんじゃないかというふうに思います。学生だから色々なことができるし、そして同時に学生だから色々な制約があるわけですけれども、その中で自分が力を入れられるところを見つけて、それを一生懸命やっていくと。そういうところが主体性であるとか、それからそのプロセスでのコミュニケーション能力の獲得とか、そういうものにもつながっていくんだろうというように思います。大学に

入って４年間で進路を考えればいいんだというように言われて大学に入って来たと語る学生が多いんですけれども、実際の就職活動はさっきお話した通り、卒業と同時に就職するために、在学中に選考されます。大体３年生の終わり頃から始まる。ということは、進路を決めるのには３年ぐらいしかなくて、それまでに語れること、自分が一生懸命やったぞと胸をはれるようなことを、自分の中に蓄積しておくのもそれぐらいの期間になるということになります。もうすでに時間は結構経っていますので、ぜひ積極的に色々なものにチャレンジをしていっていただければと思います。

司会（前）：フロアの先生方、何か一言おありでしょうか。よろしいでしょうか。それでは終わりに、木島先生のほうからご挨拶願いたいと思います。

おわりに

高等教育開発推進センター長　木島 明博

木島：一番前で聞いていましたので、やっと振り返ることができ、皆さんの顔を正面で見ることができました。本日はどうもありがとうございました。毎年この「教養とは何か」ということを題材に合同授業が行われています。これは「教養」が大学教育の中でも非常に大事であると考えているからです。

さて、今日の授業と質疑に参加して今日もまた新たな教養が身に付いたなという気になりました。すなわち色々な先生が、あるいは君ら色々な学生さんが多様な考えを持っているということを再認識できたこと、斬新な考え方があったと感じたところがあったからです。その中でも特に強く感じていたことを言わせていただきますと、「自分を知るということ」を教養としたところに強い共感を覚えました。そして、それに付け加え、「他人を知るということ」も重要ではないかと感じたところです。自分を知るためには他人を知らなければならない。先ほど野家先生が恋愛をしなさいという意味のことをおっしゃられました。そして恋愛というのは、自分を非常に磨くものだとおっしゃられました。私も同感です。好きになった時に相手がどう考えているのか、相手にとって自分はどういう人間であるべきか、自分はなぜその人を好きなのか、失恋しても失恋しても考え続けてきました。これが人の気持ちを考え、自分を考え、そして自分を知ることにつながっているのではないかと思いました。このことが自分を伸ばしてくれたと思います。しかし、ただそれだけ考えていたわけではありません。いろいろなことを調べました。小説も読みました。また好きな人が、物理が好きで、僕は物理が大嫌いなときは相手を知るために物理を勉強しました。おかげで受かることができました。ただの失恋だけではなく効能もあったのですが、おかげさまで自己認識の中に、他者を知る、他者の心も知っていくことのために、色々なことを学んで行ったと感じました。他人を知って自分を知る。好きでも嫌いでもよいのです。なぜ他者を好きになるのか、あるいは嫌いなのか、考える。ただ考えるのではなく、深く掘り下げて考えていく。その過程で自己を認識していく。これが教養を身に付けていくことにつながるのではないでしょうか。本日はどうも本当にありがとうございました。

司会（前）：はい、それでは今日の講義を終わりますけれども、アンケート用紙ですね。出欠を兼ねているということで、必ず出していただきたいです。それからもうひとつ、今日は教務の方々にも大変大きな手助けをいただきました。また、基盤センターの田中さんも、こういうマイクとかコンピュータ関係でお世話になりました。お礼申し上げたいと思います。それでは、これで終わりにしたいと思います。ご苦労様でした。

2.3 合同講義　受講生の質問・意見と教員からのコメント

合同講義は大きく前半部の講義と後半部の討論とに分かれるが、後者の双方向の質疑応答のパートを活発化するために、予め当日の配布資料に「質問・コメントシート」（次ページ参照）を添付し、休憩時間に回収することとした。各受講生にはシートを3枚ずつ配付し（必要に応じて追加）、質問したい講師の名前をチェックし、1件ごとに1枚のシートに記入するよう依頼した。受講者数95人からのシート提出数は139件であった（複数提出あり）。それぞれの講師に対するシートの提出数は下段の表のとおりである。

シートは前半･後半の間の休憩時間（13分）に回収し､それを質問が向けられた講師ごとに仕分けを行って手許にもつこととした。ただし、シートの数が多かったため、すべての質問に網羅的に答えることは困難であり、壇上に上った各講師がそれぞれ特徴的な質問を選んで選択的に回答せざるをえなかった。まっさきに取り上げたのは今回のテーマに関わる「今回の合同講義のタイトルに“就活”を入れたのはなぜか。（中略）ただただ､学生の興味を引きそうだったから､では悲しいです」という挑戦的なものであった。教員からの回答については本文のやりとりを見ていただきたいが、このような批判的意見を正面切って投げかける受講生がいることを頼もしく思った次第である。

質問やコメントは数が多いばかりでなく、内容も具体的な就職事情に関するものから「教養とは何か」という根本問題にいたるまで、簡単な要約を許さないほど多岐にわたっており、受講生の問題意識の多様性をうかがわせるものであった。討論のなかでは関連する質問や意見をフロアから求めたが、日本とアメリカの起業に関する学生の意識の違い、グローバルとは英語運用能力のことか、教養とは高校までで身に付けておくべきものではないか、など現在の学生の関心のありかを示して興味深い議論が行われたが、残念ながら論点を深めるには少々時間が足りなかったようである。

時間の不足を補うために、回収されたすべての質問やコメントを開示し、それに対する教員からの回答をホームページで公開するとともに､本報告書に収録することとした。巻末に資料として掲載したので、学生と教員の真剣な応接をご覧いただければ幸いである。

■話題提供者別質問・意見事項数
※質問・コメントシート提出者ベース

猪　股　先　生	29件
福　西　先　生	56件
野　家　先　生	31件
全員・その他	23件
計	139件

（複数提出あり）

質問・コメントシート見本 ［A5 カラー用紙］

東北大学教養教育院　総長特命教授合同講義
「教養はなぜ必要か―就活に役立つ？」
2013 年 10 月 22 日（火）16:20～18:30　マルチメディア教育研究棟 M206

質問・コメントシート

学籍番号		所属		氏名	
◇講義内容に関する質問・コメント（どの講義かチェックしてください） □ 猪股 歳之　□ 福西 浩　□ 野家 啓一					
（質問・コメント）					
◇その他の質問・コメント					
（質問・コメント）					

2.4 合同講義に対する学生の評価

合同講義に対する学生の評価を知り、今後の改善に役立てるためにアンケート調査を行った。方法として、教養教育院総長特命教授が担当する総合科目の履修生に渡す予備資料の最後のページに質問事項を記し、解答用紙としてミニットペーパーを配付し、講義終了後に出口で回収することとした。回答数は95名である。

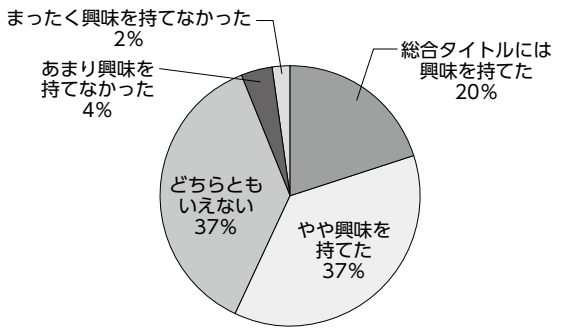
アンケート回答者の学部別構成は、下の表に見られるように、そのまま総合科目を履修する学生の学部別受講者数を反映している。受講者が最も多いのは工学部であり、31％と参加者のほぼ三分の一を占める（ただし、昨年は62％であったからほぼ半減している）。参加者数は次いで法学部の19％、文学部の17％、農学部の14％の順となっており、昨年に比べると文系学部の学生の増加が目立っている。また、各学部の在籍1年生数に対する参加者比率の点では法学部（11％）、農学部（8％）、文学部（7％）の順となっており、工学部が3％と低くなっているのが特徴的である（昨年は10.5％）。

アンケートは7つの質問から構成されているが、いずれの項目についても「どちらともいえない」という回答が約3割を占めている。これをどう解釈すべきかは難しいが、昨年も同様の結果であったことを考え合わせれば、気にするほどのことではないのかもしれない。総合タイトル（「教養はなぜ必要か―就活に役立つ？」）に興味がもてたかという設問には、「興味をもてた」と「やや興味をもてた」を合わせると57％に上っており、「就活」を入れることに議論はあったものの、テーマはほぼ興味をもって受け止められていたことがわかる。難易度については「ちょうどよい」が46％とほぼ半数を占めており、そのせいか理解度についても肯定的回答が57％に上っている。また関心増減度に関しては、「関心が増した」と「やや関心が増した」を合わせて66％と高い比率を示しており、これは主催者として非常に嬉しいことであった。

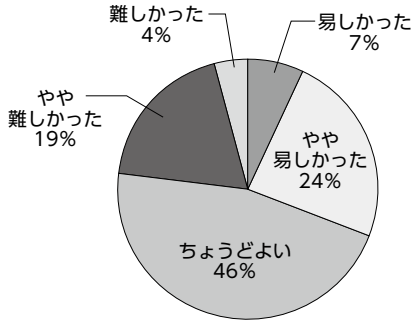
討論充実度については、肯定的回答が55％あったものの、否定的回答も12％ほど見られる。これは時間不足にも原因があると思われ、今後の課題としたい。最後の継続希望については、「今後も続けてほしい」と「どちらかといえば続けてほしい」を合わせると62％に上っており、これは合同講義が好感をもって受け入れられたものと考えている。

学部別受講者数と東北大学1年生との対比

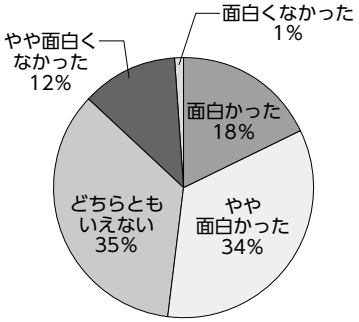
	受講者		東北大学1年生		対在籍者提出率
	実　数	全体比	実　数	全体比	
文学部	16	17%	223	9%	7%
教育学部	0	0%	76	3%	0%
法学部	18	19%	160	6%	11%
経済学部	7	7%	267	11%	3%
理学部	7	7%	345	14%	2%
医学部	0	0%	278	11%	0%
歯学部	1	1%	54	2%	2%
薬学部	0	0%	84	3%	0%
工学部	29	31%	878	35%	3%
農学部	13	14%	160	6%	8%
その他	4	4%			
計	95	100%	2,525	100%	4%



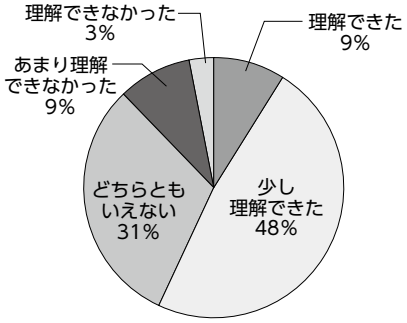
【質問 2】興味



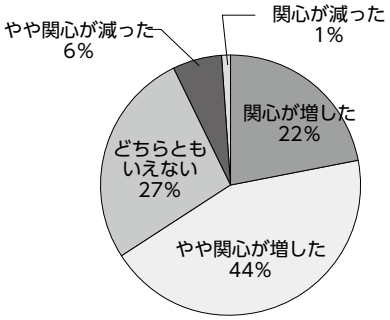
【質問 3】 難易度



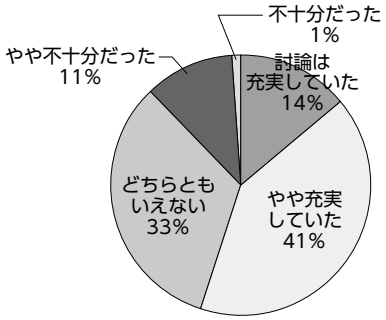
【質問 4】面白さ



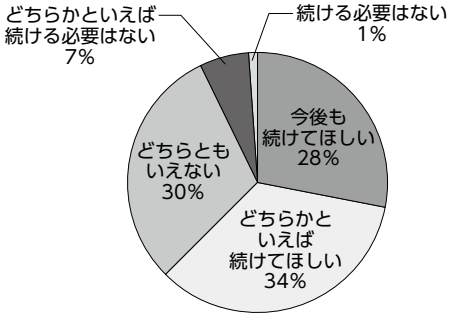
【質問 5】理解度



【質問 6】関心増減度



【質問 7】討論充実度



【質問 8】継続希望

合同講義「教養はなぜ必要か―就活に役立つ？」に対する評価

（注 1）この評価は、今回の合同講義に対する皆さんの率直な感想などをお聞きし、今後の教育改善に役立てようとするものです。総合科目履修学生はこの提出をもって出席確認としますので、必ず提出してください。上記履修学生以外の方は、無記名で結構です。回答は別紙のミニットペーパーにご記入のうえ、教室入り口にある箱に入れてください。

（注 2）総合科目履修学生の今回の合同講義に関するレポート提出については、各担当教員の指示に従ってください。

【ミニットペーパーの表面の記入】

●総合科目履修学生

（学籍番号）（所属学部）（氏名）マークシート、記入式ともすべて記入してください。

●履修学生以外（学生、教職員、その他）

学生の場合は、マークシート、記入式とも（所属学部）を記入してください。

（学籍番号）と（氏名）は何も記入しないでください。

〇共通

（提出月日）　今日の日付（10 月 22 日）を記入してください。

【ミニットペーパーの裏面の記入】

〔質問 1〕	あなたが受講している総合科目の担当者はだれですか。以下の番号で答えて下さい。 （火曜日５講時以外の時間も含む） 1 海老澤　2 森田　3 工藤　4 前　5福西　6野家 7 総合科目は履修していない（学生、教職員、その他）		
今回の合同講義を、次の各項目の観点から評価してください。（報告者による違いはあるかもしれませんが、全体を通しての印象を記入してください。）下記の表で各質問の答となる１～５を選んで、ミニットペーパーの該当する箇所の〇を塗りつぶしてください。			
〔質問 2〕	総合タイトルには興味を持てた	5 ― 4 ― 3 ― 2 ― 1	興味を持てなかった
〔質問 3〕	易しかった	5 ― 4 ― 3 ― 2 ― 1	難しかった
〔質問 4〕	面白かった	5 ― 4 ― 3 ― 2 ― 1	面白くなかった
〔質問 5〕	理解できた	5 ― 4 ― 3 ― 2 ― 1	理解できなかった
〔質問 6〕	関心が増した	5 ― 4 ― 3 ― 2 ― 1	関心が減った
〔質問 7〕	討論は充実していた	5 ― 4 ― 3 ― 2 ― 1	討論は不十分だった
〔質問 8〕	今後も続けてほしい	5 ― 4 ― 3 ― 2 ― 1	続ける必要はない

その他、印象に残った点、改善すべき点などは、各担当教授宛のレポートに記入してください。
履修学生以外の方は、ミニットペーパーの裏表空白の場所のどこでも良いので記入して下さい。

■総合科目（火５講時）：科学と人間（海老澤）／教育と科学技術（森田）／環境と経済・社会の調和に関する多様なアプローチ（工藤）／植物面白考―巧みな生存戦略と私達の暮し（前）／急成長する中国の科学技術と経済（福西）

あ と が き

東北大学総長特命教授が協力して行う催しとして、2010 年に合同講義を始め、2011 年には教養教育特別セミナーを始めた。

今年度には、これらの企画を継続発展させ、教養教育特別セミナー「東北大学のチャレンジ～グローバル時代の教養教育」と総長特命教授合同講義「教養はなぜ必要か～就職に役立つ？」を行った。

今年度の教養教育特別セミナーは、昨年に引き続き萩ホールを使って行ったが、里見総長の挨拶があったにもかかわらず、新入生の参加は 200 名 に届かなかった。来年度の教養教育特別セミナーの準備にあたって、参加する学生を増やすよう全力を尽くしている。

本年度の合同講義では、昨年度より討論の時間をさらに長く取り、また出席した学生の意見や質問を求めた。これら学生の意見のうち、教養教育とそこで身につけるべき力についての質問や意見からは、多くの学生が教養教育の重要性を認識していなかったことが分かり、本企画が有益であったことを示している。

これらの企画を実施し報告書を作成するまでには、多くの方々の御支援とご理解が必要であった。教養教育院長の花輪公雄理事、高等教育開発推進センター長である木島明博総長特別補佐、および学務審議会教務委員長である関内隆高等教育開発推進センター副センター長には、多くのご指導とご協力をいただいた。教育・学生支援部の事務関係者には、財政面を含め、多大なご支援をいただいた。また、教養教育院秘書の鈴木かおるさんには、報告書作成の様々な場面で積極的に協力をいただいた。これらの方々に改めて感謝するとともに、今後も、東北大学における教養教育の可能性を追求してゆきたいと考えている。

2014 年 3 月

海老澤 丕道・森田 康夫・野家 啓一（合同講義コーディネイター）

資料　合同講義 受講生の質問・意見と教員からのコメント一覧

猪股「日本的雇用慣行と大学教育：進路選択の基礎知識」講義内容に関する質問・コメント

Ⅰ．教養と専門

質問	大学教育自体が教養を重要視する方向に動く場合に、理想としては、専門教育と教養が両立できて互いに良い影響を与えると思うが、現実として、例えばカリキュラム上に一般教養が形としてあるだけだったり、就職を意識するあまり、専門がおろそかになってしまわないかという不安があります。
	今の時代では、就職が難しく、いろいろな職業をやってみることはほぼ不可能に近いと思う。その中で自分の希望の職業を厳選し、そのための努力を多く積まなければならない。しかし、結局希望職に就けない可能性も考えるならば、教養と専門をどのようなバランスで修得すればいいのか知りたい。
	工学部に入ったので、将来は専門的な知識があれば良いと思っていたが、社会から求められていることはそれだけでなく、その基礎に教養、総合的な知識が必要なのだということを知った。一年時は、専門より教養の講義の方が多いので、意識高く取り組んで学んでいきたい。
回答	講義の際にも紹介した本学卒業生を対象とした調査の結果から浮かび上がる教養と専門の学び方の理想型は、在学期間を通して教養も専門も、という学び方です。幅広い教養という土台の上に専門を高く積み上げる、というのは教養と専門の関係としてよく提示されるイメージのひとつですが、その構築の順序も方法も実は比較的柔軟性が高いということをこの調査結果は示していると考えることができます。（東北）大学卒業者として、高い専門性を身につけているのは当然のことですが、その上で、在学期間が専門以外の領域についても貪欲に学ぶ期間となれば大変に幸いなことです。そのためにも、低年次のうちから積極的に興味関心を広げておくことが効果的だろうと思います。
質問	教養というものは、ただ多くの様々な分野の知識を保持していればいいのではなく、それをいかに社会に生かすことができるかどうかが最重要視されているということを強く感じた。この運用能力を育くむには大学生活４年で足りるものとは当底思えない。よく高校までの学習はインプット、大学からはアウトプットを学習するためにあるというが、12 年間もインプット（私見だが、あまり実用的でない学習）に時間を割く必要はあるのか疑問に感じてしまう。義務教育の小中の九年間はインプット学習が適当だと考えられるが、果たして高校三年間もインプット的な学習である必要性はないと思う。高校も大学同様、主体的に選択して進む道であり、将来をみすえた学生も多いと思われるので、アウトプット的学習を取り入れてもよいのではないかと考える。
回答	教育制度全体、ひいては社会として考えるべき課題であり、さまざまな考え方があり得ますが、こうした取り組みも進んできているのではないかと思います。

Ⅱ．大学教育と就職

質問	新卒者を採用することについて、最終学歴が重く見られてしまうために学歴による就職格差を広げることにもつながるのではないか
回答	質問文中の「学歴」を、ヨコの学歴、つまり同じ教育段階の学校間の違い（これを学校歴と呼ぶこともあります）という意味での質問として回答します。採用時に学歴が重視されているか、という点は一般的にも多くの関心を集めてきたテーマですが、各種の調査結果で共通しているのは、いわゆる大企業や有名企業等への就職者に入学難易度の高い大学の卒業生が多く含まれているという点です。この傾向を学歴による差別と見るならば、それはあってはならないこと、となりますが、能力に基づいた選抜の結果として生じてしまった学歴間での差異である、というのが多くの場合の理解のされ方なのではないかと思います。
質問	卒業と同時に就職できた昔に比べ現在の厳しい就職環境のせいで、教育が学生を就職させることに重点をおいたものになってしまうのではないか。
	結局､内定を得たから「力を得た」と評価するのか。内定を得られない学生はどれだけ勤勉でも力のない落伍者か。
回答	多くの大学でもっとも重視する目標のひとつとなっているのが、専門的人材養成、すなわち専門を身につけた人材を社会に輩出することです。このことは、専門を身につけてもらうことが大学教育の重要な目的であることを示すもので、大学がこの部分をおろそかにすることは自らの存在意義を低減させることにもつながりかねません。しかし、同時に学生が自らの人生を構築していく上で、大学の、あるいは、大学という出口が持つ重要性・影響力もまた多くの大学が認識しています。そしてこれらの両立を実現するための方策のひとつがキャリア教育、キャリア・就職支援であり、多くの大学でこれに類する活動が進められています。就職において大学進学までの段階と大きく異なるのは、進路選択の際の指標の多様性です。偏差値のような一元的な指標によって序列化された学校の一覧表を利用することができた入学試験とは異なり､就職ではプレーヤーに共通の指標はほとんどありません｡自分にとって価値ある指標を見つけ、選択をしていくことが必要になります。この際、就職支援において近年強調されるようになっているのが、学生の資質や志向と就職先企業や職務内容との「マッチング」の重要性です。組織が生き物にたとえられることがあるように、生きていく上で必要となる栄養素、すなわち組織の人材ニーズはその時々で異なります。そうしたなかでも、マッチングを意識することで、就職のチャンスを広げる、就職後の不適応を低減できる、などの効果が指摘されています。

質問	教養を得ることから企業内教育では変えることが難しい知を得るための行動や運用できる所までいかなければならないということで授業を受動的にではなく能動的にならなければならないと思った。
	講義内で「基礎的･汎用的能力」が就職（採用）時に大事になるといわれましたが､その「基礎的･汎用的能力」とはもっと具体的に言うとどんな能力ですか？またその能力を身につけるためにはどんな経験が必要だと思いますか？
	就職の際必要とされる基礎的・汎用的能力は大学教育を受ける中で身につくとあったが、学生にとっては、全学教育を受ける中でそれらの知識が就職に生かされるという実感が湧かない。これは先生方の教え方というか教える方針の問題なのか、それとも授業を受け、授業に参加していく学生側の問題なのだろうか？そして仮に学生側に問題があるとしたら、それは日本の教育システムに起因するものなのか？それとも単に学生のやる気の問題なのか？見解を述べていただけるとありがたいです。
	教育で本当に教養は身につくのかは分からないけれど、何らかの形で関係はしているのだろうなと思った。
	日本の採用方式や、企業が私たちに求めていることがわかりました。
回答	教育、授業を受けることだけで身につけられる能力や知識には限界があるだろうと思います。個々の授業がすべての能力を高めてくれるわけでもありませんし、劇的な効果を持つとも限りません。さらには多様な形式の授業が開講されていることからもわかるように、授業の形態などによる得手不得手もあるでしょう。こうした能力を測定することが簡単ではないというのも、成果・効果が目に見えにくいと感じる要因のひとつですが、これらを身につけるためにも、そして伸びを実感するためにも、教育をひとつのきっかけとして自ら学ぶこと、実践してみることが必要かつ効果的なのではないでしょうか。
Ⅲ．大学教育と就業	
質問	現代における就業の状態と、教育することによって得られる知の用い方が重要であることを再確認できた。
	日本的な会社という概念が変化してきていることを知らなかった。またプレゼン能力が会社では必要とのことなので、それを学校で学んでいきたい。
	運用や行動、価値観や行動様式の前提となる“保有すべき知”とは何か、ここに何を含めるべきか、ということが大変重要であり、かつ大モメにモメそうな難しい問題であるように思われた。
	基礎能力というものがもっと具体的に知りたい。
	企業が私たち学生に求める能力や、就職後に活躍していくために必要な能力が理解でき、大変有意義だった。
回答	講義では各省が取りまとめた基礎的・汎用的能力の例として、いくつかを紹介しました。これらは文字通り、社会人として、職業人として身につけていることが期待される能力の基礎的・汎用的部分をまとめたものです。その意味において、職種による違いや時代の変化などに影響される部分は相対的に少ないと思いますが、労働をめぐる環境は大きく変化しつつあり、こうした能力への期待にも変化が生じる可能性があります。いずれのまとめにおいても変化に対応できる力への期待が読み取れるように、能力への期待、必要性、評価などを固定的に捉える必要はないのではないでしょうか。
Ⅳ．就職活動	
質問	就職活動の際に専門分野をそこまで重視しない企業が増えているそうですが、それでは大学の専門分野を学んだ意味がなくなってしまうと思います。
回答	職種によってはそのように語られる場合もあるかもしれませんが、専門分野を持つ、学ぶことの価値を否定する人はいません。
質問	「コミュニケーション能力」「主体性」といった能力を、決して多くはないであろう時間で行われる面接やグループディスカッションで、どうやって測るのだろうかと思った。
回答	そのノウハウは組織内に蓄積され、更新され続けているでしょうし、採用活動をサポートする企業もあります。採用者側も工夫と努力を重ねているはずです。
質問	大学院の先輩から推せんで企業に就職したという話をきいたが、これは何のために存在するのか。
回答	推薦制や指定校制は、公平な競争の阻害要因として批判の対象となることも多くありますが、信頼関係に基づく安定的な就職・採用を可能にするというメリットもあるといわれています。
質問	中途採用者が正社員経験者と厳しい競争を強いられるとのことでしたが、中途採用者が強みを生かすことはできないのでしょうか。
回答	中途採用の入り口では、新卒の場合とは異なり、それまでの職業経験が重視されることになるため、非正規での就業を続けてきた者にとって、正社員としての経験を持つ者との間での「厳しい」競争を強いられる場合があるということになります。

V．雇用のあり方	
質問	企業は能力に応じた賃金を支払う必要があると思う。それに伴って、自分自身の能力を伸ばしそれをアピールしていくことが大切だと感じた。
	新しい雇用形態は能力主義により努力した分だけ評価を得られるため、社員の意識が高まり新しいものを生み出しやすく変化に適応していけるという大きなメリットがあるが、逆にその自由度の高さが無秩序をもたらすことはないのか。
	長期雇用などに代表される古典的な日本の雇用慣行はいつ、どのように形成されたのか、その歴史的な背景を知りたいです。
	スライド10で「卒後3年まで新卒扱い」を提言しているが、そもそも“新卒“という枠組を廃止しないのか。（新卒という曖昧さではない専門性に価値を企業が見出せないから現行制度なのか）
回答	賃金のうち、年功によって決定される部分が縮小し、業績が反映される部分が拡大してきていると言われています。これが自身の能力や業績を伸ばそうとするモチベーションを高める効果をもたらすことは想像に難くありません。しかし、能力主義を建前にして雇用のあり方の過度な弾力的運用が進められていくことには注意が必要かもしれません。また、採用は入口だけの問題ではなく、こうした能力評価の仕組みをも含むその組織全体での雇用管理、人事管理のあり方やその計画、すなわちそれぞれの組織における労働力（量・質双方）の獲得・確保の方法と密接に関わっていますし、教育機関との関係やそこへの影響も無視できませんので、部分的であっても変更は容易ではないというのが実情ではないでしょうか。

討論で回答
日本的雇用慣行についてのスライドにおいて、〈三種の神器〉という形での説明があったが、他国にも目を向けたときに、例えばアメリカなどの雇用慣行はどうなっているのか、また、その慣行についてはどのような意見を持っているのかをきいてみたい。
少し前（もしかすると現在）に企業は「即戦力」を重視していましたが、もう少し企業内教育に力を入れるべきだと思います。
教養は社会に出てからも役立つということが理解できた。新規学卒者一括採用方式によって就職した人々は、その後いきいきと、モチベーションを保って働いていけるのだろうかと思った。
大学在学時のはじめに教養のみを、後に専門のみを学習する場合と、教養・専門を並行で学ぶ場合では、どちらをすすめますか。後者では、付け焼き刃ではないでしょうか。

福西　浩：「リベラルアーツで育むグローバル人材」への質問・コメント

Ⅰ．グローバル人材について

質問・コメント	「グローバルタレント」の概念は、私たちのモチベーションも高める効果があり、推進する価値があると感じた。私も、学力はもちろん、どこに行っても恥をかかないようにいろいろな力・スキルを身につけたいと思う。
	グローバル人材になることはこれからの世の中を生きていくためにとても必要だと思う。グローバル人材というといろいろな世界の人と交流をしなければいけないので、まずコミュニケーション能力（日本人同士も含めて）が必要である。基礎ゼミなどはそれを育てるのにとても良いと思った。
	事前配付資料のレジュメに何度か「グローバルな視点」という言葉が出てくるが、「グローバルな視点」とは具体的にどのような視点のことか。
	グローバル人材に求められる能力としてあげられていた項目（スライド 13）は、何をもって獲得したと言えるのでしょうか？
	グローバルな人材となるための条件として、積極的な学習が不可欠であり、大学は学ぶ場であることを再確認できた。
	日本では大学に入るための勉強がピークであり、大学入学後は米国よりずっと勉強時間が少ないが、本来、グローバルな人材を育成するには社会に出るために勉強する時期、つまり大学でより学び、社会に触れることが大事なのかなと感じた。
	東北大学の一般教養科目はグローバル人材に必要とされる能力（コミュニケーション能力など）の基礎として機能しているのか。（私はイマイチ感じられない）
	グローバル人材を育むためのゼミなどはたくさん開講されているが、そういう場に自ら行かない人たちのために必修科目などでグローバル人材を育む機会を設けたりしているのですか？
	これから企業が求める「グローバル人材」について、個人の強みを発揮することに関しては現在の教育課程では難しいと思う。小・中・高の教育では決められた答を導くことが重要なので、様々な個性が生かされないし、個性を生かすことに抵抗を感じる様に育ってしまう。大学教育ではある程度個人の特性を生かせる環境は整っているが、大学に入学するころには、多くがそれまでの教育によってその環境を生かせない学生になってしまっていると思う。
	グローバル人材育成のためにはやはり英語能力は必須ということなのでしょうか。
	日本的発想を活かすということをふまえてグローバルに活動すべきで、英語で考えたらアメリカンな発想しかできないのでは。
	グローバル人材になる上で留学などの海外経験は絶対的に必要でしょうか。
	グローバル人材に必要な異文化への理解を深めるために留学は有効な手段だと思うが、短期ならともかく長期の留学によって、かえって就活で他の学生に遅れをとるおそれはないのだろうか。
	文理（個人的にこの区別は嫌いですが）では相対的に理系の方が国際交流が盛んな印象がある。個人的感覚だと法学部は全くと言っていいほど機会はなく、外部（外務省や内閣局、国際交流基金など）の制度に頼らざるを得ない。留学にとらわれない、遊学のようなもっと自由な勉学、その機会を大学で用意できないか。
	グローバル人材というが、海外で生活することで得られることは何なのか。その苦労は大変なものだと考えられるがその一歩を踏み出す勇気はどこから得られるのか。
	グローバルな人材が求められる現在の状況に関わらず日本人の多くは内的思考が働いて積極的に外に出ていこうという人が少ないような気がする。それは日本の制度的な問題だろうか？それとも日本人の特質だろうか？意見をお願いします。
	指摘された能力、求められる人物像などは自分たちもよく耳にし考えていることのように思います。自分の場合、問題なのはそこから考えたこと、解決策を実行に移す行動力がないことです。この消極性をどのように改善すればいいのでしょうか。何かアドバイスを頂けますか？
	グローバル人材は必要だと思うが、大学生全員がグローバル人材になる必要はないと思った。
	「グローバル人材」は大企業であれば必要かつ採用する余裕があるが、日本において大企業（0.3％）、中小企業（99.7％）と言われる中で、中小企業に対してグローバル人材の需要があるか。
	将来めざしている職業が日本国内に限定された職であり、その分野でどんなに貢献しても世界に対して影響を与えられない場合、「世界で活躍できる人材」になるべきか疑問なのですが、それでもグローバル人材にならなくてはいけないのでしょうか。
	企業から教養のある人材や、グローバル人材を求められていることはわかったのですが、そうすると、学生は大学での勉強によって企業に求められるような人材になることが重要なのでしょうか。

質問・コメント	グローバル化が進む中で、企業の力をのばすために一人ひとりのモチベーションを上げる方法が提示されました。しかし、現状では企業は競争力を上げるために就業時間をのばしたり、人件費をカットしたりとモチベーションを低下させる要因で満ちていると私は思います。どうすれば、モチベーションを上げる方法で企業の競争力を上げられると思いますか。
	日本はバブル崩壊後、経済発展が横ばいで、20年も続いている。高等教育だけを改革し、グローバル人材の育成に力を入れても、社会全体と国家政策を変えない限り、日本経済が大きく発展することはできないと思う。
まとめと回答	
質問	グローバルな視点とは何か。またグローバル人材に求められる能力は何をもって獲得したと言えるのか。
回答	「グローバルな視点」というのは世界標準のものの見方があるとかアメリカやヨーロッパの真似するとか、そういうことではなく、「多様な角度、切り口から物事を考る」という視点である。世界には様々な考え方があり、一つの出来事に対しても様々なアプローチが考えられる。真のグローバル人材は、多様な切り口から物事を考え、これまでに他の人が思いつなかった新しい見方を世界に提供できる人だ。したがって、「グローバル人材に求められる能力は何によって獲得されたと言えるか」という質問に対しては、自分自身が多様な切り口から物事を考えられるようになったと感じた時点でその能力を獲得したと言えるのではないだろうか。
質問	東北大学の現在の教養教育でグローバル人材を育むことができるのか。大学だけでなく、小中高の教育改革も必要ではないのか。
回答	現在、東北大学では教養教育を重視し、専門教育と教養教育の相乗効果によってグローバルに活躍できる人材の育成を目指している。受験勉強から大学での学びに切り替えるための基礎ゼミに加え、今年からその発展型としての展開ゼミもスタートした。語学教育や情報教育の改革も進んでおり、短期・長期留学コースも拡充してきた。平成26年度からは学部・大学院一貫の新しい教養教育プログラムもスタートすることになっている。このように東北大学の教養教育は日々進化しているので、改革が進んでいる部分に積極的にチャレンジする行動力が大事ではないだろうか。グローバル人材を育成するためには大学だけではなく、小中高の教育改革も当然必要で、小中高でもディスカッションをもっと重視すべきだろう。
質問	グローバル人材に英語能力は必須か。英語で考えたらアメリカンな発想にならないのか。
回答	英語は国際的なコミュニケーションの一番基本なので、英語能力はグローバル人材には必須である。ただ英語能力は単に会話ができるということではなくて、英語で物事を考えることができるかどうかというレベルが求められる。大学院の学生は自分の研究成果を英語で書き、英語で発表するのが日本でも普通になってきている。英語で考えられるレベルにならないと国際的に理解してもらえる論文を書くことができない。英語能力とアメリカンな発想は別問題で、日本人に求められているのは日本人の発想を国際レベルの英語で世界に発信することだ。
質問	グローバル人材になる上で留学などの海外経験は絶対的に必要なのか。留学で就活に遅れを取るおそれはないのか。海外で生活するには勇気が必要だが、その勇気はどこから得られるのか。
回答	日本の多くの学生が行動力がなく、一歩を踏み出す勇気はどうして得られるのかで悩んでいる。行動力がないのは日本で生活している限り受身な態度で生活していても特段問題が起きないからだ。しかし海外で暮らすと何事も自から行動しなければ生きていくことができない。留学の第１のメリットは行動力の大切さに気づき、行動力が身につくことである。第２のメリットはコミュニケーション能力が格段に進歩することである。様々な国の人と友だちになることによって、多様な考え方を知り、多様な見方ができるようになる。もちろん英語能力も高められる。第３のメリットは大学での学びとは何かを体で知ることができることである。ディスカッション中心の海外の大学では自ら考え、それを発表し、議論する能力がなければ単位を取ることができない。したがって留学はグローバル人材になるための最も有効な手段である。留学で就活に遅れると心配することがいかに視野の狭い考え方であるかも留学すればすぐ気づくことができる。東北大学では世界の様々な大学に留学が可能なのでぜひ挑戦してほしい。
質問	グローバル人材は大企業が必要としており、中小企業でも需要があるのか。自分が目指している職業が国内だけを対象としている場合に、それでもグローバル人材にならなくてはいけないのか。
回答	グローバル人材を必要としているのは別に大企業だけでなく、日本のあらゆるところだ。例えば、少子高齢化社会を持続可能な社会にしていくためには国家も地方自治体も、世界のさまざまな取り組みに学び、新たな方策を考え出さなければならない。中小企業でも農業でも、世界から学び世界に製品や生産物を送り出すのが当たり前になってきた。日本の社会の変化は激しく、企業の変革も速いスピードで進行しているので、自分が目指している職業が国内だけを相手にしていると断定することは絶対にできないだろう。
Ⅱ．コミュニケーション能力について	
質問・コメント	福西先生のお話を聞いたことで、私は今すぐアクションを起こす必要があると考えた。例えば①様々な人とのコミュニケーション・交流（＝異文化交流）、②幅広い知識・考え方の習得だろう。このような取り組みの中で自己を育成していきたい。
	教養において、最も必要なのはコミュニケーション力であるという考えにはとても共感をもてました。
	コミュニケーション力が大切だという印象をうけたのだが、具体的にどのようにしてその力を身につければよいか。

質問・コメント	日本人は内気な性格の人が多いため、コミュニケーションをとるのが苦手な人も多い。その中でコミュニケーション能力やグローバルな視点を身につけるにはどうしたら良いとお考えでしょうか。
	コミュニケーション力は日本においては「上司とうまくやる能力」と化してませんか？また、コミュニケーション力はどうやったらつきますか？
	コミュニケーション能力の必要性（英語力など）は何となく理解できるが、やはり本質的な対人コミュニケーション能力は全学教育ではあまり身に付かないのではないか？課外活動のような対外志向の活動を全学教育にももっと取り込むべきでは？
	コミュニケーション力・社交力について話されていたが、ただ単に大学の講義を聴いたり、ディベートしても、それらの能力は特異的・限定的にしか身につかないのでは？例えば、サークル、バイト、学外での活動で人と人とのかかわりの中で身につけられるものだと思います。
	就活から話はそれますが、外国人の方とコミュニケーションをとる上で、高校・大学レベルの英語力は必要だと思いますか？
	英語があくまでコミュニケーションのツールであるというのは理解しているつもり。ただ、思考のツールにまでしてしまうのはどうなのかと思った。
まとめと回答	
質問	コミュニケーション能力は具体的にどうやって身につけることができるのか。教養教育ではあまり身につかないのではないか。
回答	大学での学びでは自らの知的好奇心を高め集中することによって様々な能力を短期間に獲得することができる。コミュニケーションに必要な英語、第２外国語、情報処理技術、情報活用技術に関しても、教養教育で受身に学ぶのではなく､創意工夫で様々な努力をすれば短期間に高いレベルに到達することは可能である｡またコミュニケーションに最も必要なことは相手への関心であるので、普段から仲間同士だけでなく、様々な年代の人々との会話を楽しむ態度が大事である。
質問	コミュニケーションのために英語能力は必要か。思考のツールとしても必要か。
回答	英語は国際的なコミュニケーションツールとしてあらゆる分野で使われている。世界各国の最新のニュースや各種情報が英語で発信され､研究成果も国際誌に英文で掲載される。東北大学でも大学院生になると英語で論文を書き、国際会議では英語で発表している。したがって英語能力を高めることは最新情報を得るために、また発信するために必要不可欠である。英語能力には話す、聞く、書くの能力があるが、どの能力も英語で考る能力（英語での思考力）がなければそれらは向上しない。
Ⅲ．学習時間の日米比較について	
質問・コメント	リベラルアーツの日米比較のグラフにおいて、日米であれほどやる気に差があることに驚いた。どうしてこのような差が生まれてしまうのだろうか？
	なぜ、日本の大学生の勉強時間は米国の大学生よりきわめて少ないのでしょうか。
	日本の大学生は冷めていて、勉強時間も足りていない学生が多いということでしたが、原因は何だと思いますか。
	国際的にも､「日本人はまじめだ」と言われているのを耳にすることがあるが、なぜアメリカの大学生と比べて日本の大学生は学習時間が少ないのか疑問に思った。
	学習時間が長いほど学力が高いとは限らないのではないか。
	学習時間が少ない日本の状況をあまり悲観的に見てはならないと思います。効率の良さを求めている部分もあるのではないでしょうか。
	日本とアメリカの学生の学習時間比較について話されたが、これは講義形式や難易度、課題等も関係してくるのだろうか。
	日本の大学には「楽勝科目」があり、米国にはないなどの大学のシステムの違いについて言及されていましたが、グローバル人材を育成する上での大前提となる学力を養うためには日本の大学も米国のようなシステムを取り入れなければならないと思われますか。
	大学に入って大学生のやる気のなさを身に染みて感じている。そこに意識を置いて大学改革を起こそうとしている東北大学はなかなかすごいと思う。
	諸外国の大学生の学習時間はどのくらいなのか。日本だけが少ないのか。
	日本の学生の学習時間をグローバルスタンダードくらいまで増やすにはどんな制度をとり入れたらよいとお考えですか。

質問・コメント	日本の学生の自習時間は少なく、冷めた学生が多いと言われましたが、どうしてそうなのでしょうか。私の考えとしては、1つの原因として、日本では社会に出てから長期の休暇がとりずらい。大学生のうちしか遊べない、と思っている人が多いから（事実だと思いますが）だと思います。少なくとも、私たちがよく情報を手に入れるネットの中では「休みがなくてツライ」、「残業のせいで休日も寝すごしてしまう」など聞きます。このような中で、大学生時代も勉強して、社会の中に出てから役に立つようにしようと思う人は少なくなるのは当然だと思います。今のうちに遊んでおこうと思う人の方が多いでしょう。企業が「このような人材が欲しい」と思うのなら、企業が変わる必要もあるのではないでしょうか。
	アメリカの学生が日本と比べてよく勉強する理由として、大学教師が単位を冷厳に落とせるからであり、その背景には日本とは異なって学生からの学費に多くを依存しないアメリカの大学の財政構造がある、と聞いたことがあるのですが、そのような見方は妥当なものでしょうか。
	アメリカの大学生との学習時間比較で、日本が冷めているように見えるのは日本が大学に入りやすく、アメリカはやる気のある人しか大学に進学しないでいるという別の問題があるのではないでしょうか？
	大学全入時代すなわち誰もが大学に入れる時代となっていることが問題ではないか？勉強せずに大学に入学し、勉強せずに卒業する、そういった人の増加が全体の学習時間の低下につながっていると思う。
	学習時間のデータや、日米の成積評価方法には注目しているが、文化的・社会的制度の違いによってこのような差が生まれている可能性はありますか？
	日本で、学力のある人≒お勉強ができる人、というと、むしろキー・コンピテンシーの３つのカテゴリー（道具の活用、異質な集団でともに活動、自律的な活動）に欠ける、といった風にイメージされがちなように思うが、アメリカではそうではないのか。
	スライドはちょっと横文字多くて読みずらい。アメリカのように社会人学生が多かったら大学が楽しくなりそう。日本人学生に「冷めている」人が多いのは夢を見ていないからでは？僕もそのうちの一人ですが。もうこれは国民性であって根深いものだから、それを直そうとするのではなく、活かすというか。無理に表舞台に出ようとしなくてもよいのでは？地道に、緩やかに。
	米と比べて日本の学生の学習時間の圧倒的少なさに驚いた。しかし、米国は中高生のうちからアルバイトができたり、生活の自由度が高いが、日本は校則などによる制約が多い中高生時代をおくらねばならないことが多い。そのような状態で大学でも米国のようなGPAの制度をとり入れては日本人はバイトやサークル、ボランティアなどで学べる社交性やコミュニケーション能力、経験を得られないのではないかと思った。
	アメリカの大学生の意識が高いというのは分かったが、そういったものはそれ以前の小中高での教育が関係している点もあるのではないか。日本の小～高校までの教育と大学教育には大きな隔たりがあるように思う。
	日本の学生の多くは勉強をあまりしていないというが、これは勉強の定義にもよるのではないか。単に机に向かって本を読んだり辞書を引くことだけが、大学生の勉強ではないと思う。例えば、アルバイトであっても接客をすることがコミュニケーションスキルを高める１つの勉強であるともいえるのではないでしょうか。日常生活で自分が行っていることが知らず知らずのうちに将来役に立つスキルにつながっていることもあるのではないでしょうか。
	日本と諸外国の大学生の学習に対する意欲の差は、求められる人物像の違いにあると思う。海外で求められる人材とは、コミュニケーション能力と主体性に富んだ競争に強い者であるのに対し、従来の日本で求められる人材は、競争力はなくとも企業の求めることに忠実で協調性に富んだ者だと考えられる。最近の日本はグローバル化の影響で、徐々に企業型態も変化しつつあるようだが、その人材を育てるための教育体制の整備がまだ途上にあると思う。だから現在の大学生らは現代の日本企業が求める人物像へと育てる教育を十二分に受けることができていないため、欧米の学生とはどうしても差異が出てしまうのだと考えられる。
	米国の大学生と日本の大学生の学習に対する意識の差について、GPAを重視するかどうかも違いを生む原因となっていると思うが、就職後の自由度も差を生み出す原因となっていると思ったが、それは正しいか。
まとめと回答	
質問	日本の大学生の学習時間が米国の大学生よりもきわめて少ないのはなぜか。グローバルスタンダードくらいまで学習時間を増やすには米国のようなシステムを取り入れなければならないのか。
回答	日本の大学生の学習時間がきわめて少ない理由として、①学生の目的意識、②社会・企業が大学生に求める能力・人物像、③単位の評価システム、④大学入試制度、⑤小中高時代の教育など、様々な要因が考えられる。しかもそれらの要因が互いに複雑に絡み合っているので、特定の要因だけを取り上げ、その解決策を検討しても効果はあまり期待できない。しかしこの問題は大学のレベルを直接左右する問題であり、大学教育システムの大胆な改革が緊急課題となっている。社会・企業の求める能力・人物像はすでに急激に変わりつつあり、グローバルな視点でこれからの時代を切り開くことができる総合力を求め出した。これに対応して多くの大学で入試制度、教養教育の高度化、単位評価システムの改善が始まろうとしている。東北大学も教養教育改革を継続的に進めてきたが、平成２６年度からは国際レベルの教養教育を実現するために、高等教養教育・学生支援機構の設置という大規模な改革が始まろうしている。
質問	日米の学習時間の差は企業や社会が求める人物像に違いがあるからではないのか。海外で求められる人材はコミュニケーション能力とか主体性に富んだ競争に強い人であるのに対して、従来の日本の企業は協調性に富んだ人を求めていたと思う。

回答	上の質問１への回答に記したように、日本でも企業や社会が求める能力・人物像は急激に変わりつつあり、グローバル人材への需要が高まっている。学部１年生にとって大事なことはこれまで日本の企業が求めてきた人物像に注目するのではなく、これからの社会はどのような人材を必要とするのかを考えることだ。
質問	日本では冷めた学生が多く、アメリカではやる気のある学生が多いのは、大学全入時代すなわち誰もが大学に入れる時代になったことが問題ではないのか。
回答	大学進学率は日本が 51％であるの対して、オーストラリア 96％、米国 74％、韓国 71％、イギリス 63％で、日本の進学率は先進国では決して高くない。大学全入時代が問題ではなく、大学生自身が大学でどのような能力を習得しようとしているのか、また社会・企業が大学にどのような人材育成を期待しているのかが問題となっている。
質問	日米の学習時間の差は文化的・社会的制度の違いによるのではないのか。
回答	これまでの日本の大学は社会人になる前のモラトリアム期間となっており、就職してから現場で時間をかけて教育していくシステムがあった。しかし現在は企業の盛衰が激しく、ゆっくりと企業で人を育てる余裕がなくなっている。企業は第一線で直ぐに活躍できるグローバル人材を求め出した。また企業がイノベーションを生み出すためには多彩な人材が必要であり、学生にも専門性に加えてコミュニケーション能力やリーダーシップなど総合力を求め出した。したがって学習時間の差を文化的・社会的制度の違いに帰することはできなくなっている。
質問	米国の大学生の意識が高いのは自由度の高い小中高時代の教育に関係しているのではないのか。小中高時代に自由度の低い日本では大学時代にアルバイトやサークル活動で社交性やコミュニケーション能力を身につけることは必要ではないのか。
回答	大学生の意識改革のためには小中高時代の教育改革も当然必要である。特にコミュニケーション能力を高めるには小学生の頃から英語教育やディスカッションを重視した教育が必要である。大学生活においてアルバイトやサークル活動はコミュニケーション能力を身につける上で一定の効果はあるが、グローバル人材に必要なコミュニケーション能力はこのレベルではなく、より高度なコミュニケーション能力であり、語学力、情報処理力、問題発信力、社交性などが必要になる。
質問	米国の大学生がよく勉強する理由として、米国では GPA を重視し、厳密な成績評価を行なっているからではないのか。
回答	米国の大学では奨学金給付学生の選考や大学院進学者の希望コースの選考は全て GPA によって行なっている。また大企業は GPA を非常に重視し、面接の基準（大部分の企業が 3.0 以上、一部は 3.5 以上を希望）として使用している。その理由は GPA を用いた学生の能力評価の研究が非常に進んでおり、信頼性が高く、どの大学のどの教授の授業をとったかも考慮できるようになってきた。日本の大学が一番遅れているのは GPA 評価ができていない点で、日本のトップレベルの大学は GPA 評価を早期に導入する検討を始めている。
Ⅳ．教養について	
質問・コメント	教養というのは、百科事典に書いてあるようなことを暗記するということなのでしょうか？本来大学の役割とは高等教育以上の専門性の高い分野を学ぶ場であったはずです。現在のテストなどの点数を指標にしたものでは、教養というのは育まれないと思います。作家のミヒャエル・エンデの言葉に「教養とは、質の繊細な分別能力である」というものがあるように、私はそれは座学で学ぶべきものではないと思います。
	自らの多様性や価値感というのは、意識して変えられるものなのですか？それとも、何か特別な行動や出会いを通じて変わっていくものなのですか？
	教養を身につけたり、グローバル人材になるにあたって、読んでおいたほうがいい本や、経験しておいた方がいいことを教えてください。
	先生方が考える“教養“の身につけ方とはなんですか？
	「就活に役立つ？」などというサブタイトルをつけている時点で下心しか見えてこない。教養というふわふわしたものを身につけようと思ってつくものではないし、数値的に評価できるものでもない。つまり、大学から始めても遅いのでは？それまでペーパーテストの成績しか求められてこなかったんだから。
	諸問題には学生の問題だけでなく社会の問題もありそうです。
	高校でも、研究者と議論する機会が欲しいと思った。
	あまり内容とは関係ないかもしれませんが質問させていただきます。教養を身につけたら、あるいは身につけようと努力したら、自分の就職・就活すべき分野は見つかるといえるでしょうか？将来どの方向に進むべきか迷っています。
	教養というものは自分の為のものだと思いますが教養をもつ者は社会の為になるのでしょうか。社会の為になるから教養をもっていると言えるのでしょうか。
	大学で学んだ教養知識とそれを活用する知識で社会に貢献するというが、大学生活では教養教育で得た知識を生かせるような場はあまりないのではないかと思う。実感が湧かなければ勉強のやる気もあまり起きない。
	大学教育は大切なのだと思ったが、その機会を自分が活かそうとしないと全てをムダにしてしまうのだろうなと感じた。

質問・コメント	大学に入って、自分も含めて大学に入ることでひとつの意志が終わってしまっているように思えた。大学だけの努力では終わらず学生からも変えていかないといけないと思う。
	一般教養科目が職場で使われているのか。例えば線形代数学が職場でどういった役割をもっているかがわからないとモチベーションも上がらないし、日本人の勉強時間も増えないのではないか。職場でどのように使われているかを説明することも大学の役割なのではないかと思う。
	教養科目を受けることは教養を身につけることに直結するのか？
	教養教育のスタートは大学からで良いのか？大学入学時までに各自が教養を身につけ、大学ではたっぷりと専門教育に時間をかける、という方が大学にとってはむしろ効率が良いのではないか。
	「全学教育は雑学的知識を得る場」という認識が学生の間にはびこっているのではないかと私は考える。これでは教養の本質を突けないのではないかと思う。これは学校教育システムの問題か？それとも単に学生の態度の問題か？
	就職を前提としている場合、大学での専門科目は必要以上に多い可能性があると思う。そこで思ったのだが、大学では教養科目に力を入れて、専門も多様性のあるものにおさえ、それ以上は企業側が教育するということはできないのだろうか。なぜ大学院を卒業しなければ就職できないなどと言われるのだろうか。
	中国はどれほど教養教育に力を入れているのでしょうか。
まとめと回答	
質問	教養とは何か、またどうやって身につけたらよいのか。
回答	教養は英語の Culture（耕作､養育）やドイツ語の Bildung（形成､教化）の訳語で､教育を「樹木の成長」に例えれば、教養はその成長を担う「肥沃な土壌」に例えることができるだろう。教養は知識ではなく、知性を活性化し、人を自由にするための力である。教養は人間としての総合力であり､幅広い視点から物事の本質を思考できる力である。したがって自分が獲得した知識や情報の量は数値化できても、教養がどの程度身についたかを数値化することはできない。ではどうやったら教養が身につくのだろうか。最も大事なことは知的好奇心だろう。自然について、世の中の仕組みにつて、人間について、もっと知りたいという好奇心を高めることが大事である。また自分の殻から飛び出す行動力も重要だ。いろいろな人との出会いの中で自分が持っていなかった様々な考え方を知り、コラボレーションの重要性を肌で感じることができる。外国語の習得はコミュニケーション能力を高めるためだけでなく、日本人にない思考法を学ぶために重要だ。幅広い読書はもちろん必要である。教養教育院が作成し新入生全員に配布される「読書の年輪」には自分の視野を広めてくれる 54 冊の本の紹介があるので役立ててほしい。大学生活をアクティブに過ごすことができれば教養は自然と身についていくだろう。
質問	教養は就職や就活に役立つのか。
回答	教養は人間としての総合力であるので当然就職や就活に役だつと考えられる。教養を身につけた人は他者とのコミュニケーション能力やコラボレーション能力が高く、知的好奇心も高いので、日本の社会が求めている新しい発想で未来を切り開く力がある人材になることができるだろう。
質問	大学の教養教育で教養は身につくものなのか。
回答	教養教育をいろいろな知識（雑学）を獲得する場と考えていれば教養は決して身につかないであろう。幅広い知識を学ぶ中で、自らの好奇心を高め、興味がある事柄に出会えばそれを深く追求し、思索を巡らし、周りの人と議論を重ね、新しい発見をする。そうしたプロセスの繰り返しの中で教養は身についていくものだ。最低のエネルギーで教養教育の単位をとるという姿勢では教養を身につけることはできないのは明らかだ。
Ⅴ．就職について	
質問・コメント	労使間の互いに求める要求が正反対な中、どうやって今後日本は成長していくのか。アメリカ的か、スウェーデンなどのようにいくのか、どちらが日本にはよいとお考えなのか。
	雇用形態の多様化とありましたが、具体的にはどういったものが新しくできたのですか？
	「従業員の自由度とモチベーションを上げ」というお話がありましたが、非正規雇用拡大、正社員の長時間労働化などが起こっているために、現実には従業員のモチベーション上げに成功している企業は少ないように思います。
	スライド 10（大学進学率の日米比較）のように日本の進学率は課題であるし、国際会議でも Ph.D を持たない大臣がほとんどであるのは日本くらいである。しかし、“新卒“という伝統的雇用体制、若さと OJT がある中で博士課程進学を望む学生、企業はどれだけ存在するのか。
	先生自身が採用したい教養ある人材はどんな人材でしょうか。

まとめと回答	
質問	従業員のモチベーションを上げることに成功している企業はあるのか。
回答	今までは終身雇用や年功序列などの習慣があって、企業の組織と従業員は縛り・縛られる関係だったが、これからは企業は自由度の高い組織に転換し、企業と従業員は共に成長していくパートナーとなる必要がある。そうすれば従業員のモチベーションが上がり、組織全体の能力も引き上げられることになる。伸びている企業は必ずそうした方向を目指している。
質問	博士課程進学を望む企業は日本でどれだけ存在するのか。
回答	世界では企業のグローバル化が進み、イノベーションが加速している。産業界はこれを担う高度な人材を世界から求め出した。これまで日本では博士号取得者の活躍の場は大学や研究所に限られていたが、これからは米国のように活躍の場が飛躍的に拡大すると考えられる。研究職だけでなく、多様な職種での活躍が期待される。また自ら起業する道もある。そのためには博士号取得者が自分の専門分野に閉じこもって仕事をするという考え方から、自分の専門性を活かして、他の分野とのコラボレーションによって独創的な仕事をするという考え方に切り替える必要がある。
質問	採用したい人材とは。
回答	企業でも自治体でも採用したい人材は、その人が入ることによってその組織が活性化すると期待できる人だ。専門分野のスキルだけでなく、チームで活動するためのコミュニケーション能力やコラボレーション能力が高く、人とは違った提案ができる独創的な発想法を持った人は採用側にとって魅力的だ。またそれらの能力を裏付けるものとして学生時代に様々な分野でアクティブに活動できた人は採用したい人材だ。

野家「教養と就活の関係と無関係」講義内容に関する質問・コメント

Ⅰ．教養とは何だろうか

質問	教養＝哲学のように考えていたのですが、今日のお話を聴いてそうでもないのだなと感じました。
回答	狭い意味での哲学は、教養のほんの一部にすぎません。少なくとも現代においては、科学知識のない人を教養人とは呼べないでしょう。私は、科学リテラシーと社会文化リテラシーをともに身に着けることが、現代人の教養だと考えています。
質問	教養について独自に定義していらっしゃり、とても感銘を受けましたが、そのような教養の状態に至るには、自分の判断等にかかわる知識が必要だと思います。そういった意味で古典的な教養の定義も否定できないと思いました。
回答	もちろんその通りです。文学や芸術を中心にした古典的な教養の定義は人間形成の上で無視できません。ただ、現代人の教養はもう少し広いパースペクティヴから考えられるべきだ、というのが私の今日の話の趣旨でした。
質問	昔から教養について盛んに議論されていたのに、今日、改めて教養を考え直すという流れがあるのは不思議です。
回答	たしかに教養については古代の中国や西洋ではギリシア・ローマ時代から議論されてきました。ただ、現在の大学で「教養」を考え直す論議が盛んなことには理由があります。日本では1991年に大学設置基準の規制緩和がなされ、それに伴いほとんどの国立大で「教養部」が廃止されました。それによって、どのような形で教養教育を行うかは、各大学の方針に任されることになったのです。しかし、残念ながら理想形にはほど遠い状態で、いまだに議論は続いています。本学でも平成26年度から教養教育に関わる組織改革がなされますので、皆さんも関心をもって見守っていただくと同時に、大いに注文をつけていただきたいと思います。
質問	「歴史と社会の中で自分の現在位置を示す地図」とは具体的にはどのようなものになるのでしょうか。「歴史の中で自分の現在位置を示す地図」の場合は自分が生まれるまでや今に至るまでの歴史を知り、どのような歴史の流れの上に自分が存在しているのかを理解している、というようなことを指すのでしょうか。
回答	基本的にはそのように考えてよいと思います。とくに現代史とアジア地域との国際関係が自分の現在位置を知るためには重要です。それと新聞やテレビニュースで現代社会の中で何が問題になっているのかをチェックすることです。その上で、環境問題や生命倫理の問題など、「持続可能な社会」を実現するために自分に何ができるのかを考えてほしいと思います。
質問	教養というのは、百科事典に書いてあるようなことを暗記するということなのでしょうか？本来大学の役割とは高等教育以上の専門性の高い分野を学ぶ場であったはずです。現在のテストなどの点数を指標にしたものでは、教養というのは育まれないと思います。作家のミヒャエル・エンデの言葉に「教養とは、質の繊細な分別能力である」というものがあるように、私はそれは座学で学ぶべきものではないと思います。
回答	もちろん百科事典を暗記しているからといって教養人とは呼べません。エンデの定義は、おそらくパスカルの「幾何学の精神」と「繊細の精神」の区別に由来するものと思われます。つまり、繊細の精神とは微妙な差異を判別する判断力のことです。たしかにこれは「座学で学ぶべきものではない」かもしれませんが、座学で学べることを徹底的に学んだあとで初めて見えてくるものでもあります。（野家）
質問	教養というものは自分の為のものだと思いますが教養をもつ者は社会の為になるのでしょうか。社会の為になるから教養をもっていると言えるのでしょうか。
回答	「自分の為」と「社会の為」は別に対立することではないと思います。私は、現代人の教養の二本の柱は、自分の考えを明確に表現できる＜知力＞と他人を理解し協力し合う＜共感力＞だと考えています。だとすれば、自分の為と社会の為は、表裏一体のものと言うべきでしょう。（野家）

Ⅱ．教養教育について

質問	日本人は何か他人の目線（たとえば親や友人、教師など）ばかりを気にして、自分主体で自分のやりたいことに積極的にチャレンジする姿勢があまりないように思える。そしてそのことが就活ひいてはグローバル人材となる過程での足枷となっている気がする。これは日本の制度的、特に教育システム的な問題だろうか？それとも単なる日本人の性格だろうか？意見をお伝え下さい。
回答	「空気が読めない（KY)」という言葉が流行ったことがありますが、日本人が空気を読み過ぎるのは、教育システムと日本人の性格の両方だろうと思います。特に義務教育の段階では、主体性やチャレンジ精神を培う機会が少ないのが大きな問題です。本学では「基礎ゼミ」のプレゼンテーションやディスカッションを通じてそうした能力を育成して行きたいと考えていますので、積極的に活用してほしいと思います。
質問	大学1、2年のうちは全学教育という一般教養科目を受けるとされるが、「その教育を受ける＝教養を身につける」ことにつながるのか疑問である。私は、教養を身につけることにはあらゆる要素を含むと考える。人とのコミュニケーションとか、専門以外の科目を学ぶこととかである。教養を身につけることとはどういうことか探りたい。
回答	おっしゃる通り、一般教養科目の単位を取れば教養が身につくわけではありません。一般教養科目は、あくまでも「教養」のカタログと考えてください。それによって触発された自分の興味や関心を主体的に拡大・深化させることによって、はじめて教養は身につきます。

質問	就活に必要な教養を養う手段として、特別な訓練は必要ないとあったが、小・中の義務教育において例えば自分の意見を発表したり、好奇心を養うための授業があっても良いと思う。もちろん普段の授業や生活でもこれらの力は身につくと思うが、義務教育の間に時間を取る必要があると思う。
回答	たしかに、義務教育の段階ではそのような「特別な訓練」が必要だと思います。「ゆとり教育」はそうした能力の育成を目指して始まったものですが、残念ながら腰砕けに終わってしまいました。本学の「基礎ゼミ」や「展開ゼミ」を通じて、ぜひそうした訓練を積み重ねていってほしいと思います。
質問	パンキョーでヘーゲルの求める教養を獲得するのは難しいと思う。
回答	いかにもその通りですが、ヘーゲルが求めていたのは、当時の近代市民社会を生き抜くための市民の基本的技能でした。ですから、それをそのまま受け取るのではなく、現代に置き直して考える必要があります。私の考えでは、現代人の教養の二本の柱は、自分の考えを明確に表現できる＜知力＞と他人を理解し協力し合う＜共感力＞にほかなりません。これならば、パンキョーの授業でもそのきっかけをつかむことができるのではないでしょうか。その手がかりをどのように拡大・深化させるかは、皆さんの努力次第です。
質問	講義のとおり人文知／科学知はもちろん必要だと思う。（スライド 11）しかし、そのような学際的な機会を実際問題どう設けるのか。就職活動に煽られる中、自身の専門だけでなく他の専門を学ぶ余裕がどれだけ持てるか。
回答	たしかに私たちの頃に比べると、最近の学生は忙しくて余裕がありませんね。ただ、「学際的な機会」でしたら、本学では「サイエンス・カフェ」や「リベラルアーツ・サロン」、あるいは各学部が主催するシンポジウムや講演会など、さまざまな機会を設けて参加を呼びかけています。ぜひ HP などで探してみてください。また「他の専門を学ぶ余裕」については、次のような J.S. ミルの言葉をお伝えしておきましょう。「人文系の学者が自分たちの住む世界の自然法則や特性についてまったく無知になれるほど、また科学者が詩的情操と芸術的教養を欠いてしまうほど、われわれの精神はそんなに貧弱ではありません。」（J.S. ミル『大学教育について』岩波文庫、2011）
質問	教養教育のスタートは大学からで良いのか？大学入学時までに各自が教養を身につけ、大学ではたっぷりと専門教育に時間をかける、という方が大学にとってはむしろ効率が良いのではないか。
回答	教養教育と専門教育は別に対立するものではありません。私は一定の専門教育を受けた段階で必要になる教養というものもあると考えています。したがって、大学院のレベルで必要な教養教育というものもあるのです（実際、大阪大学の大学院では、そのような講義を設けています）。ですから、単なる効率の問題ではありません。（野家）
質問	教養科目を受けることは教養を身につけることに直結するのか？
回答	はっきりいえば「直結」はしません。ただ、大事な手がかりを与えてくれます。（野家）
質問	大学で学んだ教養知識とそれを活用する知識で社会に貢献するというが、大学生活で教養教育で得た知識を生かせるような場はあまりないのではないかと思う。実感が湧かなければ勉強のやる気もあまり起きない。
回答	「教養知識」という言葉はあまり耳にしませんが、教養は暗記科目のような「知識（knowledge）」ではありません。むしろ、「知恵（wisdom）」と呼ばれるべきものです。つまり、意図的に活用するものではなく、困難に陥ったとき、壁にぶつかったとき、トラブルに巻き込まれたとき、そんなときにおのずと働いて進むべきし方向を示唆してくれるのが教養です。ですから教養は「勉強のやる気」の問題というよりは、自分が何を目指しているのかを見つめ直し、そのためになすべきことを考えることが出発点です。
Ⅲ．教養と就活について	
質問	教養とは一般社会で様々な人々が身につけようとするからこそ成り立つと思った。だからこそ人間力の形成とは他人に認められるためにあるのだから就活に影響すると聞いていて思った。
回答	「他人に認められるため」というよりは、「他人と共に生きていくため」と言うべきでしょう。その意味で、教養の就活への影響は直接的ではなく、あくまでも間接的なものです。
質問	大学生活を送っていれば教養が身に付くというが、教養が足りない人もいるだろうし、教養があっても就職できていない人もいるだろうと思う。つまりそれは、教養と就活は関係がないということなのか。あったとして、われわれは何をすべきなのか。王道はなくても、アドバイスのようなものが欲しい。
回答	教養は暗記科目ではありませんので、その点で教養は就活と直接的な関係はありません。ただ、教養＝人間形成ですから、間接的な関係は大いにあります。まずは大学生活で全力で打ち込めるものを見出だし、それを間口として興味や関心を拡大・深化させていくこと、要は大学４年間を充実したものにし、漫然と過ごさないことです。
質問	大学で勉強をするよりもサークル活動やアルバイトで経験を積んだ人を求めている企業が多いように感じる。そういった社会の中における大学の立ち位置とはどうあるべきか？またそのような企業をどう思うか？
回答	大学の役割は先端的な学問研究と高度な専門教育を通じて社会に貢献することです。したがって、企業への人材派遣は大学の目的ではなく、あくまでも結果です。大学で培うべき教養は、自分の考えを明確に表現できる＜知力＞と他人を理解し協力し合う＜共感力＞という二本の柱から成り立っています。採用に当たってサークル活動やアルバイト経験を重視する企業は、後者の能力を優先して求めているのでしょう。企業はそれぞれの経営方針に基づいて採用を行っているわけですが、私としては知力と共感力のバランスがとれた人材を発掘してほしいと思っています。

質問	「就活に役立つ？」などというサブタイトルをつけている時点で下心しか見えてこない。教養というふわふわしたものを身につけようと思ってつくものではないし、数値的に評価できるものでもない。つまり、大学から始めても遅いのでは？それまでペーパーテストの成績しか求められてこなかったんだから。
回答	私たちの「下心」を見破ったのは、さすがです。しかし、「大学から始めても遅い」と諦めるのは早すぎます。数値的に評価できるものではないからこそ、市場から相対的に独立した大学という空間で学ぶ価値があるのです。今からでも決して遅くはありません。ご健闘を祈ります。（野家）
Ⅳ．大学生活について	
質問	教養を育むために充実した大学生活を、ということでしたが、一般的に教養を育むと言われている読書についてはどうお考えですか。
回答	読書は教養の基盤です。読書を通じて私たちは他人の異質な考えに触れ、別の人生を追体験することができます。ゆっくりとさまざまなジャンルの読書に取り組める時間は、大学時代しかありません。私たちが作成した『読書の年輪』などを参考にしながら、ぜひ図書館を活用してください。
質問	教養を身に付けるにあたって、芸術鑑賞は必要ですか。もし必要ならば、どういったことをすれば良いのでしょうか。
回答	もちろん、美術や音楽などの芸術は人間文化の最高の精華ですから、読書と共に芸術鑑賞は教養を身に着ける不可欠の手段です。さいわい、川内地区は川内萩ホール、宮城県美術館、仙台市博物館などの施設が身近にある絶好の文化環境にあります。川内萩ホールでは多くのコンサートが年間を通じて開かれていますし（HP で検索できます）、宮城県美術館の企画展は学生証を提示すれば、半額で見ることができます。大いに楽しんでいただければと思います。
質問	教養を得るためには結局のところサークルとかバイトをしながら普通に大学生活をおくってればいいのかということなのかよくわからなかった。
回答	「普通に」というのが「漫然と」を意味するのなら、それは違います。サークルもバイトも勉学と並ぶ重要な大学生活の一環ですが、常に問題意識をもって興味や関心のアンテナを立てながら、何事にも真剣に全力で取り組むというのが、大学生としての「普通に」の意味ではないでしょうか。
質問	今の大学生活を精一杯楽しもうと思ったのですが、これでうまくいくでしょうか？
回答	『論語』に「これを知る者はこれを好む者に如かず。これを好む者はこれを楽しむ者に如かず」とありますから、楽しむことは大変重要です。ただし、何事でも浅薄な楽しみ方ではなく、真に楽しむことができるためには、それなりの研鑽と努力が必要です。「人間は努力する限り迷うものだ」（ゲーテ『ファウスト』）ということをわきまえた上で、「精一杯楽しむ」のであれば、大いに結構なことだと思います。
質問	指摘された能力、求められる人物像などは自分たちもよく耳にし考えていることのように思います。自分の場合、問題なのはそこから考えたこと、解決策を実行に移す行動力がないことです。この消極性をどのように改善すればいいでしょうか。何かアドバイスを頂けますか？
回答	難しい質問ですね。あなた自身の問題ですので、適切なアドバイスはできかねます。ただ、一日に本を50頁読むとか、授業に出たら必ず一つは質問をするとか、簡単な義務を自分に課して、それを実行することから始めてみたらいかがでしょうか。（野家）
質問	教養を身につけたり、グローバル人材になるにあたって、読んでおいた方がいい本や、経験しておいた方がいいことを教えてください。
回答	「読んでおいた方がいい本」については、私たち教養教育院で作成した『読書の年輪』をぜひ参考にしてください。また、若いうちに「経験しておいた方がいいこと」は、留学や旅行などを通じた外国体験です。最近の学生は「内向き」で外に出たがらないと言われますが、外国に出て日本や日本人を外側から見ることをお勧めします。（野家）
Ⅳ．その他	
質問	高校でも、研究者と議論する機会が欲しいと思った。
回答	どこの大学でも現在は「出前授業」のような形で高大連携の試みが行われています。また、本学の「サイエンス・エンジェル」（理工系の女性大学院生のグループ）は、出身高校を訪問して研究の面白さや楽しさを高校生に伝えています。（野家）
特に回答を必要としないもの	
教養については色んな人が色んなことを言っていて、とどのつまりよく分からないと思っていました。しかし先生のお話は教養の定義がしっかりとしているだけでなく、教養を身につけることでどのように生きることができるかまで述べられていて、自分の一つの指標とできるように思えました。	

“教養の深い人間”は昔から（大昔から）理想とされてきたと思われますが、それはつまり教養というものが人間としての総合力、人間力を表すものだからだと思いました。結局、いつの時代でも求められるのは総合力のある人間、人間力のある人間なのでしょう。
教養が自己像を映し出す鏡だと考えた先人の主張は非常に興味深い。満足な教養教育を受けることで、社会が求める理想の人物へと成長することができるのだと考えられる。
就活に必要な教養なるものは、日々の暮らしで養われるというお話は、今までの自分の感性としては、奇妙なものですが、妙に納得できる内容で良かったです。
私はいままで教養という概念について掘り下げて考えたことがなかったが、この講義で教養の重要性を明確に認識することができた。
教養は知識ではなくて内面からにじみでるものだと思った。阿部謹也さんの、教養は社会の中での自己認識であるという意見に賛成である。自らのアイデンティティがない人はふわふわしていて、落ちついた感じがしないからである。
一口に「教養」と言っても、いろいろな人がいろいろな考えを持って定義してきたということが分かった。また、文系・理系問わず、人文的なこと、科学的なことを知っておくのは重要だと改めて実感できたので、これからも授業をしっかり受けようと思った。
就活にも教養にも「王道」はないというところで、本当にそのとおりだと思った。決まったパターンはないが、教育も何かプラスにはなっているのかもしれないと思った。
質疑応答で回答済み
採用活動の経験をお持ちとのことでしたが、面接等の場面でどのようなところから“型通りの応答”だと感じるのでしょうか。
自分に教養が身に付いたと実感できる日はくるのでしょうか。教養に特別な訓練が必要ないならば、もしかしたら知らずのうちに教養を身に付けることなく学生生活を終えてしまうかもしれません。
自己認識ができ、他者の眼差しを正確に知りえるために効果的な努力とは何をいうのでしょうか。よろしくお願いします。
就活、採活に必要なのは単に学力だけではなく、日々の生活で培われる人間力・自己認識であり、勉学に励みながら充実した日々を送りたいと思った。
採用活動時には、個人的にどのような人を採用したいと思うのか？「ドッシリとした立ち居振る無い」とおっしゃっていたが、教養がどのようにそれに関わっていくのか詳しく聞きたい。
採用する立場から見ると、具体的にどんな人物（どんな能力を持っている）を採用したいと思ったか。
今回の合同講義のタイトルに“就活”を入れたのはなぜか。たんに「教養はなぜ必要か」でも良かったし、就活の代わりに“人生”や“恋愛”でも良かったと思う。ただただ、学生の興味を引きそうだったから、では悲しいです。
他者の眼で自分を認識できるようになるのは非常に難しいと思う。

平成25年度　教養教育院セミナー報告

【教養教育特別セミナー】
東北大学のチャレンジ ～グローバル時代の教養教育

【総長特命教授合同講義】
教養はなぜ必要か ―就活に役立つ？

平成26年7月　発行
東北大学教養教育院
Institute of Liberal Arts and Sciences, Tohoku University
http://www.las.tohoku.ac.jp
e-mail info@las.tohoku.ac.jp

Waterless Printing Naturally
このパンフレットは環境に配慮した「水なし印刷」により印刷しております。

VEGETABLE OIL INK
環境にやさしい植物油インキ「VEGETABLE OIL INK」で印刷しております。